
ラキオス王国の王妃

夢花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラキオス王国の王妃

【Nコード】

N9085K

【作者名】

夢花

【あらすじ】

ラキオス王国はベンゾラ大陸の中心的存在と言われる国。19歳の時に許嫁がいたことを知らされ、抵抗も虚しくクレアはそのラキオス王国の王であるファリスとあっさり結婚させられた。

第1話 王妃（前書き）

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

この小説が目にとまってくださっただけでも奇跡なのに、読んでくれるなんて嬉しすぎます。

最後までお付き合い願います。

第1話 王妃

そもそも政治とか地位とそういうのに興味はなかった。

誰にどんなことを言われたって興味はなかった。

だってできないんだもん。できないことに興味を持てと言われたって無理がある。

ってかそもそも夫の手伝いをする事自体が嫌だ。

「クレア。いい加減にしろ」

「嫌なもんは嫌」

「クレア！」

声を荒げるのは国王、もとい私の夫。

政務で忙しくて今日中に終わらなさそうだから、手伝わせるために部屋から私を引っ張りだして来たのだという。正直って超迷惑。

「大体私がやったらまたごっちゃになるよ？　それでもいいのならやってあげるわよ存分に」

「そんなことは承知の上でお前に頼んでる。正直いったらお前の手を借りるよりもゴキブリに手伝わせたほうがまだマシだ。今はそれくらい切羽詰まってる状況なんだ」

なんてムカつく野郎だ。

「んなこと言うんだったら手伝ってやんないもんね!!」
「ほお。そんなこと言っていていいと思っっているのか？」

カタンとゆっくり椅子から立ち上がるファリスを見てビクッと体が跳ねる。いや、別に怖いからとかじゃなくて、そういうことじゃなくて。

「いやいやいやいや! ちょ、ちょっと待ってファリス落ち着こう!?! ごめん、ごめん私が悪かった! 私が悪かったからお願いだから近づかないでーっ!!」

私の願いも虚しくファリスは遠慮なく私の腰に腕を回して体を密着させる。これくらいで心拍数が上がる私はバカなの? そうなの? 執務室という部屋なので誰も入ってこないわけでもなく、できれば離れてほしい。大体普段は冷たい奴のくせしてこういう時だけ色気つかってくるんだから!! ただでさえ綺麗な顔なのにそこに色気が含まれると目眩がしちゃう! お願いだからやめろーっ!! と私の心の叫びが聞こえたのかバタバタバタと慌てた様子の足音が響いて来る。しかしファリスは一向に離す気配がない。マジでやめてほしい。

バンッ、と勢い良くドアが開いて入って来たのはルド。

「.....」

私達の姿を見てルドは頬をほんのりと染めるとものすごい早さでドアを閉める。

いやいやいやいや！！

「待って！ ルド待って！！ 戻って来て！！！」

「戻ってこなくて良い」

「いや戻って来て！！ ルド！！ これは命令よ！ 戻って来なさい！！」

私の『命令』という言葉にルドの足音は一瞬止まり、またこちらの部屋に足音が戻ってくるのが響く。私はファリスから飛び退くと、元々座っていた椅子に腰を下ろして不満そうな顔をした。その表情を見てなぜかファリスが笑い出す。

くっ、その顔は反則すぎる。侍女達がみたらノックアウトに間違いない笑顔だわ。

カチャ、とドアが開く控えめな音がして、先程速攻で行ったルドが顔を出した。

「す、すみません。クレア様のお叫びが聞こえたので来てみたのですが、邪魔して申し訳ありませんでした」

「まったくだ」

「まったくじゃないわよ！ いいのよルド。いいタイミングで入って来たわ。こんな猛獣の側で政務なんて出来やしない！ 部屋に持って帰るから一緒に来て！」

机に散らばっていた紙やファイルを両手に抱えると、出来るだけファリスと距離をとったままルドと一緒に扉に向かう。すると、

「クレア。また今夜な」

「絶対に来るな」

吐き捨てるように言うとなら、ファリスは不気味な笑みを浮かべた。ちつ、絶対に扉塞いでやるわ。

ファリスを背に私とルドは部屋を出て私の部屋に向かう。

……っていつても隣の部屋だけだ。

強引に扉をあけてまた乱暴に閉めると、私の部屋で待機していたステイラとジェシカが驚いて顔をあげる。ああもうイチヤイチヤしてたんでしょどうせ！

「はいはい。恋人タイムを邪魔して悪いわね。あの部屋じゃしんど、じゃなくて、精神が持たないから移動してきたの」

「クレア様！」

頬を染めて叱責するジェシカはちっとも迫力がない。一方のステイラはまったく気にしていない様子で私の腕から書類を受け取った。……この正反対の二人が一体どういう経路で恋人になったかは謎だ。

机に乗せた大量の資料を見てジェシカが首を傾げた。それを見てステイラが耐えきれないというように手を口に当てて横を向く。ああはいはい可愛いねー。まったくこいつらは。

「クレア様。その書類はどうなさったのですか？ 政務ならファリス陛下に任せてあったはずなのに．．．クレア様の政務が終わったらビシバシと作法を教え込むはずでしたのよ？」

「ファリスに聞いて。私だってわけがわからない政務をやりたくてやってるわけじゃないっつの！」

書類をファイルごと持ち上げて地面に叩き付けると、その拍子で中身がファイルから飛び出し、ひらひらと空中を舞う。慌ててルドとステイルが拾い始めるが、あまりには脱力していた私は拾う気がなかった。

後から二人に悪いことをしたと思ったけれど。

腕の中に顔をうずめていると、横から心配そうにステイラが覗き込んだ。

「クレア様。政務というものは王妃が無理になさることではありません。どうしてもというのでしたら俺の方からディナルさんに言うておきましょうか？」

「気持ち嬉しいけど平気よ。ディナルだってファリスに絶対服従なんだから私の言い分なんて聞きっこないもの」

「そうかもしれませんが．．．．」

納得しないようにステイラが眉を寄せる。とっても頼もしくて強い騎士なんだけど時々私に気を遣い過ぎだと思う。っていうか優しいのよねー。別に悪いことって言ってるわけじゃないんだけど。私

の騎士なんだし。

「本当にファリスも思い詰めてた様子だったから、この際は仕方がないから政務をするしかないわ」

はぁ、と溜息まじりに言う隣にいるジェシカが困惑した表情をした。

うーん。美人だからどんな表情でも綺麗だねー。

「ですがクレア様！ 講義の時間ですよ？ どうなさるおつもりですか」

「講義なんていつでもできるけど政務は今やらないとだめっていうのが混じってるのよ？ ジェシカ。嫌だけど講義は明日倍の時間でやるわ。……嫌だけど」

『嫌だけど』を二回言ったにも関わらずジェシカは満面の笑みを浮かべた。あぁちよつと今墓穴掘ったかしら。

はぁ、と溜息について私は机に乗せてあった資料の山を読み始めた。

第1話 王妃（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第2話 許嫁（前書き）

今回も最後までお付き合い願います。

第2話 許嫁

この世界はベンゾラという大きな大陸でできている。

五つの国で成り立っており、その中心的な存在がラキオス王国。ベンゾラ大陸の中心に位置し、まるで守られるように四つの国に囲まれている。北西にはロースディバ国があり、その隣にはオルート国。南西にはウルツシア国があり、南東にはハシェンド国がある。

国の名前から分かる通り王がいるのはラキオス王国だけである。元々はロースディバとウルツシアも王国であったが、二人の王の仲が極端に悪く、いつでもお互い戦争をしかけていたため、その二つの国の王の座というのは剥奪された。それ以降は戦争もなく、仲が悪い国もなかったラキオス王国のみが残ったのだった。

ラキオスのみが王国として残って約八百年。

ラキオスでの王は世襲制であるため、特例の者以外はここでの王はラキオス王国が生まれた頃から、全員アステルカ家の者がつとめている。当然ながら小さい頃から英才教育を受けて来ており、常に人の上に立って来る境遇なので殆どが偉そうな態度を取るが、内面は孤独で悲しいと感じている人が多い。

それを支える人が必要だからなのか、当然のように二十には王妃を迎えなければいけないのだった。

殆どの王の場合は自分で誰かを見つけ出し、その人の経歴や全てを把握の上で王妃に向かえるというパターンだが、幼い頃から決まっている場合、所謂『許嫁』がいる場合もある。

現在の王、ファリス・アステルカの場合は、後者だった。が、彼の場合は二十になっても許嫁に会ってすらいなかった。

今から二年前、彼が25歳の時。そして王妃、クレアが19歳の時に二人は初めて出会ったのだった。

いつものように政務が終わり、自分の部屋へ向かっている所、宰相であるサマヘルカ・ラスベスと途中で会ったのである。

その彼の表情を見て、思わずファリスが声をかけた。

「サマヘルカ？　どうかしたのか。深刻そうな顔をして」

声をかけると、サマヘルカは困ったように眉を寄せた。何のことが分からずじつとこちらを見ているファリスを見て、思わず溜息が口から漏れる。ファリスが眉をあげる。

「なんだその溜息は」

「陛下。分かっていらっしやらないのですか？」

「何をだ」

二度目の溜息にファリスがムツとする。

「いい加減会ってください。あなたの許嫁と」

「・・・・・・・・その話か」

一気に脱力したように言うと、ファリスはまた自分の部屋へ行く為に歩を進め始める。慌ててサマヘルカが後を追うが、ファリスは気にも留めずかずかと歩き続ける。

部屋に入ると、さすがにサマヘルカは入って来ることができないため歩を止めるが、それでもドアの外に立ち続ける。それを見て今

度はファリスが溜息をついた。この男は、こういう所だけは本当に頑固だと思う。

ムスツとした表情のサマヘルカの視線が耐えられなくなったのか、ファリスは立ち上がるとサマヘルカがいる入り口のドアを閉める。反対から『陛下!』と少しいらついた声が聞こえるが無視を通す。ドアの反対側には自分の騎士の二人がいるから無理矢理入ってくる事はないだろう。

閉め出された方のサマヘルカは扉を殴りつけたい気持ちを抑えて、口を開けた。

「陛下。本来ならばもう五年前に結婚して王妃を迎えているはずなのですよ!？」　ラキオスの国民だけではなく、ベンゾラ全体の人々が陛下は一生王妃を迎えないのではないかと不安がっているのですよ!!!」

「そう思いたいのならそう思えば良い」

扉があるためファリスの声がくぐもって聞こえて来る。

しかし彼のその言葉に堪忍袋が切れたのか、サマヘルカは心配そうに自分達のやり取りを見ている騎士二人を無視して扉を勢い良く開けた。騎士のディナルとロードがあまりの事態に驚いて動けず、ファリスも何かを言う前にサマヘルカははずかしくと遠慮なく国王の部屋へと入り込んで行く。

兵士が見たらすぐに身柄確保という大変な事態を宰相を起こしたことで、驚きで固まっている三人を差し置いてサマヘルカはファリスの胸ぐらを掴む勢いで彼にせまる。

「いい加減にしてくださいと言っているのです!　私はもう八年も

陛下に仕えておりますがここまできたら限界でございます！ 会う
気がないのでしたら私が無理矢理引っ張ってきます！ 良いですね
！！？」

あまりの迫力に思わず頷いてしまう所だった。

しかしサマヘルカは彼の返事も待たずに激怒したまま部屋を去っ
て行く。結局何もできなかった騎士二人はその後ろ姿を呆然と眺め
ているだけ。しかしすぐに我に振り返りロードが慌てて追って行く。

「サマヘルカ様！」

「もう限界だ！ 陛下がそのつもりなら私も容赦はしない！ 引っ
張ってくる！ 絶対に引っ張りだしてやる！」

「サマヘルカ様、落ち着いてください！ らしくありませんよ！」

「らしいらしくないはこの際関係ない！ もう我慢ができない！
許嫁が誰かは分かっているから連れて来る！」

「今からですか！？ もう夜中ですよ！？」

「夜中でも昼でも早朝でも叩き起こして連れて来る！ 二十から五
年過ぎても城を訪ねてこないということはきっと王妃にも陛下にも
興味がないからもしれないが、絶対に会ってもらおう！ 許嫁が嫌い
な二人同士、いい加減にしてもらいたい！」

「ちょ、サマヘルカ様！」

部屋の中にいるファリスには見えないが、部屋の外に立っていた
ディナルは二人のやり取りを見ておかしそうに顔に笑みを浮かべる。
普段クールで冷静沈着な彼にしては珍しい表情だ。

サマヘルカが嵐のように去って行った後に、ファリスは思わず大
きな溜息をした。この八年間で、あそこまで怒った彼を見たのはは

じめてかもしれない。しかも王の自室に入ってきた。一般の人間だったら身柄を確保されて牢獄に放り込まれている所だ。

ファリスの表情から何を読み取ったのかは分からないが、未だに廊下で言い合っている二人をチラッと見つめてからディナルが口を開いた。

「陛下がもう少し素直になられたらサマヘルカ様もあそこまで苦労はしないでしょうに」

「何が言いたい、ディナル」

「独り言ですよ」

ムスツとした表情のファリスをおかしそうに見つめて、ではでは、と扉を閉める。

こんな悪戯小僧のような態度で国王に接することができるのは、恐らく第一騎士であるディナルの特権だろう。ロードも騎士であるが、身分は第二騎士。当然ディナルよりは身分が低く、ディナルもそうではあるが、ファリスには絶対服従のために意見をするのではない。ディナルだけは宰相以外に国王に口出しをすることができる存在なのかもしれない。

ディナルが閉めたドアを不機嫌そうに見てからファリスは疲れたように溜息をついて、ベッドに潜り込んだ。

第2話 許嫁（後書き）

三話かそれ以上、くらいは過去の話となります。ご了承ください。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第3話 対面（前書き）

少し長めになっています。

第3話 対面

「ブッ!!」

目の前にあった微笑が瞬時に固まった。ヤバいことをしたと思った。

ただでさえ居候の身なのに、調子に乗ると追い出されるかもしれないって昨日悩んでたばかりなのにっ……! ヤバい! これはちよっと、いやかなりヤバいかもしれない……!!

「し、シフォナ! ごめんなさい! 本当にごめんなさい!」

「……………」

ズババババと土下座体制に入りひたすら頭を下げる少女を、シフォナと呼ばれた少女は無言に見下ろした。固まったままの微笑が恐怖心を煽ぐ。恐る恐る顔をあげると、ものすごい早さで体が放り投げられた。

ああ、もう、私のバカー……………よりによってシフォナを怒らせるなんて。

しかもなんか無言で近づいて来る! その笑顔が怖い! 怖いよっ……………!!

「クレア?」

「はiiiiiii!」

優しい声が逆に怖い。ヤバい。これは真剣に怒ってる。顔に水を吹き出しただけでそんなに怒らないでよ！

「今のはわざと？」

「めめめ滅相もございませんのですーっ！っ！」

「そうよね。あたしに逆らうほどバカじゃないものね」

「はいいいいいいい！」

瞬時に再び土下座体制に入るクレアと呼ばれた少女をシフォナは見下ろす。いや、見下す。非常に美しい顔立ちをしているが、既に微笑ではなくなった彼女の表情は第三者からしても背筋に悪寒が走る。

絶対に怒らせたくない人ベストスリーには入るだろう彼女のその様子を、クレアは一体何回見て来ているのだろうか？

はぁ、と溜息が聞こえてクレアは恐る恐る顔をあげる。コツコツコツという音とともにシフォナが遠ざかり、元々座っていた椅子に腰を下ろした。普段の彼女だったらそこで罵倒をし始める所なのに、なぜ？

いや、決して罵倒されたいわけではないのだが。

「あ、あの・・・シフォナ？」

「いいわ。今は貴方と言い争ってる余裕はないのよ。重要な話だから」

「え、あ、うん・・・あの、もう一度説明してくれない？　ちょ

つと頭の中が混乱状態に陥ってて……」

「きちんと説明してって言われてるからね。ちょっとここ座って」

我ながらものすごいスピードでシフォナの前に座ると、シフォナは一瞬呆れたように目を細めたけど話しだした。

「だからね。もう一度言うけど……水飲まないでね」

「はい」

「貴方には許嫁がいるわ」

うんやっぱり同じ言葉だ。

私はさっきこの言葉に水を吹き出して、シフォナ様の顔に吹き出して殺される所だったんだ。くっ、そこまで驚くほどのことでもなかったわ。……いややっぱり驚くべきことよ。うん。だって初めて聞いたし。

……はじめて……

「そうよ！ そんな、許嫁がいるなんて初めて聞いたわよ！」

「何がそうなのかはさておき、そりゃそうよ。一度も言った事なかったもの」

「なんで!？」

「面倒くさくなりそうだったから」

ああ．．．と私は実際に崩れ落ちる。そうだったそうだった．．．
．．．そういう重要なことは自分に関係なかったらどうでもいいって
人だったわ、この人。しかも面倒くさくなりそうだったから？ サ
ラリと言ったわよサラリと。
いや待ってよそれ以前に。

「っていうか、なんでシフォナが私の許嫁のこと知ってるの？」
「貴方のお母様から聞いたのよ」

ああああああ！！！！ もうわけが分からない！！ 許嫁がいる
と知らされるわ、同居人はサラリとそれを言い渡すわ挙げ句のはて
に母が私じゃなくて同居人にそんな大切な情報教えてるし！ 確か
に昔からちよつとずれてる人だったけど何それ！？ 私の許嫁のこ
とを私じゃなくて一緒に住んでる人に言う！？

ああもうなんか疲れた。
ぐったりとした私の様子にシフォナは首を傾げた。

「その様子じゃ何も聞いてないのね」
「何も聞いてないよ．．．初耳だよ．．．」
「まあ仕方がないからあたしが説明するわー」

「頼もう！！」

シフォナが言い終わるや否や、ドアの反対側からものすごい声が
聞こえて来た。

「それで勝手に行ったのか」

「この際仕方がないと思ったのでしよう。僕の説得に応じて昨日じやなくて今日にしてくれたんですが……」

大広間に響いたロードの言葉にファリスははあ、と深い溜息をついた。

サマヘルカは、結局昨日の夜はロードの説得に応じて城に留まったそうだが、今日の朝は朝食を食べ終わってすぐに城を出て行ったという。それもファリスの許嫁を城に連れてくる為に。

確かに許嫁のことはなんとかしなければならないと分かってはいたが、まさか彼があそこまで必死だとは思わなかった。再び溜息が出て、ファリスは先程まで目を通していた書類を机に置いた。

覚悟はしていたことだったが、政務というのは大変な事だった。

殆ど一人で全てを処理するため、身体的にも精神的にも疲労が溜まる。幼い頃からそういう状況だったので恐らく一般の人間よりは精神的に強いものだとは思っているのだが、もしも一般人である王妃がこの政務をやるといふのなら……精神的に参ってしまうだろうと思う。

まあ王妃は国王と違って政務は強制ではないのだが、やはり人手が足りない時は彼女も手伝うことになってしまふのだろうか。

「ところでロード。俺の許嫁っていうのはどんな奴だ？」

ファリスの言葉にロードは目を見開き、彼の隣に立っていたディナルは呆れた様に大きな溜息をついた。

「陛下。そんなこともご存知なかったんですか」

無感情で問うて来る彼に少しムツとしたが素直に知らないと言うと、今度はロードも溜息をついた。

許嫁という存在をすっかり打ち消していて会ったこともないのだから、こういう奴なのかは当然ながら分かるわけがない。

そんな彼の表情を見て、ディナルは少し待っててくださいと言って部屋から出て行く。恐らくどこかにある許嫁についての資料を取りに行ったのだろう。たとえ騎士であっても彼はそういう情報には詳しいのだ。

三分程でディナルは帰って来ると、ファリスにファイルを渡す。ファリスがそれに目を通しながらもディナルが説明をし始める。

「名はクレア・ロリオンと言います。下級貴族の両親の間で生まれましたが、二人は彼女が七歳の時に両親を深く憎んでいた男に襲われて殺されてしまっています。それ以降は幼馴染みであるシフォナという女性と同居しております。炎を司る能力だそうです」

「炎？」

「はい。下級貴族としては非常に珍しいですね。エレメントを操る

とは。上級貴族や最上級貴族、俺達騎士だったらまだ分かりますが、
・・・」

この世界の人々は全員が特殊な能力を持っている。

自然を操る力があれば触れずに物を動かす力がある。人の心を読む力もあれば、超音波を出す力もある。人それぞれ違う種類の能力を持っている、その種類は無限といってもいい。同様の能力を持っている人間がいれば、世界に一つしかない能力を持っている者もいる。

ディナルとファリスが言っているのはこの能力であり、クレアは炎を司る能力を持っている。四大エレメントと呼ばれ、階級が上のもの以外は持っていないと言われる炎、水、地、雷のうちの一つを彼女が持っている。

非常に珍しいケースだ。

因みに、ファリスはアステルカ家特有の何かを一瞬見ただけで全てを覚える能力を持っており、ディナルは地を司る能力、ロードは透視能力でサマヘルカは念力能力を持っている。

「・・・・・・・・ほかの情報は」

「はい。非常に強気でなんでもはつきりという、裏表がない性格だそうです。王妃にはうってつけの性格ですね」

「俺が一番苦手な性格だ」

「そんなこと言われましてもどうにもできません」

「分かっている」

「因みに非常に綺麗な容姿ということも聞いておりますが」

「・・・・・・・・そうか」

その瞬間ファリスの目に少しでも生気が戻ったことをディナルは見逃さなかった。

やはり陛下も男だと再認識させられた時だった。
その時、

「陛下！ サマヘルカ様が陛下の許嫁を連れて来たとー」

「陛下連れてきましたよ！」

「ちょ、ちよっと待ってよ！」

「まあせいぜい頑張ってねクレア」

「シフォナーっ！！」

兵士の声が聞こえたと思うとサマヘルカの未だに少し怒っている声が出て、その後に聞き覚えのない少女二人の声が出た。

ファリスが立ち上がると同時に扉が開き、兵士を入れた四人が入って来る。兵士は一度深く礼をしてからすぐに部屋から出て行く。サマヘルカは長い黒髪を腰まで伸ばしている少女の腕を強引に引っ張りながらファリスに近づいて来て、その後ろをおかしそうな笑みを浮かべながらも一人少女がついてくる。引っ張られている少女は何がなんだか分からず困惑した表情を浮かべている。

やはり彼女は自分に許嫁がいることに関しては不満なのか。

サマヘルカはファリスの足下まで少女を連れて来ると、やっとのこと彼女を腕を離れた。余程痛かったのか少女はサマヘルカを睨みながら腕をさすっている。するとそこで思い出したようにはっきりして、自分の方へと視線を移す。

綺麗な紫の瞳と目が合う。

ファリスは思わず視線をずらすと、口を開けた。

「はじめましてだな。俺がファリス・アステルカ。お前の許嫁だ」

第4話 連行

美しかった。

それが第一印象だ。

ディナルが綺麗な容姿だとは言っていたが、目の前に立っている女は『綺麗』という対象からは並外れている美貌を持っていた。いかにも柔らかそうな肌にサクランボ色の唇。深い紫の瞳はどれだけ見つめても飽きることはないだろうと思えるほどに魅力的な色だった。

同じことを考えているのか、隣にいるロードが惚けている。女に對しての感心は皆無といっていだらうディナルまでもが少し驚いた様に目を見開いている。

彼女と言い合っているもう一人の少女も充分『美人』に当てはまる顔をしているが、それでも、彼女のその美貌が普通だと思える程に少女は美しかった。

何を考えているのかを汲み取ったのか、サマヘルカがゴホンと咳払いをした。

慌ててファリスが我に返る。

が、彼が何かを言う前に少女が口を開いた。

「……………こくおう……………」

「のようね」

呆然としている少女の言葉に冷めている様子で隣にいる美少女が

言う。興味なさそうにあくびを漏らしているその美少女を見てファリスは少し驚く。自惚れというわけではないが、自分にまったく興味がない女というのは殆どいない。しかし彼女はチラリと自分を一瞥しただけで、それ以外は早く帰りたいのかずっと扉を見つめている。

「国王が許嫁とは．．．やるわね、クレア」

「いやいや！ 私が決めたわけじゃないし！　むしろお母さんが勝手に決めただけだし！　ってかシフォナ知らなかったの？」

「知るわけないでしょ。許嫁がいるって知らされていただけなもの」
「別に言ってくれてもいいじゃん．．．．」

「面倒くさかったから」

「えーえーそうですね！　面倒くさいですよね！」

開き直った様にクレアと呼ばれた少女が叫んだ所で、ファリスは口を開いた。

「取り込み中悪いが、君は誰だ？」

シフォナと呼ばれた女性に質問を投げかけると、彼女は一瞬とてつもなく面倒くさいことをしているような表情を浮かべてから、ファリスの前に跪いた。

むしろ今までどうして跪いていなかったのかが疑問かもしれない。そんなシフォナの様子を見てクレアが目を丸めた。どうやら彼女は国王の前に来たら何をするかは分かっているようだ。

クレアを横目で見てシフォナが話します。

「お初にお目にかかります、ファリス陛下。シフォナと申します。こちらにいるクレアの幼馴染みで、彼女のご両親がお亡くなりになった頃から彼女を引き取り、同居しております」

「今日彼女をここに連れて来たのは君か」

「いいえ。丁度許嫁の話进行クレアとしていた頃に、サマヘルカ宰相が訪ねて来たので、保護者として二人についてきただけでございます」

「能力は」

「幻覚でございます」

「そうか。分かった。面をあげてよい」

「はっ」

ファリスの言葉にシフォナは顔をあげると、ススッと下がった。それと同時にファリスがクレアに視線を移す。目が合うとビクッと彼女の肩が震えて美しい紫の瞳が見つめ返して来る。

すると、

「貴方と結婚する気なんてないから」

まっすぐと目を見ながら彼女は言い放った。

ものすごい綺麗な顔だった。

国王のことは遠くからしか見た事がなかったから、近くで見たら
どういう顔なのかは見当もついていなかった。『世界一の美貌』を
持っている噂される意味も分かる気がする。
すごい。

女の私よりも美しいってどういうことよ。

ん？ 待てよ。

許嫁に引き合わせるためにこのサマヘルカ宰相は連れて来たんだ
よね。しかも俺がお前の許嫁だとか国王に言われた……

「……こくおう……？」

「のようね」

いやいやいや！！ のようねとかサラリと言わないでシフォナ！
しかもなんか全然興味なさそうだし！ めっちゃ帰りたいそうだし！

「国王が許嫁とは……やるわね、クレア」

「いやいや！ 私が決めたわけじゃないし！ むしろお母さんが勝
手に決めただけだし！ ってかシフォナ知らなかったの？」

「知るわけないでしょ。許嫁がいるって知らされていただけだもの」
「別に言ってくれてもいいじゃん……」

「面倒くさかったから」

「えーえーそうですね！ 面倒くさいですよね！」

この子は本当にもう！

別にシフォナのことは嫌いじゃないし、むしろ好きだけど、そういう重要な事を教えてくれない性格をなんとかしてほしい。本当に。

すると私とシフォナがギャーギャーと言いつ合っていると、立ち上がっていた国王が口を開いた。

「取り込み中悪いが、君は誰だ？」

私を見ていないという事はシフォナに問いかけているということだ。まあ私の許嫁なんだから私の事を知らなかったらそれはそれで問題だけだね。と、そこでシフォナが跪いた。

ん？

シフォナが、跪く？

いやいやいや！ シフォナが跪くとか何！？ え、待ってよ！

シフォナが跪く所とか初めて見たし！ っていうか人に頭を下げることを知らないって子だからそれはそうなんだろうけど……ええ？

目を丸めて驚いている私を横目で見てからシフォナは口を開いた。

「お初にお目にかかります、ファリス陛下。シフォナと申します。」

こちらにいるクレアの幼馴染みで、彼女のご両親がお亡くなりになった頃から彼女を引き取り、同居しております」

うわー。シフォナの口から敬語が出たよ。なんかもうシフォナじゃないんじゃないの？ この子。

あ、でもあれかな。国王だからかな。あれ？ ってことは私も跪かないとダメなのかな？

だけど国王は私には見向きもせずに口を開く。

「今日彼女をここに連れて来たのは君か？」

「いいえ。丁度許嫁の話をクレアとしていた頃に、サマヘルカ宰相が訪ねて来たので、保護者として二人についてきただけでございます」

嘘つけ！ 売る様にして楽しそうに私を突き出して来たくせに！
ここについて来たのだって私が許嫁に会ってどう反応するかを知りたいだけだったくせに！

「能力は」

「幻覚でございます」

「そうか。分かった。面をあげてよい」

「はっ」

国王に言われてシフォナは顔をあげてススッと下がった。それと同時に国王が私を見る。緑の目と視線が合って思わずビクッと肩が

跳ねる。

くそ！・・・何が悲しくて好きでもなんでもない人と結婚しないといけないのよ！ 何かいう前に言っておかなきゃ！

「貴方と結婚する気なんてないから」

緑の目が少し見開いた。

「――ということだからこいつはここに放り込んでおけ」

「承知いたしました」

「ちょっと待ちなさいよ！！」

「大人しくしていることだな」

「ちょっと！」

ファリスは（すでに呼び捨てだけどいいのよ！ こんな奴に様とか陛下とか付ける気はない！）私の部屋の外に立っていた兵士らしき人に何かをボソツと言ってからボタンと扉を閉めた。

ガチャガチャと外から鍵をかける音がして、一気に顔から血の気が引く。あいつ！ 私をここに閉じ込めておく気か！

扉を叩いても外からの反応はまるでないので、私は仕方なく部屋にこもることにした。

普通の部屋のようで、周りを見回すと、小さなソファに机、ダブルベッドとバスルーム。どこにでもあるような部屋。これがラキオス城の中とは思いくかった。

はぁ、と脱力したように溜息をついて、私はベッドの上で横になった。

いつの間にか私は深い眠りについていた。

第4話 連行（後書き）

予想以上に長くなってしまいそうです（汗）
申し訳ありません＞＜

見捨てずに読み続けてくれれば嬉しいです＞＜
ここまで読んでくれてありがとうございます。

第5話 結婚

目が覚めると真っ先に目に飛び込んで来たのは、椅子に腰をかけているファリスだった。

「っ!？」

驚いて飛び退く。いやいやいや。どうして私と同じ部屋にいるのよ。しかも当然のように椅子に腰下ろしてるし。まあ自分の城なんだから、それもそうなんだけど。

「やっと起きたか」

溜息まじりにいうファリスに私は首を傾げた。
そんなに寝ていたつもりはないんだけど。

「やっと? 私どれくらい寝てたの?」

「三時間程だ」

「対したことないじゃない」

「結婚式をあげるためには準備が必要だ。三時間もあれば準備も相
当進んだであろうに、お前が寝ているせいでちっとも進まなかった」
「それはそれは悪うございましたねー」

不貞腐れたように言うと、ファリスは無言で立ち上がって扉を開いた。私がベッドに腰掛けたままのを見て、私を見てから扉を見つめた。ついて来いという意味なのか、私は渋々とベッドから降りるとファリスの後を追った。

そんな私の後を扉で見張っていた二人組がいつてくる。なぜついてくるのだろうと思つて振り向くが、彼らは真つ直ぐ前を見ているだけで私のことは目に入っていない。

そんな私の様子を見てファリスが口を開いた。

「その二人はお前の騎士だ」

「騎士!？」

「そうだ」

「騎士って、え!？」

だって私貴方と結婚する気はないっていったのに……何その王妃扱い。

「あの……いまいち私の意図が伝わってないみたいだけど、私、貴方と結婚する気なんてないわよ?」

「お前が決めることじゃない」

「なんで好きでもない人と結婚しないといけないのよ!」

「こっちの台詞だ」

吐き捨てるように言われて、思わず驚いて黙り込んだ。彼は、自分から私を選んだわけではないのだろうか。

少し悪いことを言ってしまったのかと思い俯いていると、私の騎士であるらしい人が一人小声で話しかけて来た。

「陛下とクレア様は許嫁なので、幼い頃に親同士が勝手に決めた関係なのでございますよ。ですから陛下も自らクレア様をお選びになったわけではないですよ」

「え、許嫁ってそういうもののなの？」

「はい。婚約者の場合はまた違いますが……」

ありがとう、と小さく礼を言うと彼は微笑んでまた前を見た。

うーむ。騎士ってもっと堅いイメージがあったけど、そういうことも教えてくれるのね。でもやっぱり騎士だから護衛とかのためなのかしら。

しばらく歩き回っていると、ファリスが一つの部屋の前でとまった。後ろに私がいるのを確認してからトントンと扉を叩く。『はいはい♪』と明るめの女性の声が聞こえると、カチャと扉が開いた。

「連れて来たぞ」

「まあまあ！ これはまた美しい王妃様でございますね、ファリス陛下！ 少しテンションが上がってきましたわ！ さあさあ王妃様、こちらへ！」

「え、へ？ あ、あの、私王妃じゃないし、いやそれ以前に何をするの！？」

私の悲痛の叫びにファリスが呆れたように目を細めて口を開いた。

そんなに説明するのが嫌なのなら別に言わなくていいのに。

「結婚の準備をしていると言っただろう。彼女はお前の仕立て屋だ」

「仕立て屋!？」

「そうだ。いい加減飲み込んでさっさとドレスを作れ」

それだけ言い残してファリスは私を部屋に押し込むと、ボタンと扉を閉める。私の騎士二人に何かを言い残して去って行くのが分かる。っていうか、騎士ってずっと側にいる者なのね。

私が正面に向き直ると、少し癖のある金髪を、高いポニーテールに結んでいる私の仕立て屋がメジャーを持って立っていた。ニコニコ顔で。私が少し引きつった笑みを浮かべると、彼女は楽しそうに話し始めた。

「はじめましてでございますね、王妃様。わたくしの名はレイラ・アクティルと言います。王妃様専属の仕立て屋でございますのよ」

「あ、はじめまして・・・私は――」

「クレア王妃ということは既に承知の上です♪ よろしくでございますのよ♪」

「は、はあ・・・」

「さあさあ王妃様! 両手を広げてください! まあまあスタイル抜群ですこと! どんな女性でも羨みますわ、この体! 美しい体型ですわ王妃様!」

なんかものすごく恥ずかしい。っていうかレイラさんテンション高すぎ。

はっ、っていうかあまりにもレイラさんのテンションに流されて王妃じゃないっていうのを忘れてた！　っていうか彼女の頭の中では私はもう王妃になってしまってるのね！　なんてこと！

結局されるがままで十分近くだつと、レイラさんは目を輝かせたまま一枚の白紙に何かを書き始める。ファリスの言葉に寄ると、結婚準備、ドレス・・・ドレス？　結婚式で着るドレスか！

「っていうか私結婚する気ないから！」

「ここまで来ておいてなんのご冗談ですか、王妃様」

サラリと流された。しかも紙に書きながら真顔で言われた。
っていうか王妃じゃないんだってば！

「あの、レイラさん？」

「はい」

「結婚式っていつ挙げるの？」

私の質問にレイラさんはキョトンとした。

「今日ですが？」

沈黙。

「はあああああああ!!!!?」

ああ、もうだめだ。精神的にも肉体的にも無理だ。

こんな豪華なドレスに包まれていて普通だったらすごく楽しいはずなのに今は一向にテンションが上がる気配がない。っていうか隣にいるファリスも大して楽しそうじゃないけど。

チラリと隣を見やるとどこぞの王子様のような服に身を包んでる。外見が外見だけにその服を来ていると余計に眩しい。

って何を言ってるんだ私は。

目の前には杯のような二つの小さなコップが置かれている。それを置いた神官の手にはとっくりのようなものがある。私から見ると酒をつぐ所にしか見えない。でも酒だったらさすがにシャレにならないし。っていうかそれ以前に私未成年だし。

結婚式は普通の町の中の教会でするものだが、ラキオス城の神官が神殿から出ることは許されていないため、神殿で結婚式を挙げることになっているらしい。結婚式や誕生日も神殿に来て神官に祝ってもらうのが伝統らしい。

結婚式の場合は、全員が神殿に集まり、神官が見守る中で聖なる水を国王と王妃に飲ませ、神のご加護がありまうようにと祈るものらしい。

神とかそういう類いのものを一切信じていない私としては胡散臭い儀式にしか思えない。口に出したら大変なことになりそうだから言わないけど。

神官、クオーリは私とファリスを交互に見てニコツと笑うと杯らしきものに水を注ぎ始める。っていうか見るからに普通の水じゃないよね。それ。トポトポというよりもドポドポという効果音が合っ
ていそうなほどに濃厚そうだよねそれ!?

焦って隣にいるファリスに視線をやるが、全く興味がないように全然違う方を見てる。

くそ、呑気そうで羨ましいよ!

そこで私が何を言いたいかを分かったのか、隣に控えていた第一騎士のルドが小声で話しかけて来る。

「濃厚そうですが味にはなんの変哲もありませんし、普通に飲んでしまっ
て害はありませんよ」

「え、じゃあなんであんなに濃厚なの?」

「神官様以外は作り方をご存知ないので、そこまでは・・・」

申し訳ありませんというルドに慌てて謝らなくてもいいよ、と言
ってから再び聖なる水らしきものに視線を移す。入れ終わったのか、
神官はとっくりらしきものをコトンと置くと私とファリスにそれぞれ
杯を渡す。

少し戸惑ってからそれを受け取るが、ファリスは当然のようにそ
れを受け取り一気に飲み干した。大丈夫そうだったので私も一気に
飲み干す。

・・・確かにルドの言う通り味にはなんの変哲もないけど、な
ぜか口の中に残る。うええ。

私達を見て神官はにっこりと微笑んだ。

「ファリス国王とクレア王妃に神のご加護がありますように」

静まり返っている神殿に神官の声が響き、結婚式は終わった。

……ちよつとあっさりしすぎじゃない？

後からファリスにそれを聞くと、アステルカ家特有の結婚式の仕方、特に儀式じみたことはしないとのこと。

いや充分儀式っぽかったけどね。

「ということだ」

神殿から出た瞬間にファリスが口を開いた。なんのことだろうと彼に視線をやると、彼は口角を上げて私を見つめる。

「今日からお前は俺の妻だ、クレア」

なぜか名前を呼んでくれた瞬間に体中に電撃が走ったような気がした。

その様子を見てファリスは微笑むと、私の頭に顔を近づけて、後頭部にキスをした。

・・・・・・・・キスをした？

「ちよ、何すんのよ!？」

顔が勝手に火照って来る。

ファリスはクックツと笑うと、勝手に城の方へ進んで行く。

そこから私とファリスの生活が始まったのだった。

第5話 結婚（後書き）

これで一応過去の話は終わりです。

文才がないので上手く説明できてない所は許してください．．．！

（土下座）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第6話 出発

「そもそも政務とか多すぎるのよ！ 全部ファリスに押し付けて！
ちよっとは自分でやれっての！」

ルドとスティラが拾い上げた資料に目を通しながらクレアが叫んだ。あああつ！ と叫びながら髪をかきむしっている所は王妃としては国民にさらしてはいけない姿だとルドは思う。

「他の国には国王という存在がありませんからね。仕方がないのでしょう」

相変わらず冷めた様子でルドが言うところクレアは腕の中に頭を埋めた。

政務は全て国王に任されているものだ。

当然のように王がないほかの国では政務はできないため、必然的に唯一の国王、そしてベンゾラの国王であるファリスに全ての政務が任されるのだった。

他の国でも王まではいかないが、国をまとめるものは存在する。しかし彼らだけで何かを決めるということとはできないため、そういう政務も全てファリスに任される。それがクレアは気に食わないのだった。

「でもさー。仲が悪いのはロースディバとウルツシアだけでしょ？」

ウルツシアなんて比較的大人しい国だし、ロースディバはちよつと攻撃的だから仕方ないかもしれないけどさ、ハシェンドとオルトには王がいてもいいんじゃないの？」

「それも一度検討されたことがあるんですが、やはり王の座を巡った争いは避けられないことだとファリス陛下が仰っていました」

ジェシカの言葉にクレアは顔をしかめた。

「あいつの言う事なんてどうでもいいのよ。王が二人に増えれば政務は確実に減らせるし、ファリスだってもっとベンゾラ全体を見渡す余裕ができるじゃない」

「しかし王が二人いるとどうしても争いが絶えません。争いが起こるくらいなら全ての政務を背負ったほうがよいとファリス陛下が……」

「ああもう！ ああいえばこういう！　なんで直接言われてるわけじゃないのにこんなにムカつくのかしら！」

「クレア様落ち着いて」

スティラが苦笑を浮かべながらクレアをなだめる。彼女はなんだかんだ言いながら、結局はファリスに全て任すことで、彼が壊れてしまうのではないかと心配して、政務を減らそうと考えているのだった。ファリスは傍から見てもクレアには本気で惚れているが、クレアのほうの想いは恐らく無自覚といって良いだろう。

なんとも歯がゆい関係だとスティラは思う。

「とにかくクレア様、もうすぐ夕飯の時間でございます。急がない

とファリス様が連行しに来ますよ？」

「わかってるわよ」

不貞腐れたように言って、クレアは立ち上がると部屋から出て行った。

「遅い」

「開口一番それかよ」

どーもどーも遅れてすみませんね。そもそも夕飯の時間までまだ五分もあるんだけど。食事だって出てないじゃん。几帳面というか完璧主義者なのよね、ファリスって。

「食事だって出てないじゃない」

「これから出かける」

「は？」

ファリスの口から唐突に出た言葉に私は間の抜けた声を出した。私がポケッとした顔でファリスを見ると、彼は真剣の表情のまま再び口を開いた。

「戦争が勃発した」

その言葉に絶句した。

「はっ！？　どこで！？　聞いてないし！」

「言っていないからな」

「言えよ！！」

「面倒くさかった」

戦争が起こったのに報告するのが面倒くさいだああ！？　そんなですむ問題でもないでしょうが！　　そんな

「ともかくどこで！？」

「ウルツシアとロースディバの間の土地を巡ってな。実は先月から小さな争いが起こっていたんだが、大軍が動き出したとの報告を受けた」

「もっと早く言ってよもう！　じゃあこれから行くのね？」

「ああ。早く準備しろ」

準備してなくてごめんなさいね！　なんつってもここに入るまでロースディバとウルツシアの間に土地があったことすら知らなかったよわたしや！

私はテーブルから立ち上がると、すぐに部屋に飛び込む。既に私

の服が詰まっている鞆を片手にルドが部屋にいた。あれ。さつき食事についてきてなかったっけ。しかもなんかスティラまで準備万端だし。

「もしかして。二人とも知ってたの？」

「ええ。事前に陛下から報告は受けておりました」

「……そうだね。そういうことをする奴だね」

「はい」

これから先は何かないかどうかはルドとスティラに聞こう。ファリスに聞いたらたとえあったとしても絶対に言ってくれなさそうだし。

「因みにどこに向かうの？」

「ロースディバやウルツシアに直接向かうのは危険ですので、一度ハシェンドにいった状況を把握してから動くそうです」

「……それはファリスが動くの？それともラキオス軍が動くの？」

「……そこまでは知りませんね」

「因みに私がいく意味は？」

「ファリス陛下が連れて行きたいと言っていましたので」

「そんな理由で私はついて行くのね」

「はい」

まあそんなことだろうとは思ったけどさ。まあいいけどさ。はあ、と軽く溜息をついてから荷物を持って部屋を出て行く。ド

アの外にジェシカが立っているのを見て、彼女はついていけないのだと判断した。確かにただの教育係だから、政治関係にはついていけないんだろうなと思う。

隣にいるスティラをチラリと見上げると、少し切なそうな顔はしているけどジェシカに言葉をかけることはない。

・・・話したら寂しくなっちゃうからかな。

「クレア様」

二人を交互に見ている私の耳元でルドが囁くので我に返る。三人で大広間に向かうと、ファリスと彼の第一騎士のディナル、第二騎士のロードの三人は既に準備万端で待っている。

ファリスは私を見つけると『遅い』というアイコンタクトを送って来たけどスルーした。

「クレア。少なくとも一ヶ月は戻らない。準備はいいな」

「平気よ」

「分かった。それじゃあ行く。サマヘルカ、俺が留守な間は城を頼んだぞ」

はっ、と短くサマヘルカが言うのと、私達は城の外に出た。既に馬車が待っている所を見ると、結構前から行くことは分かっていたんだろうな。

私達は馬車に乗り込むと、ハシエンドへと向かい始めた。

第6話 出発（後書き）

えーとですね。

どうしても更新が不定期になってしまうのは、私が寮生学校に通っていてインターネットが繋がらないので、たまにしか更新できないからです。

すごく遅れてしまったりとか、すぐにとかとても不定期になってしましますが、見捨てずに読み続けてくれれば嬉しいですorz

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第7話 誘拐

ハシエンドに向かうのは私とファリス、ルド、スティラ、ディナル、ロードといった騎士たち、兵士が二十人ほどと侍女が三人。兵士は少し多い気もするのだが、多いにこしたことはないというファリスの考えから常に二十人はついていることになる。侍女はある程度剣の腕がある子や運動神経がいい子達がついてくる。もしも行き先に女性がない場合、王妃と一緒にいるためについくるのだ。

ハシエンドに着くまでは、馬車でおよそ三日はかかる旅だ。おまけにラキオスから出てしまうと道が険しくなり、馬車では通れなくなってしまうので途中で馬に乗って進まなければならぬ。馬車で三日かかるので、馬のみとなると五日はかかることになる。普通なら馬の方が速いのだが、兵士や侍女達は馬に乗らず、私やファリス、騎士達しか馬に乗らないので余計時間がかかってしまう。もっと便利な移動手段はないものだろうか。

短距離ならば別に馬に乗るのは構わない。馬は好きだし、乗り方は分からないからいつもルドとスティラに協力してもらってるけど、あの揺れが結構心地よかったりする。

だけど長距離となるとまた別の話だと思う。

何よりも、お尻が痛くなる。ずっと馬に揺られてると本当にお尻が痛くなる。最初の遠出なんてルドと一緒に乗ってくれたけど、三十分でお尻がすごく痛くなって、すごい痣ができたんだよね。おかげで座る度に痛い思いをしなければならなかった。あんな思いはもうごめんだね。

それでも馬は好きよ？ 勘違いはしないで欲しい。
だけど、けどね。

この状況はなんなのよ？

「どうして私はファリスと馬に乗ってるの？」

「文句でもあるのか」

「ありまくりだわっ！」

あんたと一緒に馬に乗るとか！ あんたは平気かもしれないけど、私は嫌なのよ！ 何されるか分かったもんじゃない！

「お前は馬に乗れない。だから俺が乗せる。何が悪い」

「別にあんたじゃなくてルドとかスティラとかと乗ってもいいじゃない！」

「クレアが他の男と乗るのは許さない」

「ファリス！」

どこの子供だお前は！ って叫びたくなったけど叫んだらまた余計なことを言われそうだったので口をつぐむ。

…別に自惚れてるわけじゃないけど、ファリスが私のことが、その、好きだっていうのは分かってる。つまり。

っていうか、ここまでされて、それでもファリスが自分のことが好きじゃないだろうって思い込んでたら、逆にファリスに悪い気がする。

私は、私は別に嫌いってわけじゃない。誰かと結婚するのならファリスで良かったとは思うけど…好き、なのかどうかは、分からない。

私はハシェンドに向かうのは初めてというわけではないので、なんとなく道は分かってる。どっちにしろ私が指示とか出すわけじゃないから道分かっててもどうしようもないんだけど、ただ少しだけ見慣れた景色になってきたことに安堵した。

見慣れたと言ってもまだあと五日はあるんだけどね。

陽が落ち始めるのと同時に、私達は森から抜けて、休憩場所を探し始めた。あまり目立つ場所で休憩をとると誰が襲って来るかわからない為、出来るだけ茂みとか木とかに囲まれている所を探す。どうしても見つからないのもう少し進んでみると、茂みに囲まれている場所を見つけたので、そこで休憩を取ることになった。

馬を木につなぎ止めて兵士達がたき火を起こし始める。いつも城の門や部屋の前で警備している者がたき火を起こしている光景は何回見ても少し笑いがこみ上げて来てしまう。

私は出来るだけど笑いをこらえて、火を見つめる。炎を司るものとしては、火を見るとどこか安心する自分がいる。

傍から聞いたらわけがわからないけどね。

夜の闇が濃くなり、空に星が現れ始める。少し温度が下がって寒くなってしまうからか、体がブルッと震えた。

：シヨールを持ってくればよかった。少し天気を見くびってたかな。

そう思っていたら、肩にフワッと何かが乗せられ、寒かった腕が包まれる。驚いて何がかけられたのかを確かめると、私の愛用している、紫色のショールだった。

後ろを振り向くと、ファリスがこちらを見ていたため、緑の瞳と視線がぶつかった。静かに私を見ていて何も言わないけど、ショールを持って来てくれたのはファリスだとすぐに分かった。

… こういう所は、すごく、すごく好き。

「ありがとうファリス」

「寒くなることくらいは想定内だっただろう。お前が忘れることも想定内だったがな」

……………。

こういう所はすごく嫌いだけど。

えーえーどうせ天気をみくびってましたよーだ。

プイと拗ねたようにそっぽを向くと、後ろでファリスがクックククと笑い声をあげた。何が面白いのかはさっぱり分からない。

彼から離れる為に移動をしようとすると、

「クレア」

名前を呼ばれたのとともにいきなり後ろに引っ張られた。驚いて私が後ろを向くと、ファリスは唇を押し付けて来た。

…………… 貴様、みんなの目の前でなんてことをしてやる。

「んーっ!! んーっ!!!!」

必死に声を上げてファリスの腕から逃れようとする、腰に回された腕にますます力がこもる。っていうか後ろからキスされてるこの体制、すっごく苦しいんだけど。

私とファリスの様子を呆然とみている兵士達と、苦笑を浮かべている騎士達。頬を染めてキャーキャーと叫ぶ侍女達の声を聞いて、私はますます彼から離れようともがくけれど、もがけばもがくほどファリスの腕に力がこもる。

しばらくもがいているとやっとファリスは唇を離してくれたが、体は離してくれない。それどころかギュッと抱きついたまま顔を首もとにうずめる。

「ちょ、ファリス、みんなが見てる前でそういうことはやめてくれない?」

顔が火照って来た所でファリスに声をかけるけど、

「やめない」

即答された。

「殴ることはないだろ」

「そこで殴らなかつたらあんたはずっと抱きついてたでしょーが」

隣で不貞腐れたように言うファリスからできるだけ距離を取って言う。

でも王妃という立場上、周りを囲んでいる騎士達や兵士達の隣で寝ることはできないので、一応真ん中にいるけれど。寝る体型は、私とファリスが真ん中で、私の隣に侍女達三人が寝る。そんな私達を囲む様にルド達が寝ていて、その騎士達を囲むように兵士達が輪になる。まあ上から見たら私とファリス、侍女達の周りに輪があつて、その輪をまた囲っている輪があるように見える。

私とファリスは外部から狙われる立場なのでできるだけ安全な場所にいないといけない。

「――だろ．．．」

「しっ。――．．．．．ない．．．――するな」

何人かの男の人の話し声に目が覚めた。
これは、兵士達の声ではない。

でもルド達の声でもない。

瞬時に体が強ばった。
嫌な予感がした。

「ファリ——っ！！！」

隣にいるファリスに声をかけようとした瞬間に口が塞がれ、体が持ち上げられた。

第8話 監禁（前書き）

少し長めです。

第8話 監禁

もがいた。

正直、死ぬ程もがいたけど、口を塞がれていることもあって声を出すことなんて全然できなかった。頭の中があまりにも混乱して、気持ちが恐怖で埋め尽くされていたため力をつかいたいにも集中が出来ず、炎を出す事もできなかった。

周りの者が誰一人起きず、クレアはそのまま引きずられる。どうして誰も起きないのかは、恐らくこの男達の中の一人の能力だろう。世の中にはたくさん能力があるため正確にはどういう能力なのかは見当もつかない。

ただ、ここで騒いでみんなに危害を加えないためにも、大人しく連れて行かれたほうがいいのかもしれない。

動きをとめたクレアを見て、一人の男性がニッと口角を上げた。

「諦めたか。それ以上もがいたらあそこにいる奴らを一人ずつ殺して行く所だったのに。残念だ」

ゾクツとした。

ますます頭の中は混乱と恐怖でいっぱいになり、クレアは目を見開いたまま大人しく引きずられて行く。

目隠しをされ、右も左も分からずひたすら引っ張られて行くと、五分ほどして男達の足音が止まり、自分の体もとまった。目隠しを取りたい衝動に襲われるが、ここで取ったら何が起こるか分からないため、一応取らないでいていた。

ここで炎をつかうこともできるのだが、もしもファリス達の所に男達の仲間がいたら、テレパシーでも使って、クレアが暴れだした瞬間に殺して行くかもしれないのでその考えは一応止めておいたほうがいいだろう。

するとこれからどうしようか――

カキンッ

クレアの思考は剣と剣がぶつかる音で遮られた。

「おいっ!」

「どうした!」

男達が一気に走り去る音が聞こえたので、思わず目隠しを取ると、遠くで何人かが乱闘してるのが見える。クレアは誰が闘っているのか気になったものの、一回周りを見回した。

先方に馬車が見える。恐らくあれに自分を乗せる気だったのだろう。馬車が見えて、森に囲まれているのが分かるが、今の現在地がちつとも分らない。

クレアは一度現在地も放っておいて、乱闘の方へ走って行く。すると、

「ロード!」

予想外の人物に思わずクレアが叫んだ。

クレアの叫びにロードは剣で一人の男を切ってから、すぐさま彼女の側へと走りよる。クレアを背にロードは息切れながら彼女に話しかけた。

「クレア様！ ご無事ですか！？」

「い、一応平気よ。でも、ロード、どうしてここに？」

「水汲みに行っていて、戻って来たらクレア様の姿が見当たらないので、くっ！」

剣を振り落としながら、

「陛下やディナルさんを起こそうとしてもちっとも目が覚める気配がないのでっ！」

一人の男が剣を突き出して来たが、ロードは剣で容赦なく彼の腕を切り落とす。男の絶叫が響き、血が飛び散り、その光景に思わずクレアが息を呑む。

「能力を使って周りを見回すと、クレア様を連れて歩く奴らが目に入ったので急いで追って来たのですよ！ 間に合ってよかった！」

「能力って、あんたの透視ってどこまできくのよ！？」

「見える所までは見えるんですよ！ ぐっ！」

ロードはクレアをここまで連れて来た男の剣を受け止めると、倒れた彼の喉にピタッと剣をつきつけた。

「この方はラキオス王国の王妃なる者だぞ」

「ぐっ・・・そんなことは、承知の、上、だ！」

「貴様——ぐっ！」

頭に鋭い痛みが走り、ロードのうめき声とともに意識がなくなっ
た。

「——ア様・・・レア様・・・！　クレア様！！」

ロードの声にバチッと目が覚めた。私を心配そうに覗き込んでい
る彼の薄い緑の目と視線がぶつかった。起き上がろうとすると、頭
に鋭い痛みが走ったので、一つうめき声を上げてから再び頭を下ろ
した。

・・・これは、相当強く殴られたかな・・・

「クレア様、ご無事ですか？」

「私は、一応平気よ。……ちょっと頭が痛むくらいで。ロードこそ大丈夫？」

「俺も大丈夫です。殴られたといってもそこまで強く殴られたわけではありませんので」

彼の言葉に安心すると、私は周りを見回した。どうやらどこかの牢獄に放り込まれたようだ。でも部屋が一つしかないところをみると、ここは特別に監視されている牢獄なのかな、と思う。

試しに炎を出して鍵を溶かそうとするけれど、一向に溶ける気配がない。それどころか熱くもならない。

……まあ私を閉じ込めることを事前に計画していたのなら当然っちゃ当然だけど。

「どうやら閉じ込められたみたいね……」

「申し訳ありません。俺がついていながら……情けない」

「いいのよ。ロードのせいじゃないわ。むしろあの時助けに駆けつけて来てくれたこと自体奇跡だと思ってるもの。それよりも、ここはどこだか分かる？」

「牢獄の門についている紋章を見る限りでは、ウルツシア軍の仕業かと」

「ウルツシア？」

でも、ウルツシアは確か戦争の真っ最中……
そうか。

「私達が介入するのを知って、止めに入ってたってわけね……」

「その可能性が非常に高いですね」

「まったく。なんてことしてくれるのよ。今が何時くらいだか分かる？」

「まだ真夜中ですよ。陛下達に使われていた能力が解けたのなら、今はきつとクレア様を必死に探しまわってるところだと思いますが」

「……ファリス、私がここにいて分るかしら」

「そうですね。俺も慌てていて置き手紙もなにも書いて来ていないので……」

「そうよね」

二人で黙り込んだ所で、いきなり牢獄の奥の方にある廊下の扉が開いた。二人でその方向を見ると、一人の男性を中心に五人ほどの男女が入って来た。

……多分、あれが私達を誘拐した人達だ。

隣にいるロードを見ると、彼はただ真っ直ぐ見つめていた。ただ、見ている方向があの人達ではない所を見ると、多分透視でこの建物の構造を見ているんだろうと思う。なんて便利な能力。

男達は無言で私達の牢獄へ近づいて来ると、およそ一メートルくらい手前で立ち止まった。私はその男達を睨みつけ、ロードも彼らに視線を移す。私達の前に立っていたのは、四十代くらいの厳しい表情をした男。濃い金髪はオールバック風になっており、深い茶色の瞳は私達を、正確にはロードを、睨みつけた。

「……余計な虫が入ったのは予想外だったな」

「申し訳ありません、隊長。あのまま逃がして王妃の場所をファリス国王に教えかねないということで連れて来たのですが」

「それで良い。よくやったな」

「恐れ入ります」

滅多に褒められることがないのか、隊長と呼ばれた男が後ろにいる男性にそう言い放つと、彼は嬉しそうな顔になった。

私は目の前にいる男を精一杯睨んでやった。

「何が狙い」

「自己紹介もさせてくれませんか、王妃」

「これから先関わる気がない人の名前なんて知りたくないわ」

「……噂通り非常に強気な性格でございますね」

噂通りって何。私の性格ってもしかしてベンゾラ全体に回ってるの？

いや今はそんなことはどうでもいい。とにかくこの状況が一体なんなのかを確かめないと。

「お前がいるということは、やはりここはウルツシアだな、ルドルフ」

「さすがですな、ロード殿」

ルドルフと呼ばれた男がニッと笑ってロードに話しかけると、ロードの目が鋭くなった。こんな怖い顔したロードは始めた見た気がする。

慌てて彼に声をかけた。

「ろ、ロード！ 知り合い？」

「クレア様はこの世界に入って間もないですから知らないのも当然ですが、彼は、ルドルフ・キトラス、ウルツシア軍の隊長です」

「隊長！？ ってことは私を誘拐しろと命じた人ってこと？」

「そういうことになります」

驚いて男を見ると、確かに周りの奴らとは着ている服とか、どことなく違う。

「……今まで気づかなかった私って一体……」

「ルドルフ。これは一体どういうことだ」

「どうもこうも見たままですよ。貴方達に戦争の邪魔をされるわけには参りませんので、邪魔をさせてもらった次第です」

相も変わらずニヤニヤした顔を崩さずにルドルフが言う。

その気色悪い顔に思わず鳥肌が立った。こいつ……何人もニヤニヤしたまま殺せるような人だ。分かる。あの目は。

「貴方が邪魔をしたって、ファリスがハシェンドにつくのなら意味がないじゃない」

私の言葉にチッチッチとルドルフが指を振った。

ムカつく。

「何もご存知ないのですね、王妃。戦争を止めるには、国王と王妃、二人の承諾が必要なのです」

「私が承諾してることなんて、ファリスはとっくの昔に知っているわ！」

「王妃がそこにいなければ意味はないのですよ。王妃。それに、ファリス陛下は王妃がいなくなったと知れば、大騒ぎして戦争どころではなくなってしまいます」

「・・・・・・・・・・」

鋭い指摘に思わず黙り込んだ。

ルドルフの言う通り、ファリスは私がいないと分かれば、きっとラキオス軍全員を出動させて私を探そうとしかねない。彼は本当に、私のことは大切にしてくれているから。

隣にいるロードも同じことを考えているのか、黙り込んでしまっている。

そんな私達を見てルドルフはフン、と鼻で笑った。

「王妃の能力を承知の上でこの牢獄はつくらせてもらいました。どれだけ能力をつかってもこの牢獄から出る事は不可能ですよ」

「そんなこと分らないわ」

私の反論にルドルフは再び笑った。

「せいぜい頑張ればいいでしょう」

それだけ言い残すと、ルドルフは出て行った。

第9話 搜索(前書き)

まだ8話目なのに読者様がたくさんいてすっごく嬉しいですっ><
お気に入りに登録してくださいっている方もたくさんいらっしやって、
ポイントも既に80点です><
もうこの上なく嬉しいです!><

図々しいですが感想・評価よろしくお願いいたしますorz

第9話 搜索

目が覚めた時に目の前にクレアがいないのに気づき、俺はものすごい勢いで起き上がった。あり得ない。もしもクレア、いや、彼女だけじゃなく、誰かが動いたのなら絶対に気づくはずだ。

なぜ、この俺が気づかなかった。

周りを見回すと、全員がまだ寝ている。しかしクレア以外の誰かがいないことに気づいた。

…ロード…

俺の第二騎士のロードがいなくなっている。水汲みからはとっくに戻って来たはずだ。それにロードが動いたのならディナルが起きないわけがない。

…何がどうなってる？

「ルド。ルド、起きろ」

立ち上がって、クレアの第一騎士のルドの側まで寄って彼を揺する。しばらく揺すっていると彼の瞼がゆっくりと開いた。空を見る限りではまだ早朝のため、無理矢理起こすのも少し気が引けたが、この際は緊急だから仕方がない。

俺の姿を見てルドはすぐに起き上がった。

「陛下。どうかしましたか」

どこか無感情な彼の声は、自分の声に似ている気がする。

「ルド、クレアが見当たらない。ロードも見当たらない。どこにいるかは分かるか」

俺の言葉にルドはすぐさま立ち上がった。ロードがいないのを見て、滅多にポーカーフェイスを崩さない彼は、大きく目を見開いた。すぐさまクレアが寝ていた所に視線を移し、彼女の姿がないのを見て更に目が大きく見開く。

「…なぜ…」

「クレアがどこにいるかは分からないか」

「…申し訳ありません…ロードが水汲みに行ったのは覚えているのですが、それ以降の記憶は全く…」

「俺もそうだ」

チツと舌打ちをすると、ファリスはイライラして、近くにあった枝を踏みつけた。信じられない。この自分が誰かの起きる音に起きなかったなんて。

普段の自分だったらあり得ない。

「ルド、悪いが全員を起こしてくれ。近くを搜索してくる」

「陛下！ 一人で行かせることはできません。せめてディナルさんを連れて行ってください」

「起きていないだろう」

「陛下に似てずいぶんと神経質になりましたからおかげさまでこの通りバッチリ起きてますよ」

聞き慣れた憎たらしい声にファリスは振り向いた。準備万端で自分の第一騎士は立っていた。

はぁ、と思わず口から溜息が溢れる。

「分かった。ディナル、ついてこい」

「元からそのつもりです」

二人はルドを置いて森の中へと進んで行く。

ルドは少し不安そうな面持で二人を見つめていたが、やがて周りの者を起こし始めた。

「ねえ、ロード」

「なんでしよう」

ルドルフ達が出て行った後、しばらく沈黙に包まれてから、私は口を開いた。

「自分でいうのなんだけどさ、ファリスの私に対しての溺愛っぷりって有名だった？」

「相当」

即答されて、やっぱりそうだったんだ、と呟いてがっくりと手を地面につく。元々座ってるから手をついても対して姿勢は変わらないんだけど。

っていうか、私って王妃という立場でいながらも公衆の面前に出ることってあんまりないから、私とファリスの関係……っていうのも変だけど、その、なんていうの？ 夫婦仲。それぞれ。とにかく、私とファリスの夫婦仲ってあんまり知られてないと思ってた。意外と知れ渡ってるものなんだね。

「どころでロード」

「なんでしょう」

さっきと同じ応えを返して来たロードを一瞥して続ける。

「これからどうする？」

「そうですね。どうやら彼らは俺の能力も警戒していたようで、この牢獄からではあのドアの奥以外は何も見えません」

「透視能力を止める能力でも使ったのかな」

「そうでしょうね。一部分だけ俺の能力が使えるということは、なんらかの結界だとは思いますが・・・」

ロードって、剣術とか運動神経だけじゃなくて能力情報にも詳しいんだね。ディナルもルドもスティラもそう。なんで三人とも騎士なのに王妃の私よりも知ってることが多いんだろう。

もしかして王妃がいない間のファリスの手伝いをするために叩き込まれたとか？

・・・うわー。超あり得る。

「クレア様、お疲れの所申し訳ないんですが、あそこのドアの部分だけに集中して炎を出す事はできませんか？」

「え？」

どうしてドアだけなの？ と聞くと、ロードは一瞬黙り込んだけど再び話した。

「俺の透視能力が効くのがあのドアの周辺とその奥だけだとすると、あそこには、この周りの壁にある妨害能力は張っていないはずですよ。クレア様の炎がこの牢獄の中で出せず、俺の透視能力も牢獄の中では出せない。ですが俺の透視はあのドアの周辺では効く。ということは恐らくクレア様の能力も効くはずですよ」

「・・・ロード。あんた、騎士よりも教育係の方が合ってるよ、」

別にずばぬけて頭が良くないと思いつかない案ってわけじゃないけど、こうもスラスラと講義のように言葉が出て来る所を見ると、ロードは剣を使うよりも、机に向かってる生徒に教え込むというイメージが湧いてしまう。

私の言葉にロードは苦笑を零すと、とにかく試してみてくださいとドアの方に視線をやる。

．．．．． まあ、試すに越したことはないかな．．．。

正直、私は遠距離で能力を使うことに特に秀でているわけじゃない。ただでさえ能力を使う機会は少ないし、いざ使う時も近い位置でしか能力を使わないから、本当に遠距離は苦手。

だけど出来ないわけではないから、全ての集中力をそのドア一点だけに注ぎ込む。

ボツ

という音とともに鮮やかな炎がドアの前で上がった。

あまりにも驚いてすぐに炎を引っ込めてしまったが、あれは確かにドアの周りで上がった炎だ。先程牢獄の中で試した炎よりは手応えは確実にあった。

「ロード！ ロードできたよ！」

嬉しそうに横を向くとロードも微笑んで来た。

「さすがでございます。クレア様ならきっと出来ると思いましたよ」

「えへへ。じゃあ、これを使って、どうする？」

「・・・とにかく、次にルドルフが入ってくるのを待つしかないですね」

その言葉を聞いて思わず自分の中の興奮が少し冷めてしまった。

「陛下！ 陛下、もう無理です！ この周辺にはきっともういませ

ん！」

「・・・・・・・・」

ディナルの呼びかけを無視して、ファリスはひたすら森の中を進んで行く。戻れる様に目印はつけてきたものの、ファリスの無茶苦茶な行動に目印がついていても帰り道はわけがわからなくなってきた。

・・・本当にこの人は、王妃のことになると目の前しか見えなくなる。

「陛下」

溜息とともにファリスを呼ぶと、彼が振り向いた隙に彼の目の前に大きな土の山を作る。道を塞ぐ様に不自然に盛り上がったその山を見て、ファリスは舌打ちをする。

その土の山をつくった張本人は、ファリスの舌打ちを聞いても動揺しなかった。

ディナルは地を司る能力を持っている。四大エレメントの一つとすることもあり、非常に能力技術が必要な能力だ。ディナルは能力調整に関してはプロであるため、地をなんの苦もなく自由自在に操ることができる。

「ディナル。なぜ邪魔をする」

「邪魔などしておりません。止めているだけです。これ以上進めば俺達も迷子になります。そもそも、王妃はもうこの周辺にはいないことでしょう。リスクを背負って彼女をここに置いておけば、いつ見つかるかは分かりません。恐らく既に違う場所へ彼女を移したのだと思います」

「・・・・・・・・・・」

ディナルの言葉にファリスは黙り込んだ。

確かに彼の言う通りなのだ。しかし、探さざるを得なかった。クレアがいなくなったのだ。大人しく、冷静にそんなことを考えられるわけがなかった。

ファリスの溜息を聞いて、ディナルは彼が納得したのを悟った。彼が戻ってくるのを見て満足そうに微笑むと、二人は帰り道を歩いて行く。

「では陛下、これからどうしますか？」

「……とにかくハシェンドに向かおう。ルノアードが待っているから、彼の元に行って事情を説明してから再びクレアを探す」

「……陛下」

少し低い声で聞いて来るディナルを見た。

「……クレア様がないからって、取り乱したりしないでくださいよ」

「………しない」

「その沈黙はなんですか」

「心配はいらない」

そう言い捨てるとファリスはとつとと進んで行く。

はぁ、と溜息をついてからディナルもついて行った。

第10話 経過（前書き）

短いです（汗

次回はもうちょっと長くなる予定ですので＜＜

第10話 経過

ファリスはひたすらムカムカしている気持ちでハシェンドに向かっていた。彼の乗っている馬もそんな彼の気持ちは感じ取っているのか、少しビクビクしている。

そんな王と馬の様子を見て、隣を歩いていたディナルは溜息をついた。自分とは反対側の隣にいるルドに視線をやると、彼も呆れた表情をしていた。

「陛下。馬が怖がってますよ。もう少し国王らしい堂々とした威勢は見せつけられないんですかね」

「黙れ。妻がいなくて堂々としていられるか」

「……それは即ち王妃がいなければ何もできないと仰っているんですね」

「……お前、さっきからなんで疑問形じゃなくて断定なんだ」

「そうやってはぐらかすんですね。そうなんです。分かりました」
「……」

ディナルの言葉にルドは思わずプツと吹き出してしまった。出来るだけ笑いをこらえているのが分かるのだが、こちらに背をむけているため肩が小刻みに震えているのが分かる。それでも隣で遠慮なく爆笑しているステイラよりは大人だという。

ファリスは軽く溜息をついた。

まあ、確かにこのままではいけない。ラキオス王国の国王として、こうも情けない姿を表にさらしてはいけないとは分かっている。

ファリスは気を引き締めると、腹を蹴って馬の速度をあげた。

前にクレアの姿がないのは、やはり寂しかった。

「・・・で、あいつなんで来ないの？ 初日に来た時以降ちつとも来てないじゃない。食事も違う人に運ばせてるし」

「恐らく陛下がハシェンドにつくまで待っているつもりなのでしよう」

「はあ！？ あと二日もあるじゃない！ その間ずっと待ってろってこと！？」

「そういうことになるんじゃないでしょうか」

何それ。いやマジで何それ。ないでしょ。

私達だって暇じゃないし。とつとルドルフと接触を図る方法はないものだろうか・・・

「騒ぎを起こしたら入って来るかな」

「騒ぎを起こしたらもっと頑丈な牢獄に放り込まれます」

「いやだから隙について逃亡みたいな・・・」

私の言葉にロードはチラっと私を見た。

「言っておきますが、この中で能力的に有利なのはクレア様ですよ。俺の能力は攻撃的じゃないから戦いでは役に立たないですし」

「分かってるわよ。そんなの百も承知よ」

「……逃げ切れる自信はあるんですか？」

「うっ……」

そう言われてしまうとはつきりと自信があるとは言えない。

私は生まれた頃から戦いとかに巻き込まれてたわけじゃないし。

その証拠に能力の扱いに関しては未熟。自分の機嫌で能力の強さは自然と変わってしまうけれど、意図的につかうとなれば能力自体が強くなければ意味がない。

私は小さい頃から平和な状態で育てられたし、ファリスと結婚してから王妃という立場上、戦いに介入などすることはない。はっきり言ってしまうとロードに全てを任せたい所なんだけど、相手が攻撃的な能力を持っているとなるとやっぱり私の能力が絶対に必要となるのかな……

私の困惑してる様子を見て、ロードはふっと微笑んだ。

「いいんですよ。クレア様は守られている立場なんですから能力の扱いが未熟なのは当たり前です。ここは、ルドルフが来るまで大人しく待っていることにしましょう。俺達を殺すことはきつとありません」

「……分かった。なんか、王妃なのに全然役に立ってなくてごめんね……」

本当にそう思う。ファリスは国王っていう立場に相応しい振る舞

いをいつもして、政務だって一生懸命やっているのに、私は王妃という立場にも関わらず何もせず座っているだけ。

政務の仕事を時々することだってあるけど、政治的な関心がないから難しいことはさっぱり分かんないし……

そんな私の言葉と様子を見て、ロードは耐えきれないというように笑いを零した。私が少し不機嫌そうに見ると、笑いながらもすみませんと謝った。

そして口を開けた。

「いいんですよ。クレア様はそのままです。王妃という者は、守られて強くなるんですから」

第11話 到着

二日はあっという間に過ぎて行った。

クレアとロードが閉じ込められてから四日、ファリス達はようやくハシエンドについていた。

既にラキオスと連絡を取り、小さなながらも軍を動かして今はクレア達の搜索にあたっている。一刻も早く探したいがためにファリスはラキオス軍全員を出動させたかったが、サマヘルカとディナルの強い言葉にその案は却下された。

ハシエンドは緑が豊かな国だ。

入ってすぐにたくさん緑が目に入り、今までただの地の上を歩いていた身としては非常に安心する光景だ。

ハシエンドには王がいないため城はないものの、ハシエンド城と呼ばれる、ハシエンドの首相が住んでいる家がある。城と呼ばれるのは単純に城ほどの大きさを誇っているからだ。

ファリス一行は馬に乗ったまま進むと、彼の姿を捉えた者が次々と頭を下げて行く。どの国でも王の存在は絶対であり、彼の姿を見つけたら跪くのは当たり前である。

しばらく進んでいると見慣れた白とグレーの建物が視界に飛び込んできた。

あれがハシエンド城と呼ばれる、首相が住んでいる家だ。

ファリスが門につくと、そこを警備していた者が瞬時に門をガードする。恐らく相手がファリスだと気づいていないからか、厳しい面持を崩さない。

そこでディナルが馬で一步前に出た。

「こちらの方はラキオス王国の国王なるものだ。ウルツシアとロスディバの領地争いについて、ルノアード首相と面会をしに来た。門を通せ」

「あ、これは大変失礼いたしました！　どうぞお通りください」

ディナルの言葉に兵士二人はさっと門の前から退くとファリス達はそのまま中に進む。後ろで門が閉まる音がして、ファリス達はそこで馬を降りた。馬を近くの木に縛りつけるとドアの方へ向かう。向かっている途中でバンッとドアが開き、見慣れた男性が一人出て来た。彼の周りには何人かの男女がいる。

ファリスは男性の姿を捉えて小さく微笑んだ。

「ルノアード。久しいな」

「はっ。大変ご無沙汰しております。結婚式の時以来でございましたか」

「そうだな」

「どうぞ中へ。お話はそれからしましょう」

「ああ」

ファリスがそう答えると彼らは家の中に入って行った。

一方ウルツシアでは。

「隊長！ ハシェンド付近で陛下一行を見かけたと連絡を受けました！」

一人の男性の声に、隊長、ルドルフは立ち上がった。顔には満足そうな笑みが浮かんでいる。

「やっとついたか。では王妃様に報告するとするか。牢獄に行くぞ」「はっ」

「王妃様がこういう反応をするか楽しみだ」

ニツと笑い、長い廊下を進んでいく。

牢獄に通じるドアの前で立っていた警備の者を邪魔だ、と一言いって退散させると、ルドルフはドアを開けた。

ボウ！

視界が一気に赤く染まった。

自分が炎に包まれていると分かるまでには時間がかかった。それも自分だけだ。周りの男達はあまりの事態に動けずにいるが、彼らは包まれていなかった。

あまりの熱さに地面にうずくまるが炎は一向に消えない。こんな

炎を繰り出せる人間は、一人しかない。

「今すぐ私達をここから出さないと、そいつを焼き殺すわよ」

凜々しい声が牢獄から響き、男達はその方角を見た。

片手を前に差し出しながら立ち上がっているクレアがいた。隣では剣に手をかけているロードがいる。当初はいくら威嚇されても鼻で笑うだけの存在が、この瞬間、とんでもない脅威に見えた。

それも隊長が危険にさらされているからだ。

しばらく誰も何もせずにいると、ルドルフを囲む炎がますます大きくなった。

ルドルフが苦しげに呻くと、男達は息を吞んだ。

「いいの？ そいつが死んでも困らないの？ あんた達。だったら喜んで殺すけど」

なんていう女だ。

男達の脳裏によぎった言葉は一緒だった。仮にもラキオス王国の王妃が、ウルツシア軍の隊長を焼き殺すと脅迫している。

男達に取ったらルドルフを助けるために一刻も早くクレア達を逃がしたかったが、それは隊長の命令に背くことになる。

時間は刻々と進んで行く。

クレアは舌打ちをするともう片方の手で男達の足下を囲った。

ヒヤッ、と男達が叫ぶ。

「私達を逃がすか逃がさないかって聞いてんのよ!!! とつとつ決めないと全員この場で焼き殺すわよ!!!」

クレアの大きな怒声が響き、牢獄の中は一気に静まり返った。

しばらくして、耐えきれないように一人の男性が勢い良く立ち上がり、牢獄の所まで近づくと腰にあった鍵で南京錠をいじりはじめた。

それと共にルドルフ以外の男達の周りの炎が消える。

「一人くらい理性のある奴がいるじゃない」

クレアの言葉にも、鍵を外している男にも非難の声はなかった。

ルドルフは既に気絶に近づいて来ており、指示を出す事はできない。震える手で男が鍵を外すと、クレアの先にロードが剣を構えて牢獄から出た。

鍵を外した男の喉に剣を突きつけると、彼を遠ざける。ロードの後を追ってクレアも出た。ルドルフを囲む炎を一向に消す気配もなくドアから廊下に出る。そして振り向いた。

「下手なことをすると、そこにいる隊長は死ぬよ」

氷のように言い放つクレアに男達は何も言えずにこくこくと頷く。

満足そうに微笑んでクレアとロードは長い廊下を出る。

先程ルドルフが警備の者を払ったためか周りには誰もいず、クレア達はあっさりと外に出ることが出来た。

「なんと！ 王妃様がでございますか！」

「ああ」

全てをルノアードに話すと、彼は心底驚いたように声を上げた。

「誰の仕業か、見当はついておりますでしょうか？」

「・・・それがちつとも」

「そうですか・・・」

思わず深刻な顔になったルノアードに、ファリスも黙り込んでしまった。彼の傍らで待機しているディナル、彼の後ろにいるルドとステイラも心配そうな顔をしている。

すると、ルドがはっと顔を上げた。

「陛下」

呼ばれてファリスは振り向く。

「ロースディバ軍かウルツシア軍の仕業というのは、考えられないでしょうか？」

「……なぜだ」

「戦争の邪魔をするのを嗅ぎ付けて、クレア様を誘拐した可能性もあります」

彼の言葉に全員が顔を上げる。

が、スティラが否定するように口を開いた。

「だがクレア様一人を誘拐して何になる？ どうせなら陛下を誘拐したほうがよかったんじゃないのか？」

「こういうことには王妃の承諾も必要になる。本人以外の口からの承諾だと認められない。それに誘拐するのなら断然、陛下よりもクレア様の方がしやすい」

「……………」

ルドの言葉に納得してスティラは黙り込んだ。

ファリスはしばらく考え込んでいたが、やがて口を開く。

「ディナル。ロースディバとウルツシアに今すぐ連絡をしろ。俺達

も出発するぞ」

「は？ 今からですか？」

「当然だ」

「ハシエンドについたばかりですが」

「だからなんだ」

ディナルは一瞬顔をしかめたが、分かりました、とだけ言った。

第12話 脱出

ウルツシア国は大人しい国だ。ずいぶんと攻撃的なロースデイバに比べたら、本当に大人しい。

ラキオスの命令も忠実に聞いてくれるし、自ら戦争を起こそうという意志もない。首相のエリスが平和主義者だからというのも大きな理由だが、何よりもウルツシアの住民達が戦争を起こしたくないのだ。

エリスも国を大きくしようと思っているわけではないので、土地など気にとめないはずだ。

そんなウルツシアが、なぜ領土ごときで戦争を起こすのかは理解しがたい。

それに昔からロースデイバとは仲が悪いのに、なぜ戦争を起こすようなことをしたのかは謎だ。大きな理由がある。それしかない。

「クレア様、下向いて」

小さな声でだが早口で言われ、私はサツと下を向く。ローブを羽織っているから正体がバレることはないと思うのだが、万が一のためにロードは私の少し斜め前にいて、私達は壁に寄るように歩いている。

人が多いため際立って目立つことはないし、どの国にも貴族はいるので、その貴族を守っている騎士だと思われる可能性が高い。

だが念には念をという、ちっとも言う事を聞いてくれないロードの言葉で私は過保護な状態だとは思うが、守られている。

「ロード」

小さく呼びかけると、ロードは少しだけこちらを向いた。

「なんですか？」

「・・・その、これからどこに行くの？」

「・・・そう、ですね・・・とにかく安全な場所を探して、そこでしばらく身を潜めるしかありません」

「・・・安全な場所って・・・今頃きつとウルツシア中に私達の搜索願が出されてるわよ、きっと」

「その可能性は低いですね」

「えっ？」

自信に満ちた様子でロードが言うと、私は驚いて彼を見た。といっても私よりも二十センチくらい高いから私が斜め上を見るような形になってしまふのだが。

「どうして？」

「そうですね・・・これは、あくまで可能性ですが、ここの住民は、まさか戦争を止められるからという理由でウルツシアがラキオスに攻撃するとは思っていないでしょう」

「・・・それはそうね。ウルツシアはラキオスには忠実だし」

「ええ。ですから、これらのことは恐らくルドルフの独断専行だと思えます」

「え？」

「クレア様を誘拐して、ラキオス軍を静止する。ウルツシアの住民

はラキオスが戦争を止めに来ていることは恐らく知らないはずですから、ルドルフはクレア様をあそこに幽閉して、ラキオスを動けなくしている隙にロースディバと戦争を続けるのが作戦だったんでしょう。ですからウルツシアの住民はクレア様がここにいるとは知らないはずです。そこで搜索願が出たとしたら、ルドルフの悪事はすべて公になってしまいます。彼は地位にこだわる奴ですから、そんなことは何があっても避けたいでしょう」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ロードって・・・・・・・・なんて頭の回る奴なんだろう・・・・・・・・つくづく思うんだけど、ロードに限らずどうして騎士達はみんな頭がいいの？　ルドとステイラは天才的だし、ディナルなんて、もう・・・・・・・・ファリスと並ぶくらいに優秀な奴なんじゃないかと思う。」

「・・・・・・・・やっぱり王妃がいない間にみんな叩き込まれたのかな・・・・・・・・」

「ロードってさ・・・・・・・・元々頭がいいの？　それともそういう風に考える技術をファリスに叩き込まれたの？」

私の言葉にロードはキョトンとした。

そこで私が真剣に聞いているのを悟って、ブツと吹き出してから笑い始めた。

「・・・・・・・・・・なんで？」

「ちょっと、ロード？　なんで笑うの？」

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・くっくっ・・・・・・・・す、すみませ、くっくっ、」

っ」

今度は両手を壁についてバンバンと叩きはじめる。

理解ができない。

眉を寄せて不機嫌そうにすると、まだ笑いを顔に含めながらも口は口を開いた。

「す、すみません。その、陛下には叩き込まれてませんよ？」

あ、そこに笑ったの。

私からすれば真剣に聞いてたんだけど。

「クレア様はいなかったから仕方がないと言えばそうかもしれまんね。その、俺やディナルさん、もちろんルドさんやステイラも幼い頃からラキオス城にいるんですよ」

「・・・え？」

「ラキオスはベンゾラ大陸の中心的な国で、重要な国ですから、国はまだしも城の中には見知らぬ人は許可なしで入ることは認められていないんですよ。ですから周囲に認められた者以外はラキオス城には入ってはいけません。俺達の先祖は全員ラキオス城の騎士だったので、その任務を譲り受けただけなんです。ですから幼少時の頃より鍛えられているのです」

「なるほど・・・」

確かに考えてみれば、ラキオス城の中では見た事がある人しか見

かけない。仕立て屋だって私専用のレイラさんとファリスの仕立て屋のクリスさん、侍女たちや兵士達までもが顔なじみばかり。

来訪者をどうして気安く入れないのかと思っていたら、そんな理由があったのね。

「・・・ まだまだ習うことが多いみたいだね、私も」

私の言葉にロードはニコツと笑った。

「大丈夫ですよ。まだ二年しか経っていないのですから、そういう細かいことを知らないのは当然です。そのために俺達やサマヘルカ様、ジェシカさんがいるんですよ」

「・・・ サマヘルカには教えられたくないな・・・」

ポツリと零すとロードは笑いを零した。

「それは俺ですよ」

人の波に押されて二人で人通りの少ない道へ入ると、ロードの警戒心はますます高まった。安全な場所にいくのだから人通りは少なければいけないと思ったんだけど、彼が思うには人通りが少なければ少ないほど、ウルツシア軍の人達が襲いにくくなるとのこと。

じゃあ通らなければいい話だと思うんだけどな。

・・・ まあ通らないと牢獄されていた場所から離れられないから仕方ないんだけど。

道が二つに分かれていたため、どちらの道に行くかを聞く為に後ろを見ると、

心臓がとまるかと思った。

第13話 救出（前書き）

長めです。

第13話 救出

男二人がロードを押さえつけて、ルドルフは憎たらしい笑顔で剣をロードの喉に突きつけていた。思わず駆け寄ろうとした私に、牢獄で威嚇した男達が剣を向ける。

息を飲んで立ち止まった。

「そう。とまってもらいましょうか、王妃。それ以上動いたらロード殿は刺されますよ?」

「っ……」

気づかなかった。いや、私はともかくロードが気づかなかったなんて。

悔しそうに歯ぎしりをすると、ルドルフは顔に浮かべてあった笑顔をますます大きくした。

「私共の中には、姿を消す能力を持っている者が存在するものですが、尾行するのはずいぶんと簡単でした。まさか自ら人気の少ない道へ入るとは思いませんでしたかね」

「……なんて、奴なのよあんたっ……!」

「今度ばかりはどうにもできませんよ? 王妃。炎を出したその瞬間、彼は死にます」

「……っ……」

「死んでほしくなければ、ついてきてもらいましょうか」

そう言って道から出ようとする彼の後ろ姿を睨みつける。ルドルフはニヤニヤ笑いながらロードの喉に剣をつきつけているが、歩いているためか、喉と剣の間には少し隙間が出来ている。

・・・なんとかこの状況を抜け出すことはできないか。炎を出してもこんな大人数を囲むほどの力はないし、もしもルドルフまで炎が回らなかったら彼は恐らくロードを刺してしまう。それに大通りに出るとなればたくさんの人がいるし、その人達を巻き込むわけにもいかない。

こういう時に私の炎がもう少し調整しやすかったらな、と思う。考え込んでいると、後ろにいる男に促されて、私は渋々歩き出した。

そこで、ふと思った。

王妃の私を人気の少ない道から出して大通りに出したら、たくさん人の目にさらされる。王妃が人質になっていると分かれば、ウルツシアの住民も黙っているわけにはいかないんじゃないか・・・

「あ、ウルツシアの民に見られても私達は得に困りません。王妃の顔を知っている人は少ないですからね。牢獄から逃亡した者を捕まえたとしてもいえ、彼らは口出しはできません。無駄な抵抗は考えないでくださいね」

「・・・っ・・・！」

思っていたことをニヤニヤしたまま言われて、思い切りこいつの顔を殴ってやりたい衝動に襲われた。

どうして。

どうして私は、こんなにも非力で、無力で、弱いんだろう。

どうして、目の前には身を挺して守ってくれた人がいたのに、私は何もできないんだろう。

私は、結局役にたたないんだ。

王妃という立場でも、そんなのはただの肩書き。実際の私は、自分の民はおろか、自分を守ってくれようとした騎士にすら何もしてあげられない。こんなにもたくさんの人達の上にとって、こんなにもたくさんの人たちを守るのを役目としているのに、私は、何もできない。

いつもいつも守られる立場で、誰も守っていない。

私の力では、誰も守ることができない。

そんな気持ちが顔に出たのか、こちらをチラリと見たロードはふっと笑った。

「クレア様、言ったでしょう？　王妃は守られて強くなる立場だと」

「おいっ！　喋るな！」

ロードの腕を掴んでいる男が叫び、ルドルフの剣を掴む力が強くなった。

「ですから、自分を責めてはいけませんよ」

言い終わって一瞬だった。

ロードは自分の腕を抑えていた男達から素早く腕を引き抜いて、頭を動かずに肘を男達の腹にくいこませる。ルドルフが驚いている間に剣を懷から抜くと、彼の剣を払いのけた。あまりにも速い動きに剣はルドルフの手から滑り落ちて、今度はロードが剣をルドルフの喉につきつける。

恐らく五秒くらいの間に立場が一気に逆転した。

なんて奴だ。

「ろ、ロード」

「クレア様、俺の側に寄ってください。お前ら、動いたら、ルドルフは死ぬぞ」

私には穏やかな口調で言ってから、私の後ろの男達に冷たい声で言い放った。

さすがに二回目の脅迫となると、私達が本気なのを分かっているのか、男達は抵抗せずに大人しく私の腕を離れた。足早にロードの側に寄ると、彼はルドルフに剣をつきつけたまま男達を睨みつけた。

「俺はラキオス王国の国王、ファリス・アステルカの第二騎士だ。幼い頃から陛下直々に鍛えられた。お前らの力など足下にも及ばない。もしもまた俺達に手を出すことがあったら、死を覚悟してもらおうか」

・・・ロード・・・怖い。

怖いよこの人。いつも穏やかで優しいからロードのこんな面は見
た事がない。一度ファリスがロードは怒るとディナルの数十倍は怖
いって聞いてたけど、そうなんだね。優しそうだから余計そう感じ
るだけなのかもしれないけど。

ロードに睨みつけられた男達は固まったまま動かず、剣をつきつ
けられているルドルフも顔がひきつったまま無言でいる。

「すぐにここにいるとファリス陛下にお伝えしろ。そしてここにつ
くまで他人への接触は一切禁じる。もしも応援を呼んだら、お前ら
の隊長がどうなるかは分かっているんだろうな」

「わ、わかっている」

「早く行け。余計なことはするな。たとえここで俺を刺しても、ル
ドルフを刺さずに、俺は死なない」

再びロードに睨みつけられると、男達はバタバタと足音を立てて
走って行く。道行く人々は目を丸めて驚いて私達を見ているが、ル
ドルフがウルツシア軍の隊長で、私がラキオスの王妃だということを
知らないからなのか、ただの喧嘩だと思って素通りをしている。

ロードは顔をルドルフに向けた。

ビクッと彼の肩が跳ねる。つい五分前まで自信に満ちた顔をして
いたのが考えられないくらい真っ青になっている。

いい気味。

「本当にこんなことをして、戦争を持続できると思っていたのか？」

ロードが静かに問いかけると、ルドルフは一瞬顔をしかめた。

「・・・世の中、やってみなければ、分からないことがあんですよ、ロード殿」

「やってみなくてもこれは無謀だとは思わなかったのか。ラキオスはベンゾラ大陸を統一している、この世界でも最も重要な国だ。そのラキオスを敵に回す可能性がおおいにあったというのに、なぜ俺達を誘拐しようと思った」

「あそこの領地を、ロースディバに取られるわけにはいかないのです」

「なぜだ」

「・・・・・・・・・・」

「金か？ 金になるものが埋まっているのか？ ウルツシアは、いつから金なんか執拗な国になった。免除がいるならば、ラキオスに頼めば陛下は必ず何かをしてくれたはず――」

「金じゃない！」

途中で遮られて、ロードは驚いて目を見開いた。こちらを睨みつけているルドルフを見て、私も驚いた。

「あの領地を取られてはならないのです。あそこには、もう千五百年も前からある、ウルツシアの初代国王の墓があります。ロースデ

イバは容赦なくその墓を破壊するに決まっている」

「・・・初代国王の墓？ ウルツシアの初代国王なのならばウルツシアの領地のはずではないのか？ ロースディバにはその領地を貰う権利はないはずだ」

「あそこはウルツシアの領地ではありません。初代国王はウルツシアだけに縛られるのは嫌がり、当時どこの領地でもなかった、あそこ土地を自分の墓にすることにしたんです。だから、正式にウルツシアの領地になっていません。自分達の領地だと言い張ることはできない。ならば無理矢理取り返すしか方法はないでしょう」

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・ずいぶん深い理由に黙ってしまった。

私はてっきりロードの言う様にお金になるものが埋まっているのかと思っていたんだけど。

ロードが黙り込んでしまうと、ルドルフは再び睨みつけた。

「だからラキオスに邪魔されるわけにはいかないのです。あそここの領地を取らなければ、いつロースディバが勝手に乗っ取って墓を破壊するかは分からない。破壊された後では、もう遅いのです」

ウルツシアはラキオスには忠実な国だけれども、それは、国王がいるからだ。

国王の言う事はなんでも聞き入れて、素直にいうことを聞いてくれるのに、今回だけこんなにも必死なのは、初代国王の願いを守りたいからなんだろうか。

はじめてこの国を統一した国王の存在がないことになってしまう

ことを、恐れていたのだろうか。

「だから、何が何でもあなた方を止める」

言った瞬間に、ウルツシア軍の制服を来ている男達が両脇に数十人、いきなり現れた。

・・・忘れてた・・・っ！！ 姿を消す能力を持っている者がいたんだっ！

「ロードっ！」

「とにかく俺の側にいてください！ 離れないでっ！」

油断している間に一人の男がロードの剣を払いのけて、ルドルフの喉から遠ざける。ルドルフが後ろに下がり、彼の前に三人が立ちはだかる。両脇から二人がロードの元に飛び込んできて、ロードは同時に二つの剣を受け止めた。余程の威力があったのか、彼の足が一步だけ後ろに下がった。

彼一人では、こんな大人数を相手にするなんて無謀すぎるっ！
いくらファリスの第二騎士でも、軍隊をたった一人で、私を守りながら闘うなんて出来ない！ どうして、また私は何も出来ずにこんな所で突っ立っているのっ・・・！！

誰か、誰か私達を、ロードを助けてっ！ 誰か・・・っ！！

.....ファリス.....
!!!!

「うぐっ!!」

後ろからうめき声が聞こえて、驚いて振り向くと、一人の男が吹き飛んでロードの足下まで転がって来た。腹からは血が流れており、苦しそうにうずくまっている。

「ぐ、はっ・・・ああああっ!!」

私やロードも含めて全員が驚いて男を凝視していると、今度は叫び声が聞こえて、もう一人男が地面を転がる。今度は腕を切られている男で、私は息を呑んだ。
全員が後ろを見る。

「俺の妻に手を出したことは、命をかけて償ってもらおうか」

その低い、甘い声に、瞬時に胸に安堵感が広がる。

彼の姿を捉えたその瞬間に、彼の、ファリスの腕に飛び込みたい衝動に襲われた。飛び込んで、思い切り抱き締めてもらいたかった。だが一歩でも動く前にファリスにはすぐに私達に近寄って、私を抱き寄せた。

ロードに視線を一瞬移してから、ファリスは剣を構えているルド

ルフにも視線を移す。ルドルフの肩が跳ねる。

「・・・ルドルフ・キトラス隊長。これは、貴方の仕業ですか」
「へ、陛下・・・」

言い訳のつくれない状況に、ルドルフはそれしか口にすることができなかった。

ファリスが剣を彼の喉につきつけたからだ。

「これで正式にウルツシアはラキオスの敵になったことは分かってもらいましょうか。残念ながらウルツシアはベンゾラ大陸から切り離し、免除も一切なくします。良いですね」
「へ、陛下っ！ それはっ」

「自業自得だ」

氷のような声でルドルフの言葉を遮ると、彼はヒツと小さく声を上げる。

ファリスは周りの男達を見回した。私を抱く腕に力が込められた。

「すぐにウルツシアからは出してもらいましょう。ウルツシア軍は、ルドルフ・キトラス隊長と共に悪事を犯したことから、解散させます」

「陛下！」

「異論があるのならば、俺が納得する言葉で説明してみろ」
「・・・・・・・・っ・・・・・・・・！」

顔をしかめて黙り込むルドルフを睨みつけてから、ファリスは背を向けた。いつのまにか集まっていたラキオスの兵士達が、次々とウルツシア軍をまとめあげていく。

人だかりから抜け、ウルツシアの外まで来ると、ファリスは私に向いた。

「ファリス、ごめー」

言い終わる前に力強く抱き締められていた。

私を抱き締める腕からも、彼の苦しそうな表情からも、どれだけ彼に心配かけたのかが、嫌でも分かってしまう。彼の顔を見上げてそっと頬を撫でると、ますます私を抱き締める腕の力が強くなった。

「どれだけ・・・・・・・・どれだけ、心配したと思っているんだ・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・ごめんね・・・・・・・・」

「無事でよかった・・・・・・・・」

抱き締めてくれている彼の背中に腕を回して抱き締め返す。

こんなにも、安心する温もりだっただろうか。

ファリスの側にいるだけで、こんなに安心できるものなのだろう

か。

気づいていなかった。

いつの間にか、ファリスは私のとってかけがえのない存在になっていることに、気づいていなかった。

彼の声を聞いただけで安心して、彼に包まれていると何よりも幸せだと感じている今の状況で、彼を、愛しているのだと自覚した。

第14話 安心（前書き）

更新が遅れてすみません（汗

第14話 安心

「お前はバカなのか」

いや、そんな眉を潜めていうことでもないじゃん。別に。

「バカじゃないよ。普通でしょ？」

「自分を誘拐して、命の危険までせまったというのに、お前はウルツシアを責めないのか？」

「ファリスだって理由を聞いたでしょ？ 私を誘拐したくらいでベ

ンゾラから切り離すなんて可哀想よ」

「お前を誘拐した『くらい』で？ 自分の地位を分かってて、そんなことを言っているのか？」

「当然よ」

ふん、という私を見てファリスは大きな溜息をついた。

だって、本当にそう思う。自分達の国の最初の王の墓が破壊されそうだったから対抗しただけなのに、そんなのでベンゾラから切り離すのは酷だと思う。確かに私を誘拐して、脅しもしたけど、あれは全て自分達の最初の王の墓を破壊されなかったためだったのだ。

それなら、罰を与えるだけでいいじゃないかと思う。

見ての通りファリスは私の言い分に納得はできずにいて、何かなんでもベンゾラから切り離したがっている。

私は自分の置かれている立場はちゃんと分かってるし、確かに王妃を誘拐したのだから切り離すというファリスの意見に筋が通って

いないと言っているわけではないけど・・・ファリスは多分、王妃云々よりも自分の妻を誘拐したからという理由で半分判断してるような気がするし。

「クレア、この問題でお前の見方は俺とは違うことは分かっている。だが、俺の妻で、俺が気に入らないからという理由でウルツシアを切り離そうとしているわけではない」

「え？」

私の考えていることを分かっていたかの様にいうファリスを、私は驚いて見つめた。

違うの？

「じゃあ、やっぱり王妃を誘拐したという罪が重いから？」

「・・・お前は王妃を誘拐するという行為が、どれだけ重罪なのか分かっているのか？」

「そりゃ、重いだろうなとは思うけど」

「やっぱりお前は自分の立場を分かっている」

「分かっているよ！」

「なら」

力強く言われて、ビクッと体が跳ねた。

ファリスは眉間にしわを寄せたまま立ち上がった。

「反論するな」

私達はウルツシアから再びハシエンドに戻って来て、今はハシエンド城にいる。

ルノアード首相は用事があるから出かけていて、今この城にいるのは私達だけだ。今はもう遅くなってしまったからか、戦争についての会議は明日にすることになった。ウルツシアに対しての罰も各国の首相の意見も必要だし、ウルツシアは今は混乱しているからだ。どうやらロースディバもウルツシアの危機を嗅ぎ付けて、更にファリスから連絡があったことではばらくは待機するだろうとのこと。

・・・ さっき、怒らせちゃったかな。

確かに私は、まだ王妃の座について二年しか経っていないのに、ファリスはもう十年も王としてこの国を統一している。当然、政務については、私は口出しできるような立場じゃない。

やっぱり、私は何も分かってないのかな。

コンコンと扉が叩かれて、どうぞと小さく呟くと、控えめに扉が開いた。顔を出したのは、意外にもディナルだった。

「ディナル．．．」

「陛下と痴話喧嘩をして、落ち込んでるんじゃないかと思いきまして」

ディナルの言葉に、私は下を向いた。
「っていうか、どうしてルド達じゃなくてディナルが来るの？」

「．．．．ファリス、怒ってる？」

私の言葉にディナルは微笑んだ。あまり笑う人じゃないから少し驚いてしまった。

「怒っていませんよ。陛下がああなのは、王妃様を心配してのことです」

「．．．．分かっては、いるんだけど．．．」

「陛下は過保護ですからね。王妃様が危険な目にあうかもしれないというのに、当の本人はちっとも気にしていないというような言い方をするからああいうふうに強気な言い方になってしまったのでしよう」

「気にしないわけじゃないのよ？」

「分かっていますよ。陛下もちゃんと。あの方はよく王妃様のことを見ていますから。後で、話しにいつてあげてください」

「うん．．．」

ディナルは頷くと、失礼しましたとだけ言って部屋から出て行く。

ずっとファリスの側にいることもあって、よくファリスのこと分かってるなあ、って思わずにはいられない。そりゃ側近だし、ファリスが王子だった頃から側にいるんだからそれはそうなんだろうけど、まるでファリスを代弁しているように聞こえることが、たまにある。

彼の言う通り、ファリスに話しにいこう。

扉を開けると、両脇に立っていたルドとスティラが驚いて私を見た。ファリスの部屋に行って来ると告げると、二人とも優しく微笑んで見送ってくれた。

私の周りって、優しい人がたくさんいて心強いなあ……

ファリスの部屋の前まで来ると、らしくもなく緊張をしてしまった。大広間で言い合いをして、夕飯も私は部屋で食べたから、かれこれ三時間くらいは口を聞いていない。

……せっかく側にいるのに、こんな嫌だな。だからここまで来てるんだけど。

覚悟を決めて扉を開けようと腕を上げたら、それと同時に目の前にあった扉が開いた。触ったつもりはないのに勝手に開いたのかと思ったら、ファリスが私と同じくらい驚いた顔をして立っている。

「クレア……」

「ファ、りす」

二人の間に沈黙が流れた。
なんでこんなに気まずい？

「え、と、何か用？」

「こっちの台詞だ」

「だよー……」

やりにくそうに顔を逸らすと、ファリスが溜息をつくのが聞こえた。

「さっきは強い言い方をして悪かったと、謝りに行こうと思っていたんだが」

「あ、私も、私がしっかりしてないから、ああなっちゃって、謝ろうと、思ってた」

「……」

同じことを考えていたのか。それが分かって私達はクスリと笑い合った。するとファリスは横にどいて私に手招きをする。

「……入ってこと？」

「え、でも、もう寝るよ？」

「だから？」

「……」

だめだ。ここで言い合っても無駄だ。ここは素直にいうことを聞こう。

渋々頷いてファリスの部屋に入る。扉を閉めた瞬間にいきなり壁に押し付けられたと思うと、ファリスが貪る様に私にキスをしてきた。驚きはしたものの、しばらく会っていなかったから許せるかな

と思つて、なすがままにされる。

珍しく抵抗しない私を、ファリスは一瞬唇を離して、少し驚いて私を見ていた。

「・・・抵抗しないのか？」

「・・・しばらく、離れてたしね」

小さく微笑むと、ファリスも一瞬笑つて、再び激しくキスをされる。意識がもうろうとしてきて、腰に力が入らなくなる。ズツと落ちそうな所をファリスは容易く腕を回して支えようと、背中にもう片方の手を回す。

私も必死に理性を保つていようと彼の首に腕を回した。

ますますキスが激しくなった。

ファリスのことが好きだと感じていなかった時と、感じている時と、こんなに違うんだな、つて思った。

好きだと感じていなかった時は、何も、本当に何も感じてなかった。一生ここで、籠の中の鳥のように生きるんだから、つて。半分諦めていた。それでも抵抗はしてたけど。

でも、好きだと分かってからは、幸せだと感じる事ができた。

本当に、ファリスは私のことを大切にしてくれてるんだつて思えたから。

やっとのことでファリスが唇を離してくれた時は、あまりにも意識がもうろうとしていて視界が揺らいでいた。そのまま壁に背を押し付けたまま地面に座り込んだ。ファリスは私をお姫様だっこすると、ふわりと自分のベッドの上に乗せる。

「……どさくさに、紛れて、何しようとしてんの、よ……」

思う様に言葉が出なくて、とぎれとぎれになってしまった。ファリスは私の言葉に微笑むと、一度だけ優しく口づけをした。

「どうやら俺の気持ちに通じたらしいからな。久しぶりだし、別にいいだろ？」

「……久しぶりって……今は、戦争について、やんないといけないんでしょ……」

「平気だ」

こっちはあまりにも力が抜けていて、話していてやっとだっているのに、ファリスは息一つ乱れていない。それどころか私を見つめる瞳はどこか欲望が感じられる。

「お願い、ファリス……マジで疲れてるから、寝かせて……」
「………分かった」

『分かった』の前に長い沈黙があったが、納得してくれたので私は微笑んだ。やっぱり私のことを大切にしてくれてるなあ……

「だけど、俺の部屋で寝ろ」

「……何、それ。嫌なんだけど……」

「抵抗していいのか？」

「・・・・・・・・分かったわよ・・・・・・・・」

私の言葉にファリスはもう一度微笑んで、最後に二回、短くキスを落とした。

第14話 安心（後書き）

更新していない間にたくさんの人に読んでもらえて幸せです（泣

ここまで読んでくれてありがとうございます。

次回は出来るだけ早く更新できるように頑張ります。

第15話 再び（前書き）

頭を地面にめり込ませる域で土下座します。

第15話 再び

翌朝起きると、目の前にいたはずのファリスの姿がなかった。
あれ？　と思っている間にガチャとドアが開いてルドが入って来る。あたしの姿を見つけると小さく微笑んだ。

「ルド」

「クレア様、陛下がお呼びです」

「え、どこ？　大広間？」

「はい。戦争のことについてルノアード首相と会談しておりますので」

「分かった。すぐ行くって伝えといて」

「かしこまりました」

一礼して部屋からルドが出て行った所で、私はベッドから降りた。少し頭がクラクラする。ここ数日ずいぶんとすごいことばかり起きてたから疲れちゃったのかもしれない。

自分の部屋に戻ってクローゼットからドレスを取り出した。レイラさん特製のドレスって派手だしすごく綺麗なドレスばかりなんだけど、着るのが難しいから侍女がいないと着れないというのが欠点。侍女三人に手伝ってもらってやっと着ると、大広間に足を運んだ。

あたしの姿を見つけると、ルノアードは微笑んでからスツと頭を下げてくれた。相変わらず礼儀正しい人だ。

ファリスに視線をやると彼も微笑んでくれて小さく手招きをした。

・・・
なんだか、いつもより優しい様な・・・

なんとなく嫌な予感がしたけれど、そこで回れ右もおかしいので、彼の横の席に腰を下ろした。瞬時に腰に腕が回されたので嫌な予感の中したと思った。放せといっても放してくれる気はしなかったからなすがままで座っていた。

「王妃様、ご無沙汰しております。昨日はご無事でなによりでした」「ルノアード、久しぶり。心配をかけてしまつてごめんなさい。こんな大変な時に」

「いえ、王妃様がご無事だったのならよいのです」

につこりと微笑んでくれたルノアードにあたしも微笑を返す。

ああ、優しい人だ。

「では王妃様、昨日の今日で申し訳ありませんが、ウルツシアとロースデイバな間の戦争について、話をさせてもらいます」

「え、あの、ウルツシアは、やっぱりベンゾラから切り離すの？」

あたしの質問にルノアードはチラリと隣にいるファリスを見上げる。あたしも隣を見ると険しい顔つきで手元にある資料を見ている。ルノアードの言葉は耳に入っているはずなんだけど。

しばらく沈黙が続いてからファリスが小さく溜息をついた。

「お前を誘拐した理由なども含めて考慮した所、ベンゾラから切り離すことはしないが、国として認めることはもうできない」

「そこまで!？」

「政治的なことにお前は口出しをするな。仕組みが分かっていないだろう」

「・・・・・・・・・・」

いや、まあ、確かに政治的なことに関してはまったく分からないけどさ、じゃあなんであたしを呼んだわけ？

「お前も王妃という立場上聞く権利はあるからお前を呼んだ。それに、ウルツシアがどうなってしまうのか知ってただろう？」

「・・・・・・・・・・うん」

この人って心の中を読む天才だ。

でもウルツシアを切り離さないとして、国として認めなくするということは首相とかもなくなるということだろうか。まあ国として成り立っていないわけだからそれも当然といえば当然だけど。

「他の国と合併するってこと？」

「今の所はその線で行くつもりだ」

「え、逆にそれ以外になにがあるの？」

「ウルツシア自体をなくすという案もあった」

「えっ」

それは、まあ、確かに考慮できるといえば考慮できるけど。それはさすがに残酷だよな。

誘拐されたし、酷い仕打ちを受けたけど別にウルツシアに滅びてほしいわけじゃないし．．．ベンゾラの中の一つの国っていうのもあるし．．．

私の不安がる顔を見てファリスは小さく溜息をつく。

「ロースディバと合併することにした」
「はっ!？」

いや、え、ちょっと待って。

「私の記憶が間違ってなければ、ウルツシアが戦争してたのってロースティバだよね」

「ああ」

「．．．領土争いをしてたよね」

「ああ」

「天敵だよね」

「そうだな」

いや、サラリとそうだなとか言われても。

「ウルツシアの首相にはもう話が届いている、あっさりと承認してくれた」

「っていうか選ぶ権利はないんでしょ」

「まあな」

「……ファリスって、国王じゃなければ絶対に嫌われるタイプだよね。」

私も第一印象はかなり悪かったし。まあ長い間一緒にいれば良さも分かるんだけど。」

「でもそれってあまりにもウルツシアがかわいそすぎじゃない？」

「何言ってるんだ。王妃を誘拐した上にラキオスに逆らったんだぞ？ 国を滅ぼさないだけマシだと思ってくれなければ困る」

「……」

サラリと、恐ろしい発言を……したような……。

「あれ？　じゃあウルツシアが守ろうとしていた領土は！？」

「ロースディバとウルツシアが一つの国になるのならば、あそこは両国の間だし、ロースディバのものとなるだろう」

「……でも、破壊されないよね？」

「ベンゾラ大陸の中でも数少ない偉大な人物の墓だ。そんな簡単に破壊したりはしないし、これから先も破壊するつもりはない。ロースディバにも言っておいた」

「……なら、いいんだけど」

いくら大罪を犯したとはいえ、国まで取られて守ろうとしていた初代国王の墓まで破壊されたら可哀想すぎだもん。

安心して胸をなで下ろす私を、ファリスが横からじっと見つめて来る。

「な、何？」

「……なんでもない」

いやいやいや、あんたが私に意味ありげな視線を向けてなんでもないわけがないでしょーが。

もしかして『こいつ誘拐されたくせにまだ敵国を庇うつもりか』みたいな感じの視線だったのかな？

うわー。超あり得る。

結局私を呼んでも対した話はしなかった会議は終わり、ファリスは政務に戻り、私は暇だったので彼を手伝うことにした。雪でも降るんじゃないか？　と言われた時は思い切り紙の束を顔面に投げつけたけど。

そして簡単に避けられたけど。

政務を整理していると、一つの資料が私の目に止まった。

『ティマ大陸侵略計画』

と書いてある。

十ページほど厚い束になっており、表紙にはそのタイトルの下に『極秘』という判子が押してある。

・・・ファリスに聞かなくても分かる。

いや、まあ、誰でもこれを見たら聞かなくていいんだけど。

ティマ大陸に、侵略するつもりなのだ。私達が。

この世界はベンゾラ大陸で成り立っていると言われているが、それはただたんにベンゾラが一番大きく、強力な大陸だからだ。確かに地図などにはベンゾラ以外は殆ど書かれていないけれど、ベンゾラの南西に、ベンゾラに比べたら非常に小さな大陸が一つだけある。それがティマ大陸だ。

非常に小さく、ベンゾラと比べたら軍隊の力も弱く王の権限も殆どない。王はどちらかといえば大陸の象徴であり、国をまとめるのは殆ど首相の仕事だ。その首相も対してよく働いているわけではなく、国民も彼らを上級の者とは思っていない。

それだけ小さく弱い大陸で、ベンゾラに敵わないも同然なので殆どベンゾラが仕切っている状態なのだが、正式にベンゾラ大陸の一部というわけではない。

そんなに弱い国がまだ一つの大陸として成り立っているから、正式に一部にしようとしているのかな。

でも、戦争もまだ丸くおさまってないっていうのに、他の大陸に侵略？　いくらウルツシアをロースデイバと一緒にして、戦争を終わらせても、国内で争いが絶えることは絶対じゃない。

そのためにも数年、いや、せめて数ヶ月は様子をみないといけないのに。

私は束を拾い上げると、机に向かっているファリスの前にボンと置いた。

ファリスが驚いてこちらを見上げる。

「これ、どういうこと？」

率直に聞くと、ファリスは視線を伏せた。

題名で結構全てがバレバレだし、私がなんとなく状況を把握していることを察したんだろう。

「……………まだ侵略するかどうかは決まっていないし、準備状態なんだ。『もしも侵略するのなら』ということでこの資料を用意している」

「どうして私に言ってくれなかったの？」

「……………準備状態だったからだ」

グツと拳に力を込めた。

「私は王妃なんじゃないの？　そういうことを、知ってていい立場なんじゃないの？」

「……………そうだ」

「じゃあどうしてこのことは知らないの？　ファリスは、いつもそう。いつもいつもいつもそういう重要なことを私から隠すの」

「隠していたわけじゃない。この計画に、お前は関係なかったんだ」

プツツと頭の中で何かが切れた。

「関係、ない？　この戦争だって、私には関係ないじゃない！　そ

れなのにファリスは私を連れて来た！ 私に出来ることは何もないし、逆に私は誘拐されて迷惑をかけたじゃない！！ 大陸内で起こってる戦争もおさめてないのに、どうして他の大陸に侵略する余裕なんてあるのよ！！」

「だから準備中だといっただろう！ まだ侵略するかどうか決まったわけじゃない！」

「でもサマヘルカは知ってるでしょ！？ 各国の首相も知ってるでしょ！？ どうして私は一番ファリスに近い立場にいるのに、そういうことを教えてくれないの！？」

「教えた所でお前は どうするつもりだ！！ まだ王妃の座について二年しか経っていないのに、お前に何が出来る！！」

「っ……！！」

痛い所をつかれて、言葉が詰まる。

ファリスは立ち上がって私を鋭い目つきで見つめていて、私も彼を睨み上げていた。昨日仲直りしたばかりなのに、また喧嘩になっちゃったのは嫌だったけど、これだけは、譲るわけにもいかなかった。

それなのに。

下唇を噛んで言葉を返さない私をしばらく見つめてから、ファリスは腰を降ろした。

「…… 政務をやる気がないのならもう部屋に戻れ。お前に政務を手伝ってもらうことが間違っていた。悪かった」

「……」

遠回しに、帰れ、って言ってるのね。

言われなくても帰ってやるわよ。

一度ファリスを睨みつけてから足下にあった資料をわざとばらまけてから部屋を後にする。子供っぽいのは承知の上だけど、あれくらいやらないと気が済まない。

ファリスはそれをただ無言で見つめた。

不機嫌そうな顔で部屋から出ると、扉の側で控えていた騎士四人が気まずそうに私を見る。

……今の会話、普通に聞こえてたわけね。

「気分が悪い。部屋に戻る。夕飯もファリスとは一緒に取らない。ぜつつつつつたいに取らない」

「クレア様！」

「喧嘩したいわけじゃないけど、今回はマジで頭来た。やだ。もうあいつやだ！」

「王妃様！」

ルドとスティラが後ろから追って来て、部屋までついてきた。

二人は自動的に扉の前で止まり、私はそのままズカズカと入る。

バンッ、と窓を大きく開けて、大きく息を吸った。

「ファリスのバカやろおおおおおおおおお！……！！！！！！」

まだ開いていた扉の側にいたルドとスティラが驚いて目を丸めたのは言うまでもない。

第15話 再び（後書き）

更新遅れて本当にごめんなさい！！><

しばらくスランプが続いていて、アイディアがちっとも文章になつてくれなくて、ウガーってなってもうだめだと撃沈してましたorz

ボチボチ書いていたんですが、納得する内容にならなくて消して最初から始めたりなどと少し苦勞をしていました。

遅れて本当にごめんなさいっ！！><

それでも読んでくれる方々、本当にありがとうございますっ！！

第16話 ティマ大陸（前書き）

なんか、もう・・・

ごめんなさいっ！

第16話 ティマ大陸

「シヨン様」

部屋に女性の声が響いた。

入り口に向かうように置いてある机に一人の男性が向かっている。薄紫に銀色がかかっている美しい髪で、俯いているため表情などが見えないが非常に形のいい顔をしている。両側には本棚が二つずつ横に並んでおり、女性が立っている入り口の両側にも本棚が三つずつ横に並んでいる。殆どが何かの資料のように見えるが、男性の右側の本棚は私物で突き詰められていた。

「ん？」

シヨンと呼ばれた男性が顔を上げずに答えると、女性はそれを入れてもいい合図だと取ったのか、彼の方に足を運んだ。

彼女もまた薄紫に銀色がかかっている髪で、肩の所で短めに揃えられている。瞳の色は美しいグレー。肌は遠くから見ても分かるくらいに素晴らしい質で、見ているだけでうっとりとしてしまうほどの美貌だった。

彼女はそのまま手に持っていた何枚もの資料をドサッと遠慮なく男性の机の上に置くと、彼はチラリと顔を上げた。

そこで初めて彼の顔が見えた。深い青の瞳で紙を見ていて、完璧な位置と形である鼻が美しい顔の真ん中にある。口は引き締まって

いて、素晴らしく形のいい唇をしている。一瞬見ただけで思わず釘付けになってしまうほどに完璧な顔をしている。

シヨンはあ、と溜息をつくと紙に手を伸ばした。

「その前にシヨン様」

一番上に乗っている紙を手を持った瞬間に女性、レズリーがバンツと勢い良く掌を振り落とした。驚いて思わずシヨンが紙を手放す。それからレズリーに視線を向けると、彼女は咎めるように美しいグレーの瞳で睨みつけて来た。

「なんだよー。今回はちゃんと仕事やるってー」

子供のように口を尖らせて言うシヨンにレズリーは溜息をついた。

「シヨン様の仕事量に対して文句を言おうとしているわけじゃありませんわ。それに対しては大満足です。私が聞きたいのは、このことです」

ピラッとはどこからもなくレズリーが一枚の紙を出すと、それを机に突きつけた。

紙に書いてある文字を見て、シヨンの眉がピクリと上がる。

紙には『ティマ・ベンゾラ大陸合併作戦』と書いてある。

シヨンが何かを言う前にレズリーが口を開いた。

「私^{わたくし}は一切何も聞いていませんが、それはどうしてです？」

「……いや、まだ準備中で？」

「準備中だろーがまだ貴方の頭の中にあっただろーが私に教えるべきでは？」

口調が妙に乱暴になったレズリーの言葉を聞いてシヨンの口がひくつと上がった。

レズリーが苛立って来ると口調が乱暴になるのは誰だって知っている。落ち着いている時と怒っている時の表情が殆ど変わらないため、初対面の人では彼女の気持ちを一切見通すことができないほどだ。それが彼女の長所でもあり、同時に冷酷な人間だと思わされるために、短所でもある。

レズリーの視線が一切揺るがないまま真っ直ぐと自分の瞳を見つめてくるので、降参するようにシヨンが両手を上げた。

「で？」

「いや、だから見た通りだって」

レズリーの目が細められる。

「・・・ベンゾラ大陸と合併するおつもりですか」

「そう書いてあるだろ？」

「認めません」

「レズリー」

いい加減にしてくれ、というように彼女の名を呼ぶとレズリーは眉を寄せ、紙を押さえしていない方の手は強く握りしめられていた。

レズリー・マクライドはシヨンが知っている誰よりも自分の国を愛している女性だ。

彼女はティマ大陸のソストナ町で生まれ、二十の時に一度ベンゾラ大陸にいったことがあるが、一年も経つとそこが耐えられなくなりソストナに帰って来てしまった。五年前、仕事でソストナに行った時に、酒場で働いていた時の彼女の働きっぷりにシヨンは一目惚れをした。そこから少なくとも馬車で二日はかかる大きな町のヒンリスに連れて来て、自分の秘書にしたらから彼女も休みがある度にソストナ町に帰るのだった。

それほどに故郷を愛し、ティマ大陸を愛している彼女に取って、合併というものの酷なことであった。

何よりもこの世界を成り立たせているベンゾラ大陸、いや、ファリス・アステルカが支配している大陸の一部になってしまうことは、彼女に取っては非常に悲しくて、悔しいことだった。五年間も彼女を見ていると、心底ベンゾラとファリス国王を嫌っていることが分かる。

「例え一人取り残されたとしても、私は一人で戦います」

「何言ってるんだよ。ここ十年間はベンゾラに支配されているような

もんだろ？」

「でもまだベンゾラの一部にはなっていないでしょう」

食い下がるレズリーにシヨンが溜息をついた。

「レズリー、いい加減にしてくれ」

「貴方は私のようにこの国を愛していないからそういうことが言えるんだわっ」

充分に言葉に怒気を含めてから、レズリーは踵を返して部屋から出て行った。

一瞬呼び止めようとしてからシヨンは頭を横に振った。たとえばそこで呼び止めたとしてもかける言葉はない。

『私のようにこの国を愛していない』

レズリーの言葉が頭の中に残り、シヨンは目を閉じた。

「……きつびしーなあ……」

「クレア様！　いい加減にしてください！」

ジェシカの言葉にはっと目が冷めた。

そうだ。もうハシエンドからは帰って来たんだっけ。っていうかまだ帰って来て二日しか経ってないのにいきなりジェシカの授業はキツイって。

一週間ほど前に、私とファリスは一言も口を聞かないままルノアードに別れを告げて、ハシエンドを後にした。ウルツシアとロースディバには合併話が回ったばかりだから少し混乱していて、落ち着くまでには非常に時間がかかりそうで私達には何もできないらしいので帰って来てしまった。

ラキオスへの帰り道で、馬車に乗っている間も、一緒に馬に乗っている間も一言も喋っていなかったから周りの人達が居心地悪かったのは分かっていた。それでもなんとなく口を聞く気にはなれなかった。

ファリスも同じだったのだろう、少しピキピキしていたのは馬を見ていれば分かることだった。

はぁ、と溜息をつく、紙に何かを書き込んでいたジェシカが顔を上げた。

そういえば、私の部屋に無断で入れるのってファリスとジェシカと侍女達だけだよな。いや、無断で入るのはファリスだけでジェシカや侍女達はちゃんと私が部屋に到着するまでは待っているんだけど。

「クレア様、何かお悩みでもあるんですか？ ハシエンドからお帰りになってからいつも溜息をついているような気が．．．」

「え、うそ。そんなに溜息ついてる？」

「私が見ている限りでは．．．」

苦笑を浮かべるジェシカの言葉に、はじめて私が周囲に分かるほどに悩んでいる態度だったのが分かった。

いや、悩みというか、どうやったらファリスと再び話せるようになるかなあ、って悩んでただけで。

．．．．．

悩みだな。

「そんな大きな悩みじゃないんだけどさあ．．．」

「陛下に関することですか？」

ピシヤリと言い当てて来るジェシカの言葉にうっと顔が歪むと、ジェシカはクスクスと可愛い笑い声を上げた。ドア越しに聞いているスティラがその声に微笑を浮かべたに違いない。

．．．．．
「そういうばどうして私の部屋って防音じゃないんだろう？
これでも女なんだからプライバシーの問題とかあるじゃない？
いや、別に防音にしないといけないほどに何かをするわけじゃないんだけどさ。」

ああ違う違う。脱線してる。そんなことはどうでもいいんだって。

「いや、まあ、えと……うん」

ジェシカの瞳がじーっとこちらを見るので小声で言うとうとジェシカがにっこりと笑った。

「そうだと思いました。他言はしませんので存分に相談してくださいな♪」

……え、ちょ、待って。何この流れ。

今って講義中だよね。

「あの、ジェシカ？ その、今って講義中だよね？　なんで恋愛相談に乗ろうとしてんの？」

「クレア様も帰って来たばかりですから少しくらいは休憩を取りましょう」

出たよ。

自分にとって都合のいい時だけ休憩にするんだからもー。眉を寄せてじとーっと見てても、ジェシカはニコニコ顔を崩さない。さあなんでもぶつけなさい、って言ってるような顔だ。

しばらくしても溜息しか漏らさない私を見て、ジェシカはしびれを切らしたのか、口を開いた。

「そういえばお帰りになってからちつとも陛下と話している所をみたことがないんですが、喧嘩でもしたんですか？」

「……いや、まあ、うん。そんな所かな」

「なるほどー」

「何がよ」

「クレア様がそれだか悩むということはいつもの喧嘩ではないという事ですよね」

「まあ、そういうことになるのかな」

「なるほどなるほどー」

「だから何がよ」

そんな『なるほど』連発されてもこっちとしてはちつとも解決策じゃないんだけど。

「あっ！ クレア様ってもしかして、陛下への愛を自覚したんですか！？」

「……そんなサラリと愛とか言わないでくれる？ 聞いているこっちが照れるんだけど」

「そうだと思いますー。いやー、長い道のりでしたねー」

ほんとこの子って私と話してる時ってくださった口調になるよね。いつからこんな口調になったのよ。

ファリスに対してはバカ丁寧な話し方なのに。

じゃなくて。

「ちょ、長い道のりってどういう意味よ」

「だってクレア様ってずっと陛下を想ってらっしゃったのにちっとも自覚しないんですもの」

「・・・あれ、そんなに明白だった？」

「すごく態度に出てるんですがクレア様がちっとも自覚なさらないのでもどかしいったらありませんでしたよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんなに分かりやすかったんだ。

ってゆーか私自身が自覚してなかったんだから分かりやすいも何も、私からしたら何かしてるつもりじゃなかったんだけどな。

・・・・・・・・私って結構城の人に見られてるんだなあ。

「それで愛を自覚した後に喧嘩してしまっただけですね？」

「だから愛、愛って連呼しないでよ。恥ずかしいってば」

「お二人が喧嘩するのは珍しいことじゃないんですが、今回は少し雰囲気が違うから心配していたんですよ」

「だからね？」

「へいかったっ！！！」

廊下から響いたサマヘルカの大きな声に私は途中で言葉を切って、驚いて二人して顔を上げた。

そのまま慌てて私の扉の部屋を開けて廊下の方を見ると、丁度フ

アリスを追ってサマヘルカが角を曲がる所だった。私とジェシカは目を合わせてからルドとスティラに視線をやると、二人が困惑した表情で見返して来た。

「何があつたの？」

問いかけるとスティラが頭を横に振ってから口を開いた。

「分かりません。いきなり陛下が部屋を飛び出したと思うと、サマヘルカ様が続いただけですの……」

「変ね」

「はい」

「様子見てくるわよ。ついてきて」

「あ、はい」

私はあまり命令しないからなのか、一瞬私の命令口調に驚いてからルドとスティラが歩き始めた私の後を慌ててついて来た。少し戸惑ってからジェシカも控えめに後ろにつくのが分かった。

それを見て、スティラが少しだけ歩くスピードを遅くする。

……まったく。私とジェシカが同時に危険にさらされた時はどうするのやら。

角を曲がるのと同時に、サマヘルカが執務室から飛び出して来た。

「サマヘルカ！」

呼びかけると彼は驚いて振り向いて、私の姿を見つけると一度だけ戸惑った。

「何が起きているの？」

彼が何かを言う前に問いかけると、一度チラリと執務室を見つめてから小声で話し始めた。

「……手紙が、届きました」

「手紙？」

「はい。ティマ大陸から」

『ティマ大陸』と聞いた瞬間に思わず目が見開いて、私はファリスがいる執務室を見た。

宣戦布告の手紙とかなのかな。宣戦布告すれば戦争になるのかよくわかんないけど。とゆーかティマ大陸ってすごく弱いからベンゾラには敵うわけないと思ってたんだけど。

「入っても良い？」

「だ、だめです！」

言いながら扉のノブを掴むのと同時にサマヘルカが叫んで、困惑

した表情で彼を見た。

「どうしてよ？」

「・・・入っては、なりません」

「だからどうして？」

「・・・だから、その・・・王妃様はご存知ないと、おもおうのですが・・・」

言葉を濁すサマヘルカをますます困惑した顔で見つめる。

「・・・手紙は、ティマ大陸の首相であるシヨン・リグリー様の秘書、レズリー・マクライド様からだからでございます」

後ろで、私の騎士二人とジェシカが鋭く息を吸う音が聞こえて、ただことではないと分かった。

第16話 ティマ大陸（後書き）

今回は少し長めでした。

もうほんと最近謝ってばかりですよねorz
本当にすみませんでした＞＜

ここまで読んでくれてありがとうございます＞＜

第17話 ファリスとレズリー

目の前の紙の束をただただ睨みつけていると、隣に座っているジエシカが苦笑を浮かべた。珍しく部屋に入って来ているルドとステイラは困惑した表情をしている。

手を上げて紙を掴もうとして、躊躇してから手を降ろした。それから溜息をつく。

もう、さっきから何十回もこの行動を繰り返している。

「クレア様？ 無理して見なくてもいいんですよ？」

「……そうなんだけど、さ……」

さすがに、気になるんだよね。

いや、私の立場で気にならない女なんていないと思うんだけどさ。

……見てしまっ、いいのだろうか。

遡ること三十分前。

「れずりー、まくらいど？」

「はい」

「え、誰それ」

サマヘルカが苦虫を噛み潰したような顔で答えると、私はすかさず疑問をぶつけた。だけれどもそれ以上は何も言わないので、私は眉を寄せると後ろに振り向いた。

驚くことにルドもスティラも、ジェシカまでもがやりにくそうに下を向いている。ルドに関してはあまりにもきつく眉を寄せてるから跡が残ってしまわないかと心配するほどだった。

訴えるような視線で三人を見つめていても、誰も何も言わない。

……何なのよ。

「何が起こったのかを教えてくださいるんだったら、説明も最後までしてよっ」

苛立ったような口調でサマヘルカに言うと、彼は一度口を開いたが、一瞬躊躇ってから再び閉じてしまった。

ああ、もう！　なんだっていうのよ！！

眉を寄せたまま彼を睨みつけて、執務室に入ろうとすると、あろうことにサマヘルカが腕を掴んで来た。

……王妃の座について二年しか経っていない私でも、国王や

王妃に気安く触ってはいけないことは分かっている。その証拠に、私が王妃になってから気安く触ってくるのはファリスとレイラさんだけだ。レイラさんだって一度『失礼しますね♪』とか言ってから触って来るし。

時々ルドとかステイラとかも断りなしで腕を掴むこととかあるけど、それは私が危険にさらされた時とか、危険なものから遠ざけるためとか、やむを得ない時のみ。

特に危険でもないのに、私を止めるためだけに腕を掴む事はすごく無礼だということを知っている。

驚いて目を見開いてサマヘルカを見ると、彼は私と同じくらい驚いた表情をしてからパツと腕を放した。

「も、申し訳ありません、王妃様！ 本当に、いや、普段ならこんなことはしないんですが……！」

「……いや、別に私はいいんだけど……」

私は、別にいいんだけど。

そう呟いてからドアを見ると、その視線を追ってサマヘルカが恐る恐る視線を動かした。

ファリスがものすごい形相で彼を睨みつけている。

「へい、かつ……っ！」

「今、クレアの腕を、掴んだな？」

「と、咄嗟に！ 誰も入ってはいけないと思っていましたので！」

「……腕を掴んだな？」

「も、申し訳ありません!!」

ひたすらペコペコと頭を下げるサマヘルカを見て、申し訳なくなつて彼の肩に手を乗せた。

「サマヘルカ。顔を上げて平気よ。私は別に構わないから」

「いえ、そんな……っ！」

「……」

言つて笑いかけると、隣にいるファリスが睨みつけてきたのが分かった。

構うもんか。

「……サマヘルカ、手紙のことは説明したか」

てつきり怒られるのかと思つたから驚いてファリスを見ると、険しい顔つきでサマヘルカに問いかけた。サマヘルカも絶対に怒られると思つていたのか、一度マヌケな顔をしてから口を開いた。

「あ、その、差出人だけです」

「……クレアに、レズリーのことを説明しておいてくれ」

驚くサマヘルカを放っておいてそれだけ言い残すと、ファリスは再び執務室に籠ってしまった。

「……ファリスが、違う女の人を呼び捨てにするのは聞いた事があるけれど、『レズリー』と言った時のファリスの口調は、なんか違った。何かを大切にしているような、強く言い過ぎたら壊れてしまうのではないかと恐れているような、そういう言い方だった。

なんとなく胸が痛んだけれど、決してそれを嫉妬と認めることはせずに無言にサマヘルカについていった。

「陛下が仰るのなら、王妃様にも説明いたします」

「……お願いするわ」

「……レズリー・マクライド様は、今から六年前にベンゾラを尋ねて来た女性でして、とある事情で陛下と非常に親しくなった女性でございます」

「……」

無言になった私をチラリと見てから、サマヘルカは一つの部屋に入った。部屋の前で立ち止まって待つ私を、ルド、ステイラ、ジェシカの三人が心配そうに見ている。

紙を探し回す音が少しだけ響いてから、サマヘルカは一つの紙の束を持ちながら出て来た。

それを無言に差し出して来る。

「……受け取ってください、王妃様。ここにレズリー様の全てが記されております。王妃様は、彼女が一体誰だったのかを知る権利があります」

「……」

「無理に、とは言いません」

「……」

どうすれば、いいんだろう。

受け取った方がいいのかな。

……でも、受け取ったら、ここに書いてあることを知ったら……後悔をする気がする。

「……クレア様……」

後ろからジェシカが心配そうに呼ぶ声がした。ルドとステイラが心配そうに見ていて、サマヘルカが戸惑っていることも分かる。私は一度息を吸ってから紙の束を受け取った。

サマヘルカが弱々しく笑った。

そして現在に至る。

・・・受け取ったのはいいものの、やっぱり開けることに戸惑ってしまっている。部屋に戻って来て紙を机に置いて、開けようとしたんだけど・・・

いくら王妃だからって、人のプライバシーを勝手に侵害するのはよくないと思う。思う、んだけど・・・

震えだした指で一枚目の紙をめくる。

隣でジェシカが心配そうに見ているのが分かる。ルドとスティラも心配そうに見ている。

そんな三人の心配を感じ取りながらも、資料に目を通し始めた。

『レズリー・ルーストラ。現在レズリー・マクライド。ティマ大陸、ソストナ町生まれ。現在の時点で二十六歳。十六歳の頃に母親が病により他界。二年後に父親が同様の病で他界。両親他界後に名をレズリー・マクライドに変更。両親共に兄妹なし。母親寄りの祖父と祖母は十二年前に他界、父親寄りの祖母は五年前に他界、祖父は病により殆ど動けない状態。二十の時に一度ベンゾラを訪れ、ラキオス王国国王フアリス・アステルカと肉体関係になる』

そこまで読んで私は紙を机に振り落とした。

バチンッという大きな音にジェシカの肩がビクッと跳ねた。後ろでルドとスティラがやりにくそうに足下を動かすのが聞こえる。

「………なに、これ」

「クレアさ？」

「これは何!？」

呼びかけられたジェシカの言葉を遮る様に叫び声を上げた。知らない間に涙が頬を伝っている。

私の叫び声に驚いて目を見開くジェシカを睨みつけた。誰でも良かった。誰でもいいから誰かを責めたかった。

肉体関係ってなに。

なんなのよ。

それは、それはつまり、

……ファリスと愛し合ってたってこと？

「クレア様!」

ジェシカの声と共に肩が掴まれて、はじめて椅子から落ちていることに気づいた。スティラが私を受け止めていて、ルドが水を私に差し出して来た。

震える手でそれを受け取ってから飲み込んだけど何も味がしない。いや、水だから味はないんだけど、多分、今の状態の私だったら何を飲んでも味がしなかったと思う。

・・・ ショックだった。

ファリスに、私以外の女がいたことが。たとえ過去のことだとしても、それでも。

「・・・ クレア様」

「・・・ な．．に？」

小さく声をかけてくるルドに震える声で答えると、彼は眉を寄せたまま口を開いた。

「お話ししましょう。六年前の、陛下と、レズリー様のことを」

第17話 ファリスとレズリー（後書き）

感想・評価などを貰うと創作意欲がむくむくと湧くので、どうかよろしく願います＞＜

第18話 出会い（前書き）

過去の話となっております。

第18話 出会い

「レズリーーっ！」

自分を呼ぶ声が聞こえて、洗濯物をしていたレズリーは手を止めた。顔を上げて、薄紫に銀がかかっている長い髪を手で後ろに振り払う。それから声がした方へ視線を向けると、中から小太りの中年女性が長いスカートを掴みながら走りよって来る。ティマ大陸では珍しくない、薄紫に銀色がかかっている髪が左右に激しく揺れている。

その光景に笑いを浮かべて、レズリーは立ち上がった。

「ちょっとエルーラさん。お昼作ってたんじゃないの？」

エルーラと呼ばれた女性は息を切らしながら屈んで両手を膝に置いたが、それも少しの間だけであり、それからバツと顔を上げた。

「それ所じゃないよ！ あんた、ベンゾラ大陸へ行くって本当かい！？」

エルーラの言葉にレズリーの目が見開いた。
ベンゾラへ行くという話は、エルーラには最後に話そうと思っていたのに。

「え、どこで聞いたの？」

「さっき買い物の帰り道でマーガレットが声をかけてきたんだよ！知ってる様子なのはあの子だけじゃないようだし、なんで町の人には知ってるのにアタシは知らないんだい？」

「いや、エルーラさんには最後に話そうと思ってて……」

「普通は最初に話すだろう！ 相変わらず変な子だねっ。洗濯物は置いときな！ これからアタシとあんたで重要な話し合いをするんだから！」

そう言うってから強引にレズリーの腕を掴むと、二人はズカズカと家の中へと入って行く。

エルーラ・ベネットはレズリーの両親の親友であり、両親が亡くなってしまったすぐ後からずっと一緒に暮らしている。自分よりも三十以上も年上なのにも関わらず、レズリーは彼女のことを姉のように感じており、大切な友人のようにも感じていた。優しくもあるが、時には厳しく自分を接する所は母のように感じて、レズリーはこの上なくエルーラに感謝をしていた。

ベンゾラ大陸、正確に言えばラキオス王国を訪ねると決めたのは三ヶ月ほど前である。ソストナ町で生まれ育ち、ソストナ以外の空気に触れた事がないレズリーは、学校や講義などでよく耳にする『ラキオス王国』のことが気になったのだった。

聞く分には、殆どベンゾラ大陸がこの世界を成り立たせていて、そのベンゾラ大陸の中心の国であるのがラキオス王国らしいのだ。自分よりも一つ年上の男性が王をやっているらしく、見事な働きっぷりだというのも聞いている。また、先代の王達は全員二十までには

妃を迎えているらしいのに、彼は見向きもせずに一人で全ての政務をこなしているというのだ。

自分達が住んでいるティマ大陸は非常に小さく、王がいたとしても殆ど象徴としていただけであり、真剣に政務に取りかかることは殆どない。あまりにも弱いので、周りの領土に侵入して国を大きくさせることも出来ず、殆どベンゾラ大陸の一部になっていた。

レズリーはいくら小さくてもティマ大陸を愛しており、芯がとも強い大陸だというのも分かっているつもりだった。ベンゾラを実際に見たことはないため、ティマ大陸に来ることもせずに自分の国同様に扱ってくるベンゾラが一体どれだけの大陸なのかを見たかったのだ。

それでもティマを、いや、ソストナ町を離れることはとても悲しいことであり、何よりもエルーラを一人で置いて行くのは後ろ髪を引かれる想いだった。

だからこそ、どうしてもエルーラに告げるのに戸惑ってしまい、だとしたら最後に告げようと決めていたのだった。

レズリーがそういうと、エルーラは一度酷く無防備な顔をしてから大きく笑い声を上げ始めた。

その光景にレズリーが眉を潜める。

「ちょっと、笑わないでよっ。これでも一生懸命考えてたのよ!」

「わ、分かってる、分かってる分かっている。あっはっは・・・っ! そんな心配してたのかい、あっはっは!」

「・・・・・・・・・・」

「ご、ごめんごめん! そう睨むなって!」

ムスツとした表情で睨みつけて来るレズリーの肩をポンポンと叩いてからエルーラはもう一度笑い声を上げた。それからしばらくしても落ち着かないのを見て、レズリーは椅子から腰を上げる。

その動作にやっとエルーラの笑い声が落ち着いた。

「待ちなつて！ ごめんごめん、笑って悪かったよ。でもさ、レズリー。あんたはアタシの心配なんてしなくてもいいんだよ？」

「・・・でも私がいなくなったからエルーラさん一人じゃない。家事とかはどうするつもりなのよ」

「あのねえ、あんたが来るまでどうやって家事こなしてたと思ってんのさ？ 家政婦でも雇ってたと思ってるのかい？ こう見えても体力だけは有り余ってるんだよ。あんたがいなくなつてどーってことないさ」

「・・・でも？」

「いいかい？」

エルーラの言葉を聞いても渋るレズリーの言葉を遮って、エルーラは彼女の後ろに回ると両肩に手を乗せた。

「アタシはね、今までずーっと一人で暮らしてたもんだから、誰かと一緒に暮らすのには慣れてなくてね。だからあんたが来た時は不謹慎にも結構嬉しかったんだよ。だけどさ、アタシがあんたの世話を見てるからとか、恩があるからとか、そういうくっだらな理由であんたの自由を奪って、こんな所に縛り付けることはしたく

ないんだよ。ベンゾラにどうしても行きたいのなら行けば良いさ。それで嫌になったらここに返ってくればいいし、ベンゾラに住みたかったらそこに住めば良い。アタシや止めないよ。アタシとあんたは家族だからこそ、離れてたって平気さ。な？ レズリー」

話している途中で肩が震えだしたレズリーに優しく微笑みかけながら彼女の顔を覗き込んだ。下唇を噛みながら静かに涙を流している彼女の額に口付けを落とすと、エルーラは彼女を優しく抱き締めた。

「行きたい所に、どこへでもお行き、レズリー。アタシは、いつでもここにいますから」

「……っ……ひっく……」

一度しゃくりあげてから頷くレズリーを感じて、エルーラは微笑んだ。

「陛下、出かけるのなら誰かを連れて行った方がよいのでは？」

入り口の目の前まで来た瞬間に後ろから響いて来た低い声に、ファリスは心中溜息をついてから振り向いた。

自分の第一騎士であるディナルが木で出来ている剣を何本か持ちながらこちらを見ている。彼は将来ラキオス城を守る者に剣術の稽古をしている。といってもやはりファリスの第一騎士であるため、彼が許す時にだけであるが。

今は稽古をしている中庭へ行く途中なのだろう。

今度は音を出して溜息をつく、ファリスはディナルに言い放った。

「じゃあお前がくれればいいだろ」

瞬時にディナルの眉が寄る。

「……………稽古があるんですが」

「俺が許せば稽古をするんだろう。今は許していない。出かける。今すぐついてこないんだったら一人で行く」

「どこのわがまま子供ですか」

「……………」

言った瞬間にファリスの絶対零度の視線がこちらを見たため、デ

イナルは溜息をつくと何本もの剣を近くの壁に立てかけた。

「分かりましたよ。行けばいいんでしょう行けば」

「無理して来なくてもいいぞ」

「行きますよ」

それからすぐ側の部屋に入り、自分の本物の剣を取り出して来る。

・・・町へ出かけるくらいでこれだ。

これだから王は面倒なのだ。

町へ入った瞬間に人々の注目が自分に向いたのを見て、ファリスは眉を寄せた。

「・・・慣れないな」

「王の座についてからしばらく経つんですから慣れてください」

「そんなことを言われてもな？」

「ないって言うてるでしょーが！」

ファリスが話をしている途中で、路地裏から強気な女性の声が聞こえた。思わず二人してそちらに視線をやると、深い赤のローブを羽織って、四、五人の男性に囲まれている女性がいた。こちらには

背中を向けているが、フードはかぶっていないので、薄紫に銀色がかかっている長い髪なのが伺える。

その髪の色を見てファリスは少し目を見開いた。

幼い頃の教育係が一度だけ自分に言ったことがあった。確かティマ大陸の話をしており、挫折した時に聞いたのだ。

ティマ大陸のある地域では、たとえ家族でなくともその地域や、その周りに住んでいる人々は薄紫に銀色がかかっている髪の色をしていることが多いというのだ。

ラキオス王国、それ以前にベンゾラ大陸であの色の髪を持っている人は皆無に等しい。いるとしたらティマ大陸の住人しかないのだった。

「陛下？」

ファリスが路地裏の女性を見つめているのを見て、ディナルが声をかけた。

「彼女はティマ大陸の住人だな」

唐突なファリスの言葉にディナルは眉を上げた。

「……なぜそう思いに？」

「ティマ大陸の一部に住んでいる人々はあの色の髪を持っていると、昔教育係に聞いたことがある」

「・・・それってもう十年以上前のことですよね」

「生まれた頃からの事柄を全て覚えているんだ。俺の記憶力はいいとかの次元じゃなくて、何かを忘れることが出来ないんだ」

「前から思っていたのですが、その能力って面倒くさくなりませんか？」

「なる」

「・・・」

きっぱりと言い放つファリスを呆れたように見つめてから、ディナルは女性に視線を移した。

「ところで、助けてあげないんですか？」

「それが俺の役目だとか言うんだろ」

「お分かりでしたらどうぞ役目を果たしてください」

ディナルの言葉にファリスは溜息をついてから、女性と男性五人に近寄った。

彼らはファリスが近づいて来ていることに気がつかず、女性の肩を掴むと勢い良く背中を壁に押し付けた。女性の顔があまりの痛さに歪んだ。

「どう見てもどっかの金持ちなお嬢様だろ。いいから出せよ。俺達も女相手に手をあげたいわけじゃねえんだよ」

「だからないっていつてるでしょ！ 何回言えば分かんこの分からず屋！」

「んだと!?!」

「分らず屋って言ったのよ！　ここまでされてら普通金なんて出すわよ！！　大体金持ちのお嬢様なんて金には無頓着なんだからあげるに決まってるでしょーが！」

「それは失礼だろ！」

「あんたどっちの味方よ！」

女性と男性の訳の分からない言い争いにファリスは混乱したように眉を寄せた。それから女性に視線を移す。

目を奪われた。

形のいい眉はキツく寄せられており、美しいグレーの瞳は男を精一杯睨みつけていた。美しい髪は壁に押し付けられた勢いで乱れているが、それでも彼女の美しさを際立たせている。

ファリスは、ここまで美しい女性を見た事はないと思った。

思わず惚けて彼女を見ていると、やっこのことで彼女がこちらに気づき、今度はファリスが睨みつけられた。

立场上睨みつけられたことはなく、思わず後ろを振り返ってしまった。

「あんたよあんたっ！　見てるんだったら助けてよね！」

「……………」

女性の言葉に男達が振り返り、そこに自分達の王が立っているの

を見て、瞬時に血の気が顔から引いた。女性を掴んでいた男は瞬時に彼女を離すと、地面にひれ伏せた。他の四人も同じような動作を取る。

ただ一人取らなかったのは女性だった。彼女は困惑した表情で男達とファリスを交互に見つめているだけだ。

その姿に、ファリスは思わず口角を上げた。

「ディナル」

「なんですか」

「王として認識されていないというのも、面白いな」

そういうのと同時に女性の目は見開き、ディナルは溜息をついた。

「おおおおおうううう!？」

「貴方は困った方ですね」

女性が叫ぶのとディナルが言い放つのは同時だった。

これが、ファリスとレズリーの出会いだった。

第18話 出会い（後書き）

多分しばらく過去の話になるかと思いますが、ご了承ください。○

r
z

図々しいですが、感想・評価をお待ちしております。＜

ここまで読んでくれてありがとうございます！

第19話 滞在地

「……あの、」

後ろからかけられたか細い声に、ファリスとディナルが同時に振り向く。女性が美しい顔を困惑した表情に歪ませ、言いにくそうにこちらを見ている。

一度ディナルと見合わせてから、なんだ、と声をかけると、彼女はもう一度躊躇ってから口を開いた。

「王様なのに、あんな態度を取っちゃってごめんなさい。あ、誠に申し訳ありませんでしたっ」

それから手を合わせてペコッと頭を下げる。

……ベンゾラ大陸では見た事のない動作だが、恐らくティマ大陸では、謝る時に使うのだろう。新しい発見にファリスは一瞬だけ笑いを零した。

「気にしなくていい。敬語も止めてくれ。はじめて言われた言葉が『あんた』だと、君の口から敬語が出るのも変な気がするのにな」
「……えっ」

「陛下！」

驚いて声を発する女性と、厳しい口調で言いつけたディナルの言

葉が重なった。

ディナルの言葉を気にせずにはファリスがヒラヒラと手を振った。それから歩き続ける彼の後を慌ててディナルが追う。女性は困惑したまま、ついて行った方がいいのかやめた方がいいのかを迷い、その場所に立ったままだ。

追いついたディナルが険しい顔つきでファリスに話しかけた。

「陛下っ！ 貴方に敬語で話しかけない人物など、先代国王と皇太后様以外には認められておりません！」

「今は俺が王だ。誰がどういう風に俺に話しかけるかは俺が決める。???何をやっている？」

ふと後ろに足音がなにのに気づき、クルッと振り返ると、女性が灰色の瞳を驚きで見開いた。

「・・・何、って・・・」

「そこに立っていたらまた絡まれるだけだぞ。ついてこい」
「陛下！」

「良いだろう。行く場所がないみたいだし、とにかく俺達に付いて来たらどこかを見つけられるし」

「・・・そ、それはさすがに申し訳ないわ！ 助けてもらった上に、止まる場所まで探してもらうのは・・・」

ファリスに言われたからなのか、ディナルに一睨みされながらも敬語で話しかけずに女性が言うと、ファリスは困惑した表情で彼女

を見つめた。

「ではどうやってやっていくつもりだ？ テイマ大陸から遙々やってきたということはしばらく帰る気はないのだろうか？ 泊まる所がなかったら困るじゃないか」

「えっ、どうして私がティマ大陸の人間だと知っているの？」

「髪の色を見れば分かる」

ファリスの発言に、女性は心底驚いたように目を見開いた。

「・・・ベンゾラ大陸では他の大陸のことまで勉強するの？」

「俺は王だから教え込まれているだけだ。何よりも俺には能力があるのではな

「能力？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・聞いているのか？」

それこそ普通勉強するだろうという様子でファリスが聞くと、女性は一瞬フルフルと頭を横に振った。

その動作にファリスとディナルが信じられないとでもいう風に視線を合わせる。

ベンゾラ大陸では全ての人々が何かしらの能力を有している。

それはベンゾラの中のどの国でも同じで、能力を持っていない人

物は存在しない。もし誰かが持っていないとすれば、その人物は他の大陸から来たとは思えない。

ラキオス城には、ジェシカという、ファリスよりも二歳年下の女性がおり、彼女は生まれて間もなく親にラキオス王国に連れてこられ、以来はここで生活している。そのためラキオスを故郷だと思っているが、能力がないために幼い頃いじめられることもよくあった。彼女がラキオス城に住んでいる理由は、同じくティマの住人であった彼女の母親がラキオス城で宰相サマヘルカの秘書として務めていたためである。

ラキオス城で生活している人々は、城での仕事があるか、そこで仕事をする者の血縁であるかだ。

ジェシカの母親は非常に優秀であり、非常にサマヘルカに信頼されているため、娘であるジェシカもなんの苦もなくそこで暮らしている。

ジェシカの母親のソフィーに聞いた所、ティマ大陸でもベンゾラ大陸の勉強をすると聞いていたが、それも何年も前のこともあり、今では勉強方法が変わって来たのかもしれない。

歩き続けながら女性に自分の能力と、能力全体の説明をすると、彼女は面白そうに瞳を輝かせて聞き入っていた。

説明をし終わり、少しの間沈黙に包まれた後にファリスがふと女性に視線をやる。

「……ところで、君の名を聞いていなかったのだが」

「・・・そうだったかしら・・・」

「ああ。俺はファリス・アステルカだ。ラキオス王国の国王を務めている」

改めて紹介され、女性は何回か瞬きをしてから自分の名を名乗った。

「私は、レズリー・マクライドよ」

「・・・・・・・・政務を放ったらかしてどこへ行っていたんですか」

「町へ散歩だ」

「散歩なんてしている場合ですかっ！！！」

城の中に足を踏み入れた瞬間、真っ黒なオーラを背負っているサマヘルカに出迎えられた。いつものように傍らにソフィーがいないのを疑問に思ったファリスだったが、そういえば、彼女は毎年この時期になるとジェシカと共に一度ティマ大陸に帰るのを思い出した。

船で一ヶ月以上もかかる長旅の上に決して安い金額で行けるわけでもないのだが、一般家庭に比べたら非常に裕福であるソフィー達は金の文句は一切言わずに毎年ティマ大陸に行くのだった。

ファリスは勘弁してくれ、とでもいうように手をヒラヒラと振ると、サマヘルカの隣を横切った。サマヘルカが何かをいうために口を開くが、その後ろをディナルとレズリーがついて行くのを見て、動きが止まる。

「……陛下。今すぐお待ちください」

「なんなんだ一体。少し外に出たくらいでカリカリしなくてもいいだろう。政務は殆ど終わらしているじゃないか」

「そうではございません」

「は？」

眉を寄せて問うファリスを一瞬だけ見てから、サマヘルカはレズリーに視線を移した。

ファリスもその視線を追うと、ああ、と納得の声を出す。

「彼女とは先程町で会った。行く宛てがなさそうなので城に招いただけだ」

そう。レズリーは先程まで宿を探していたが、やっと探し出せたと思うとレズリーはベンゾラで使える金はなかったのだった。

ベンゾラで使う金の単位は『ベル』と言う。六年程前までは『ジョン』という単位の金を使っており、それはティマ大陸でも使われていたが、『ベル』に変えたのはベンゾラ大陸だけであり、ティマでは変えられていないのだった。

つい最近になって『ベル』が使われるようになったらしいが、大半の人々は未だに『ジョン』をつかっているため、レズリーもベンゾラでは使えると思っていたらしいのだった。

ファリスの言葉を聞いてサマヘルカの眉が引きつる。

「・・・見ず知らずの女を城に連れ込んで・・・もしも彼女がどこかの組織の刺客だったらどうするおつもりですか!？」

「刺客? 彼女が刺客だとすれば俺が彼女を城に招くことを予想済みで俺に近づかなければいけないだろう。それになんでわざわざティマ大陸の人間を刺客にするんだ」

「罠という考えはよぎらなかつたのですか!」

「サマヘルカ。お前は少し人を疑いすぎている。そもそも俺が王になって刺客など現れたことは一度もないし、俺が父上と母上と一緒に会談をしているだけでもディナルとロードが一日中かかさず護衛をしているんだから平気だ。いざとなれば俺だって自分の身を守る」

「陛下!」

「お前は仕事に戻れ、サマヘルカ。ソフィーがいなくて仕事を片付けるのが余計遅くなる前にな。こっちも迷惑するんだ」

「へい?」

「よろしく頼んだぞ」

「へいかーーーーっ!」

サマヘルカの言葉をことごとく無視してヒラヒラと手を振ると、非常に心配そうにやり取りを見ていたレズリーに視線を移した。こちらを見ていた彼女の目とぼったり視線が合って、思わず逸らしてしまう。

なぜか、あの美しい瞳を直視することができない。

「レズリー、ついてこい。部屋を用意しよう」

呼び捨てにされて、レズリーが驚いている間にファリスとディナは既に歩き始めており、彼女は急いで二人の後を追った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紹介された部屋の説明を聞いて、レズリーは無言になって固まった。横にはそんな彼女の様子を不思議そうにみているファリスと、呆れた表情のディナルがいる。

部屋は非常に広く、レズリーが三人いても余裕で寝られるほどに広いベッドの反対側にはテーブルが一つ置いてある。椅子も二つあり、横にある棚の上にティーカップやいろいろな種類の茶葉が置いてある所を見ると、明らかにティータイムを楽しむための場所だ。

クリーム色のカーペットや真紅のカーテンにはどう考えても高級な生地しかつかわれていなく、家具や置物に視線を移しても同様のことが伺われる。

部屋の右側にはドアがあり、既に開いてあったので中を見るとそこは浴室であり、やけに広い浴槽の横にはご丁寧にタオルが四枚も置いてある。便所はわざわざ個室が用意され、浴室のすぐ隣にある。

レズリーは、今度は左側に向くともう一つ扉があったため、押し開けてみた。

それと同時に、

「そこは俺の部屋だ」

ファリスの声が聞こえて、レズリーは固まった。

レズリーがいる部屋は、正真正銘、王妃のための部屋だった。

「ラキオスにいる間は、ここに居留すればいいだろう」

ファリスはレズリーの表情の意味に気づかず、相変わらず呆れた様子のディナルと共に扉に向き直ると、一言だけ発して部屋を出て行った。

第19話 滞在地（後書き）

ええ、気づいてらっしゃると思いますが、一応Rー15指定にしました。；；

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

第20話 運命（前書き）

※この話には性的表現が含まれています。苦手な方はご注意ください。

第20話 運命

次の日の夜、城の中を案内された後のレズリーは窓の外を眺めていた。

眺めのいい場所にわざと城を置いているのか、レズリーの窓からは町並みを少しだけ高い位置から見下ろすことができる。闇が深くなってきたいるからか、家に帰る住民が道の間を行き来しており、殆どが楽しそうに笑い合いながら歩いている。

昨日、ファリスとディナルが出て行った後に、この部屋は止めた方がいいと言う為にすぐに追いかけたが、ファリスにピシヤリと却下されてしまったため、仕方なくこの部屋を使うことにした。

それに、昨日緊張しながらも使ったベッドの居心地があまりにも良かったため、情けなかったがこの部屋でいいと思ってしまった。

「・・・それにしても、あれだけ美形なのにどうして妻がいないのかしら・・・」

ポツリと独り言を呟いた。

初めて会った時は気が動転していてよく観察していなかったけれど、よく見れば、いや、よく見なくても彼はこの世の者とは思えないほどに美しい顔をしていた。見ているだけでも分かるサラサラした茶髪、一度見つめられたら二度と逃げることは出来ない、美しい緑の瞳。完璧な位置と形である鼻と口、レズリーはあそこまで美しい男性を見た事はなかった。

性格も、一日しか知り合っていないが、表面は厳しくて冷たそう

でも実際は優しい人だというのは、よく分かる。

なんだか、こんなに短い間しか知り合っていないのに既にどこか惹かれてしまっている自分がいるのも分かる。

「……女なんてよりどりみどりだと思うのに……」

「興味が湧く女に会ったことがないんだ」

突如かけられた声に、レズリーの肩はビクッと大きく跳ねた。

ドキドキする心臓を押さえながら振り向くと、うっとうしそうに首をきっちりとかこっていたシャツのボタンを外しながらファリスが入って来た。

その姿に不覚にもときめいてしまった。

「……………女の部屋に断りもなしに入って来るくらいだから妻がいないのも当然ね」

気を紛らわせる様に溜息をつきながらわざとらしく言い放つと、ファリスの形のいい眉が上がった。だが何も言わずにただレズリーをじっと見ただけで、彼女が緊張して使うことが出来なかった茶葉を取ると紅茶を淹れ始めた。

驚いてレズリーが少しだけ目を見開いた。

「紅茶なんて淹れるんだ？」

「……………という意味だ？」

「王様だから紅茶なんて淹れられる側じゃないのかと思って」

「俺にだって一人でいる時に紅茶を飲みたい時くらいはある。その度に誰かを呼んで待たなければいけないくらいなら自分で淹れたほうが遥かに早いだろう」

「……まあね」

それだけ言って再び窓の外を眺めるレズリーの後ろ姿をファリスはじっと見つめた。後ろからだけでも分かる美しい姿。思わず美しい身体の輪郭を目線で追っていると、不意に彼女がこちらを見たので慌てて視線を逸らした。

レズリーは彼の行動には気づいておらず、優雅に紅茶を飲んでいるファリスに質問をぶつけた。

「ねえ、妻がいない本当の理由はどうして？ 王様なんだから好きな女なんて誰でも選べるじゃない？」

「……」

レズリーの質問にファリスは黙り込んだ。

正直、妃が必要だと感じた事はなかった。幼い頃から誰かを好きになったことは殆どなく、王になってからも誰かに好意を抱いたことはない。それに自分には歴とした許嫁も存在する。

会ったことはないが。

しかし許嫁のことをレズリーに言う気にはなぜだかなれず、ファリスは考え込む振りをしてから紅茶のコップをテーブルに置いた。

「妃が必要だと感じたことはないし、王になってから誰かを好きになったこともない」

「・・・へえ・・・」

「・・・なんだ」

「いや？　なんだか意外だと思って」

言ってから可愛らしく微笑むと、ファリスはその笑顔に思わず釘付けになってしまった。窓からの逆光で一層美しく微笑む彼女を、知り合って一日しか経っていないというのに、あまりにも愛しく感じて、抱き締めたい衝動に襲われた。

立场上、大切な人間関係ではない限り、自分に自制をかけたことが殆どないファリスは、今回も逆らうことはせずにゆっくりと立ち上がるとレズリーに近づいた。笑顔がなくなり、変わりに困惑した表情に包まれたレズリーの頬を軽く手で掴んでからファリスは迷いもせずに口付けを落とした。

唇が合わさった瞬間に、火がついたかのようにファリスの身体は熱くなった。

一度キスをしたくらいで身体が熱くなったことなんて、今まで一度もなかったことだ。

驚きでレズリーが固まるのを感じたが、唇を合わせたまま両腕で彼女の華奢な身体を抱き締めた。

口付けを落とされた瞬間レズリーの身体は強ばったが、ファリスを突き放す気にはなれなかった。何よりも優しく、本当に優しく唇

を合わせたただけだったため、思わずもうちょっと深くキスをして欲しいと願っている自分がいた。

まるでそんな自分の思いを感じ取ったかのようにファリスはより強く唇を押し付けると、頬を包んでいた両腕をレズリーの腕をなぞってから後ろに回して抱き締めた。なぞられた腕は炎がついたように熱くなり、レズリーは思わずファリスにしがみついていた。

まるで抑えていた何かがなくなったように、レズリーがシャツを掴んだ瞬間にファリスの口付けが激しくなった。貪るようにキスをしてきてからいとも簡単に彼女の身体を持ち上げると、優しくベッドの上に降ろした。

その瞬間にレズリーの目が開いた。

「ちょ、ちよっと・・・っ」

「いいから」

一言で止められて、首をなぞる唇のせいもあってレズリーはそれ以上拒むことは出来なかった。ファリスはレズリーが着ていた赤いローブの紐を視線もやらずにほどくと、彼女の身体を少し持ち上げてからローブを引き抜いた。それから着ていたドレスの紐をほどくために腕を背中に回したが、なんとか理性を保っているレズリーの腕が彼を止めた。

不服そうに彼の眉が寄る。

「何か問題があるのか？」

「・・・ありまくりなような、気もするけど、まずは、そのドア

を、閉めてくれない？」

息切れているレズリーの指している方向を見て、ファリスは自分が入って来た後に閉められていなかったドアを見た。どうして閉めなかったのかと内心自分を罵ってから嫌々ながらもレズリーから身体を離すと、ドアの扉を閉めて鍵をかける。それからすばやくレズリーの側に戻って来ると、今度こそは彼女の背中の紐をほどきはじめた。

その間にもずっと首や腕に口付けが落とされていて、レズリーは溺れてしまう自分の理性を必死にかき集めていた。

ドレスの紐を引き抜いてから、彼女の肩に手をやってすっと袖を下に降ろす。美しい柔らかい肌に口付けを落としてからドレスをはぎ取ると、レズリーがつけていた下着の紐をゆっくりとほどき始めた。

その動作があまりにももどかしくて、レズリーはファリスのボタンをすばやく外すと彼のシャツを投げ捨て、首に腕を回してしがみついた。熱くなっている彼の肌に自分の肌が当たって、また一度レズリーは自分の体温が上がったような気がした。

レズリーがしがみついた瞬間、まるでそれが合図だったかのようにゆっくりと紐をほどこいていた動きが早くなり、シュツという音と共に紐を引き抜くとファリスは下着を投げ捨てた。

露になった彼女の豊満な胸を満足そうに見つめてから吸い付く様にキスをして跡を残す。その動作にレズリーが小さく笑い声を上げたため、また二、三回同じことを繰り返した。

いつのまにか下に履いていた下着も取られており、ファリスはレズリーの首にキスをしながら自分のズボンを脱いでいた。

薄く開いた目にその姿が見えて、レズリーは笑みを零した。

「・・・会って一日しか経ってないのに、なんて男なの、あんた・・・」

か細い声で言う彼女を、ファリスは顔を上げて一度じっと見つめてから、

「お互い様だ」

もどかしい手つきで優しく愛撫を繰り返すファリスに、レズリーはそろそろ限界に達し始めていた。

「・・・なん、で、そんな風にさ、わるのよ・・・っ」

頬に唇を這わせているファリスに言うと、彼が小さく笑うのが分かる。もう少しだけ我慢しろ、と囁くように言われ、鼻にキスを落としてから唇に移り、深く深くキスをされる。

そのまま胸へと移ると交互に両腕にも口付けを落とし、両方の太ももにも吸い付くキスをされた。

「・・・あっ・・・っ」

思わず声が漏れてレズリーは慌てて自分の口を塞いだ。声に顔を上げたファリスがニツと笑ってから今度は太ももから両腕、胸へと唇を這わせる。

すると、

「あ．．．っ．．！！」

いきなりの快感にレズリーは先程よりも大きな声を上げてしまい、腰をゆっくりと回しているファリスが塞ぐようにキスを落とした。

「．．．．はじめてじゃないのか」

「．．．何、残念そうに、言ってるのよ」

そう言いながらも少し笑っているレズリーに、ファリスも笑いかけてから深くキスを交わした。

この時、間違いなく結ばれる運命なのだと、二人は思っていた。

第21話 認め（前書き）

予定日より遅れてしまったorz
本当に申し訳ないです＞＜

第21話 認め

「…す、…リス、… ファリス。ファリス！」

ファリスがバチつと目を開いて呼びかけられた方向を見ると、レズリーが微笑を浮かべて自分を見つめていた。

「…レズリー…」

「おはよう、ファリス」

そういつて彼女がにっこりと笑うと、その笑顔に対してファリスも笑いを返し、小さく口付けを交わした。短い口付けだったけれども、昨晚と同様に触れれば触れるほど幸せで、もっと触れたくなる。それはレズリーも同じだったのだろう。手をファリスの髪に埋めると幸せそうにそれを撫で始めた。

その心地よさにファリスは再び瞳を閉じてからぐいとレズリーを自分の側へ引き寄せた。くすくすとレズリーが笑いを零して彼の額に唇を落とす。

その瞬間、

「レズリー殿、朝食を??」

コンコンとノックをする音と共にガチャ、と扉が開き、ディナルが顔を覗かせる。二人の体勢を見た瞬間に手に持っていたトレイが音を立てて地面に落ちた。

「……………」

「……………」

「……………」

抱き合っているファリスとレズリーと交互に目を合わせてから無言で部屋を出て行く。

沈黙が部屋を包む。

「…………あ、えと。さすがにこれは、まずいのかしら…?」

「…………いや、驚いただけだろう」

「あ、いや、彼はそうかもしれないけど、その、見ず知らずの私が国王と…っていうのはね?」

「…………嫌だったのか?」

悲しそうな目で見上げて来るファリスの表情に、それがわざとだと分かっていると言葉が詰まる。

それを見てファリスが笑い、半分起き上がっていたレズリーを引き寄せる。

「…俺は、お前と出会えたのは運命だと思う」

「……ふふっ。奇遇ね、私もよ」

そう言って二人は口付けを交わした。

「…ディナルさん？」

ディナルがロードと共有している部屋へ戻ると、すぐに様子が変わったと気づいたロードが声をかけた。

ディナルの表情は相変わらぬ無表情なのだが、今回ばかりはその無表情からは魂が抜けている気がした。心配したロードが声をかけても反応はない。

「……………」

ロードはディナルを見つめたまま腰にあった剣をスルリと抜くと、突き刺さる勢いで剣を彼へ突きつける。

カキンッ、

という音と共にロードの剣がディナルの剣に受け止められた。ふっ、とロードが笑いを零して剣を自分の懐へしまう。

「俺の剣を受け止めることくらいは出来るってことですか？」

正気に返ってこちらを睨みつけるディナルに言い放つ。

「当たり前だ。お前にやられていたら第一騎士なんて務まらない」

「はいはいそうですね」

「そもそものなんなんだ。いきなり剣を突きつけてきて」

「……あのー、自分が今思いつきり魂抜けてたって気づいてなかったんですか？」

「は？」

だめだこりゃ、とロードが呆れたように額に手をやる。

そこでふとディナルが向かった部屋のことを思い出した。確か向かった部屋二日前にファリスとディナルが一緒に連れて帰って来たレズリー・マクライドの部屋だ。

「レズリー殿が何か？」

「え？」

ピクツと反応してこちらを見るディナルはちっともらしくない。

そもそも彼の口から『え？』という単語を聞いた事がない気がする。驚いて目を丸めているロードを、自分も目丸めて見つめてからディナルは深く溜息をついてベッドに腰を降ろした。

「厄介なことになった…」

「なんでです？」

その後に出たディナルの言葉に、ロードがさっきのディナルと全く同じ状態になったのは言うまでもない。

ファリス・アステルカは国王になってから一回も後室に誰かを迎えた事はない。そもそも彼には許嫁がいるため、彼女以外の女を必要としないのだった。それでも先代国王がファリスに王権を渡した時はむしろしゃして適当に女を抱いていたと噂が立ったこともある。それが本当か嘘かは謎に包まれまま終わったが、城の者は断固として否定していた。

ファリスは許嫁に会ったことはない。正式には二十の時に王妃を迎えるのがしきたりなのだが、ファリスは女を必要だと感じたことがないため、会った事がないのだった。

ファリスからしたら女はか弱く、いつも誰かが側にいて守ってもらわないとだめな存在と認識していた。ちょっと色気を出せばどんな男も靡くと思っっている下らない存在だと。

そんなファリスが、二日前に出会った女を、愛情を持って抱いたのだ。

大広間は沈黙に包まれていた。

テーブルには三人座っており、ファリスの両脇には二人が立っている。

普段ファリスが座っている椅子には相も変わらずファリスが座っており、彼の後ろにはディナルとロードが気まずそうに立っている。真ん中の席にはレズリーが下を向いて座っており、美しい薄紫と銀の髪が顔の両側に落ちていたため表情が見えない。そしてテーブルを挟んでファリスの反対側にはサマヘルカが座っていた。

ものすごい形相で。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…陛下」

絞り出したように聞こえた声はものすごく低く、なんともいえない怒りが込められているのがよく分かる。

「これが、一体、どういうことなのか、説明してもらえますか？」

「…どうもこうも、聞いたままだ」

「ちよっとっ」

ファリスの返答にレズリーが焦ったように声をかける。しかしフ

アリスは彼女の言葉を見無視すると続けた。

「妃が欲しいのだろうか？ 早く俺に結婚してもらいたいのだろうか？
だったら俺はレズリーを選ぶ。彼女以外とは結婚はしない」

「！！」

「陛下！！」

レズリーが驚きで目を丸めて、サマヘルカが信じられない様に叫ぶ。ファリスの後ろに立っていたディナルとロードも驚いて目を合わせた。

あそこまで女嫌いだった彼が、三日しか知り合っていない女性に堕ちるなど、何があったというのだ。

「ファリス？」

「行くぞ」

心配そうに声をかけてくるレズリーの腕を掴んで立ち上がらせるとそのままファリスは彼女と一緒に部屋を出て行ってしまった。

廊下をただ足早に歩き続けるファリスと、相も変わらず心配そうにレズリーは彼を追っていた（引きずられていた）。

まさか、結婚まで断言されてしまうとは思ってもいなかった。

「ね、ねえ、ファリス」

「なんだ」

どことなく刺のある声に一瞬だけ言葉詰まりそうになる。

「結婚って何？ そんな、そんな会って三日も経ってないのにどうして私と結婚？っ」

抱き寄せられて頭の上から声が降って来る。

「…俺は生きて来た中で、誰かを好きになったことは数えきれぬほど少ない。それに、王という立場上、どんな女とも付き合っていないわけでもないから諦めていた」

「……」

「でもお前は違う。何があっても、どうなってもお前を手放すことはしたくない」

「ファリス…」

「お願いだから、結婚はしないなんて言わないでくれ」

「…そんな、」

ことは言わない、とは言えなかった。言葉はでかかっていたが、それを発することが出来ない。言ってしまうえば、終わってしまう。ティマ大陸、いや、ソストナ町での自分の人生が、その一言で消えてしまうような気がして、言葉にすることが出来なかった。

ファリス自身どうしてこんなにレズリーに惹かれて、どうしてこんなにすぐに結婚を決めてしまったのかは分からなかった。今まで

どんな美しい女性を見ても興味はなかったのに、関わりたくなかったのに、彼女だけは違った。

話したくて、触れたくて、触れると幸せで、もっともっと触れたくなる。自分をそんな気持ちにさせたのはレズリーだけだ。

キス一つで恋に落ちたといっても過言ではない。

彼女だけは、手放すことなんてできない。

「…陛下、これが先日の騒動の件です」

「ああ」

執務室に戻ったファリスに、すぐさまディナルは資料を叩き付けた。昨日の夜に政務を放ったらかしてレズリーの部屋に行ってしまったため、昨日溜まっていた分と今日新しく来た分が合わさって非常に多い量になっていた。

ディナルやロードも少なからずファリスの手伝いをしており、普段ならサマヘルカも手伝いに来るのだが、今回ばかりは頭に來たらしく大広間から出て以来姿を見かけていない。

レズリーは町に出かけたいということでファリスが騎士一人を付き添わせ、出かけさせていた。ファリスも付いて行く所だったが、ディナルとロードの強い言葉により、執務室に残ることになった。

不機嫌そうな顔をするファリスに、苦笑を浮かべて出て行くレズリーが愛おしくてたまらなかった。

サラサラと無言で資料に何かを書くファリスの後ろ姿をディナル

はじつと見つめていた。

たった三日間で、この人はずいぶんと変わってしまった。

長い間側にいたディナルからしても、ファリスに好きな女性が出来たのは喜ばしいことだ。誰とも結婚する気はないと意地でも言っていた彼なのだから。

しかし、レズリーとの結婚を決める前に、いや、そもそも女性と恋愛関係になる前に、片付けてもらわないといけないことがある。

「ところで陛下」

「なんだ」

顔を上げずに答えたファリスに、ディナルが続ける。隣から同じことを聞きたかったロードの安堵を含めた視線を感じた。

「許嫁の件はどうするおつもりで？」

ピタッとファリスの手が止まる。

「考えていなかったわけではないのですね」

「…当たり前だ」

「どうするおつもりですか？」

資料を置いてファリスは溜息をついた。

「どうすることも出来ないだろう。断ると言っても彼女だって俺と会ったことはない。すぐにでも俺の妻になるつもりだったら二十の誕生日に俺の所に来たはずだろう」

「それはそうですが」

「王妃になりたくないのかもしれない。そもそも王妃としての器があるかどうか分からない。その点ではレズリーの方が王妃には向いている」

「まともに女性と付き合ったことがないくせに知ったような口ですか」

ファリスが振り向いた。

「じゃあ、お前は一体俺にどうして欲しいんだ」

「・・・・・・」

黙り込んでしまったディナルに、ファリスは溜息をついてから再び机に向かった。それから資料を手の取って読み始める。

が、それと同時に、

「レズリー殿が許嫁のことを知ってしまったら、どう反応すると思っ
っているんですか？」

今度は、ファリスが黙り込んでしまった。

第22話 真実（前書き）

遅れてごめんなさいっ！

この先の更新のことはあとがきに記しておきます！

第22話 真実

レズリー・マクライドがラキオス王国に来てから、三ヶ月が経とうとしていた。当初はファリスとの関係上たくさんの人にはよそよそしい態度で接し続けられていた彼女は、今ではすっかり城の者と馴染んでいた。ファリスの言葉のおかげもあるのだが、なんだかんだいいながら接しやすい性格であるため、二週間もすれば城の者はなんとも思わずに楽しく話しかけて来てくれた。

しかし、やはりサマヘルカとはギクシャクした関係が続いていた。

結局部屋は変わることはなく、レズリーは今でも王妃の部屋に泊まっていた。いくら変えてほしいと頼み込んでもファリスは変えるつもりはなかった。それも当然といえば当然である。

部屋の中で立ったまま町を窓から眺めていると、コンコンとドアが叩かれた。どうぞ、と言うと、すっかり自分の世話係になってしまったメイドのシラが入って来た。

「レズリー様、朝食はどうなさいますか？」

「え？ ああ、えーと、なんでもいいわ。ファリスと同じで構わないわよ」

「かしこまりました」

いつもと同じ様に朝食を聞いて来る彼女に笑いかけると、シラも微笑んだまま部屋から出て行く。出て行った後にレズリーは小さく溜息をついた。

ここでの生活は慣れた。使いの者は気兼ねなく接してくれるし、騎士達も守ってくれる。何よりもファリスと一緒にいられるということは嬉しいことだった。だけれども、

「・・・結婚、はなあ・・・」

未だに結婚を申し込まれたファリスに返事はしていなかったのだ。彼のことは愛しているし、彼もあれだけ自分のことを愛してくれて、大切にしてくれている。結婚しない理由などどこにもないのだが、なぜか、すぐに返事が出来ないでいるのだ。

「結婚したくなければ、しなくていいんだぞ」

隣の部屋に繋がるドアが開かれたと思うと、そんなことを言いながらファリスが入って来た。レズリーは彼の姿に驚いて目を見開いたが、何回か瞬きをすると、再び視線を町に注いだ。

ファリスはどことなく落ち込んでいる様に見える彼女に近づくと、後ろからギュッと抱き締めた。抵抗はしなかったものの、いつものように向きを変えて抱き締め返してくれない彼女の様子に眉を寄せると、ファリスは彼女の頭の上にキスを落とした。その動作に小さく微笑を零すレズリーに、自分もまた微笑を浮かべた。

「でも、決めたほうがいいでしょ？」

「・・・それはそうだが、妃になりたくないのに無理矢理ならせるのは酷だろう？俺もお前が嫌がるのなら妃になってほしくはな

い」

「・・・・・・・・ええ」

それから向きを変えて自分を抱き締め返してくれたレズリーと口付けを交わすと、ファリスは彼女を抱き締める腕に力を込めた。

「レズリー様、朝食でございます」

「ありがとうございます」

目の前に置かれたスクランブルエッグに最高級のトースト。数々の野菜やフルーツも並べられており、最高級のミルクと最高級のジュースから飲み物を選べる。そのあまりにもおいしそうな朝食に、いつものことながらよだれが出そうになった。

向かい側に座っているファリスが食べ始めるのを見て、レズリーも無言で食べ始めた。チラリと上を向いてファリスを見つめると、彼も丁度自分を見ている所だったため、慌てて視線を逸らす。その姿にファリスが微笑を浮かべたに違いない、とレズリーは見えていなくても思った。

「レズリー」

「え、あ、何？」

まさか声をかけられるとは思ってはなく、完璧に動揺している声

を出してファリスに答えると、彼は微笑を浮かべた。朝からそんな美しい笑顔を何回も見るのはさすがに心臓が持たない。

「俺はこの後町に出かけるが、一緒に来るか？」

「・・・町って、何しに行くの？」

「ただの偵察だ。俺は殆どの場合には城に閉じこもっているから、実際町でということが起こっているのか把握しているわけではない。資料を見るとしても、言葉だけで何かを完璧に説明することはできないし、どうせなら自分の目で確かめにいったほうがいいだろう？」

「・・・それもそうね。でも今まで偵察しにいく所なんてみたことがないわよ？」

「つい先週決めたことだからな。それに、そんなに頻繁に見に行くこともないし、一ヶ月に二、三回行けば充分だろう」

「そういうもの？」

「まあな。で、来るか？」

「・・・うーん。行きたいような気もするけど、私の存在って、町の人には秘密にされてるんでしよう？」

レズリーの質問にファリスは面食らった。

確かに秘密にされているが、それをレズリーにいった覚えはない。言ってしまうば、注意深い彼女のことだから一緒に町に出かけることは絶対にしないからだ。

眉を寄せて考え込むファリスの姿を見て、レズリーは隣に立っていた騎士のルドに囁きかけた。

「言っちゃいなかったかしら？」

「・・・いえ、俺達が教えてはいけなかったようです」

「どうして？」

「言ってしまうえばレズリー様は容易に陛下と出かけることはしなくなるでしょう。それが嫌で言っていなかったんでしょうね」

「あっ……え、じゃあルド達が責められるの？」

「……慣れていますから、平気です。レズリー様が気に病むことはございません」

心配そうな顔をする彼女にルドは苦笑を浮かべて言い放つと、レズリーは納得いつていない様子だったが、何も言わずにいた。目の前にいるファリスに視線を注ぐと、彼はルドと、レズリーのもう一人の騎士であるスティラを睨みつけていた。

「言ったな？」

「言うてはいけないとは聞いておりません」

いけしゃあしゃあと言い放つルドにレズリーは思わず笑いを吹き出しそうになった。彼の隣に立つスティラも笑いをこらえているようにしか見えない。

「聞いていなくても言うてほしくない理由は、お前なら分かっていただろう」

「しかし言われておりませんので」

「……お前は、本当にディナルに似ているな」

「同じ師匠に育てられましたので」

ファリスが首を振りながら溜息をつく、ルドはうつすらと笑みを浮かべた。その笑みを見ながらもファリスは彼のことを無視すると、今度は視線がレズリーに向いた。

「では、ついてこないと言ったな？」

「え、ええ。王妃でもないのにファリスについていくのは、なんか間違ってる気がするし」

「……………仕方ない。ディナルとロードを連れて行くことにしよう」

溜息交じりに立ち上がるファリスにレズリーも立ち上がると、小走りで彼に近づいた。

「出かけたくないわけじゃないのよ？ だけどこの先何が起こるか分からないし、私とファリスが一緒にいる姿を簡単に町の人達に見せることはあまりいい案じゃないと思うのよ」

「分かっているから心配するな。ではすぐ戻る」

そう言っただけでファリスはレズリーの額に唇を当てると、ディナルとロードと共に部屋から出て行った。

「では結婚したくないのはどうしてですか？」

「分からないのよ」

部屋に戻って椅子に腰をかけると、既に部屋で待機していたシラが紅茶を注いでくれた。その後、なんとなく悩みを打ち明けると、シラは以外とすぐに相談に乗ってくれた。よく見ればどこか楽しそうな表情をしている。

他人の恋愛沙汰が大好きな子だというのは、レズリーはすぐに気づいた。

「ファリスのことは好きだし、彼だってこれでもかっているほどに私のことを愛してくれているけれど、王妃ってとっても大事な立場でしょ？ 離婚だって簡単に出来るわけでもないし、それだけ重要な立場に私が立っていてもいいのか悩むのよ」

「何を仰るんですか？ 三ヶ月しかここにいないのに、レズリー様の政務の片付けようは素晴らしいですよ？ 陛下はともかく、サマヘルカ様よりも早く資料を片付ける人はレズリー様以外見た事がありますし」

「・・・え、っていうかどうしてシラは知っているの？」

「私、元々は陛下の世話係でしたから、殆ど一日中は側におりましたよ」

「そ、そう・・・」

「レズリー様が心配しておられるのがそれだけでしたら、本当に問題はございません。レズリー様が王妃になるのに反対な方はいらっしゃいませんし」

微笑んだまま自分に言い聞かせるシラにレズリーは弱々しく微笑んでみせた。確かに、よく考えてみれば自分が悩んでいるのはその

点だけなのだ。だけれど、城の者が自分を認めてくれているのなら、
・・・

「大丈夫、かしら・・・」

「平気ですよー！ もうさっさと結婚しちゃってくださいよ！ 私達もいい加減許嫁に会ってくれない陛下にうんざりしちゃってるんですから、レズリー様が結婚してしまえば一件落着です！」

平然と放たれたシラの言葉に、レズリーの動きが、止まる。

「・・・いい、な、ずけ？」

「はい。レズリー様もご存知でしょう？ 陛下ってば二十になる頃にその許嫁と結婚するはずだったんですけど、未だに会ってもいいんですよ。ですから私達がうんざりしちゃってて。サマヘルカ様があれだけレズリー様と陛下の結婚に反対なのは、既に許嫁がいるからなんですよ。まあ相手も陛下に会おうとも思っていないらしいですし、王妃になるつもりがないのか、陛下が許嫁だと知らないのかは分かりませんが、って、レズリー様？ 大丈夫ですか？」

顔が真っ青になって行くレズリーに、シラは言葉を切って彼女の顔を覗き込んだ。

「・・・私、知らない・・・」

「・・・え？」

「・・・ファリスに、許嫁がいたなんて、知らない」

はっ、と今度はシラが顔を真っ青にし、口を両手で覆った。しかし、言ってしまったことに取り返しはつかない。レズリーはそんなシラの様子には気づかず、ただ真っ直ぐと手に持っているカップを眺めていた。

「．．．れ、レズリー、様．．．」

「．．．．．ファリスは、．．．ファリスはいつ帰ってくるの」

「え、と、．．．も、もうすぐ帰ってくる、かと。あ、レズリー様！．．．」

勢い良く立ち上がり、そのまま部屋から出て行くレズリーの姿に、ドアの側で待機していたルドとスティラが一見驚いてから慌てて追いかける。

許嫁。

ファリスに許嫁がいた。既に結婚する相手が、いたのだ。

なぜ言ってくれなかったのだ。なぜ、すぐに言ってくれなかったのだ。既に結婚する相手がいたのに、自分と結婚しようとしていた。どうして。どうして言ってくれなかったのだ。

息を乱してレズリーは城の入り口まで駆けつける。その姿に入り口を守っている兵士達が驚いて目を見開く。すぐにルドとスティラが追いついて来るが、レズリーはこちらを向かって来るファリスの姿しか目の前になかった。

その姿に、ファリスはなんとも思わずに近寄ると、キスをするために腕を伸ばした。

しかし、

パンツ、

という音が響き、レズリーはファリスの腕を振り払った。驚いてファリスが目丸めて、後ろにいるディナルとロードも顔を見合わせた。レズリーの側にいるルドとスティラも困惑した表情を浮かべていた。

「レズリー？」

「許嫁って何」

氷のように冷たい声と、その発せられた言葉に、ファリスの表情が固まった。

第22話 真実（後書き）

更新が遅れて本当にごめんなさいっ！

実は年末テストが近づいておりまして、来週の月曜日からテストづくめです。ああやだなあゴホンゴホン。

ということなので11月末まで更新はできません！本当に申し訳ありませんっ！><

こんな作者で、こんな小説でも読み続けてくれる皆様、本当にありがとうございます。この前、お気に入り登録数を見てびっくりしました。いやもうマジで驚きました。

本当にありがとうございます！ もう頭を地面にめり込ませます、本当にありがとうございます！！

ここまで読んでくれて、誠にありがとうございます^^

第23話 傷（前書き）

ああ、もう、存分に罵ってください！

思ったよりも時間がなくてマジでごめんなさいorz

後半をまだ書いていないのですが、これ以上遅れたらさすがに申し訳ないのでここだけ上げておきます。後半はまた後日書き上げます！
本当にごめんなさい！

第23話 傷

いつから彼女に依存していたか分からない。いつから彼女のこと
が大切で大切に堪らなくなったのかも覚えていない。ただ側にいて
くれると嬉しくて、安心できて、誰よりも幸せだった。

彼女だって自分を愛してくれて、幸せだと言ってくれた。そんな
大切な彼女だから傷つけたくなかった。優しくしたかった。ほかの
誰よりも、自分が幸せにしてあげたかった。

ああ、それなのに。

結局は、彼女を傷つけてしまった。

「……………レズリー」

「言い訳はやめて！」

躊躇いがちに伸ばした腕が、今度は避けられる。それから今にも
泣き出しそうな顔で叫ばれた。

レズリーの後ろに立っているシラを一瞥すると、彼女も顔を真っ
青にして泣きそうな顔をしていた。彼女の隣にいるルドとステイラ
は何が起こっているのか分からず、困惑した表情を浮かべている。
騒ぎを聞いて駆けつけて来たサマヘルカは、険悪な雰囲気にな
れず、とファリスを驚いて交互に見ているだけだ。

「……………どうして、言ってくれなかったの…………？」

「・・・・・・・・・・」

レズリーの震える声だけが、静まり返った玄関に響いた。ファリスは無言で彼女を見つめ、周りの人々が緊張して自分達を見ているのも感じ取れた。

誰も驚いた様子ではないということは、全員がファリスに許嫁がいたのを知っていながらも、誰一人として自分に教えようと思った人間がいなかったということだ。城の者と仲良くなり、城の中のこととは殆ど知っていると思っていたのは、恥ずかしながらも自分の思い上がりだったのだ。

何も答えてくれないファリスに、本当に彼には許嫁がいたのだと実感するのと同時に、あまりにも裏切られた気分になって、強く拳を握りしめた。

「・・・どうして、言ってくれなかったのよ!!」

「レズリー」

「どうして言ってくれなかったのかって聞いてんのよ!!」

顔を上げて、目尻に涙を浮かべながらも憎しみを込めて叫んで来るレズリーに、ファリスは言葉を失った。

なんて言えば、彼女は納得してくれるのだろう。

なんて言えば、信じてくれるだろう。

なんて言えば、いいのだろう。

「・・・・・・・・ つか、言おうとは思っていたんだ」

「いつか!? いつかっていつなのよ! 私と結婚したいとか、私と結婚するつもりだとか言っておいて、結局許嫁がいたんでしょ!? 既に結婚する相手が決まっていたんでしょ!? そういう存在がいたのに私に隠して、他の人にもバラすなど散々言っておいて隠したまま私と結婚しようと思ったんでしょ!?」

「・・・・・・・・ そんなことはない」

「じゃあいつ言うつもりだったの!?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「結婚式前日? 結婚した翌日? いつにしたって、私が傷つくとは思わなかったわけ!?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんとか、言ってよ・・・・・・・・!!」

目に浮かんで来る涙を必死に拭き取りながら、悔しそうにレズリ
ーが叫んだ。

ああ、何がいけなかったのだろう。

どこから狂っていたのだろう。

どこから、歯車が噛み合なくなってしまったのだろう。

どうして。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

「・・・・・・・・すまない」

パンツッ

「れ、レズリー様っ！」

「・・・・・・・・。バツカじゃないのっ!!」

平手打ちをかました右手をぐっと握りしめてからファリスを睨みつけると、レズリーは自分の部屋へと走り去って行った。

残された者達は、叩かれたファリスと、レズリーが走り去って行った方向を交互に見つめ、困惑したように顔を見合わせる。ファリスの心配をするべきか、レズリーの心配をするべきなのか。

「・・・・・・・・ルド、ステイラ」

ファリスに名を呼ばれて、ルドとステイラが彼を見た。ファリスは頬が痛む様子を見せず、頬を押さえることもせず、真っ直ぐとルドとステイラを見た。

「レズリーの様子を見に行ってくれ。俺は、もう彼女に顔合わせは出来ない」

「・・・・・・・・かしこまりました」

頭を下げて、スツと下がると、二人はレズリーの部屋へ向かう。彼女の騎士と任命されていたからにはすぐさま彼女の後を追うべきだったが、国王陛下が叩かれたという事実を目の前にして、うまく動くことが出来なかったのだった。

ルドは心配そうな顔をするスティラを横目で見てから、小さく溜息をついた。

「・・・言った方がいいと、俺も思っていたんだがな」

「・・・俺もです」

「まあ、好きな女が出来てその女に、実は許嫁がいた、なんて言いづらいのはわかるが・・・」

「・・・おまけに結婚をしようと考えていた女ですし」

「そうだな。はじめてあそこまで好きになった女なんだから、余計言いづらかったんだろう」

「・・・傷つけない様に行っていた行為が、結局、隠し通すことで余計レズリー様を傷つけることになるとは、きつと考えていたんでしようけどね・・・」

二人は、ファリスの騎士であるディナルとロードと共に殆ど生まれた頃からこの城に通っている。それは四人の父親が先代国王と皇太后の騎士であり、その父親の父親もまた、王族の騎士をやっていたからだ。騎士という立場は代々受け継がれて行くものであり、それはよそ者を受け入れて裏切られる確率を減らすためのルールである。また、幼い頃から信頼関係を築くことも目的としている。

そのため、ルドとスティラはファリスの騎士達ほど彼の側にいなくても、ファリスの性格は分かったつもりでいた。

コンコン、と控えめに王妃部屋の扉を叩く。返事はないが、どう考えてもこの部屋にいるとしか考えられない。ルドとスティラが顔を見合わせる。

「レズリー様。ルドとスティラです。陛下はいらっしゃいません」
「入れていただけますでしょうか」

沈黙。

「……………入っていいわ」

「……………失礼いたします」

「失礼いたします」

扉を控えめに開いて、顔だけで中を覗いてから二人は部屋に足を踏み入れる。緊急事態ではない限り、騎士は王妃部屋や王室に足を踏み入れることは禁じられているが、今はどう考えても緊急事態であろう。

レズリーは椅子に座って窓から町を眺めていた。いつ見ても美しい長い髪は、結い上げられてはいるものの、緩く結ばれているためかパラパラと肩に落ち始めている。それでも直す様子は見せず、こちらに振り返ることもせずに、レズリーはただじっと窓の外を眺めている。

いつのまにか部屋に来ていたシラが胸の前でギュッと手を握っており、ひたすら泣きそうな顔をして下を向いていた。レズリーが走り去って行った時に追いかけたのだろう。陛下が叩かれたというの

にレズリーを追いかけたのは、本当にレズリーのことを好いているのだな、とルドは思った。

「・・・レズリー様、これからどうなさるおつもりで？」

「あ、ルドさんっ」

「今聞かないでどうするつもりなのだ、シラ」

「・・・っ、だ、だって、今は心の整理をするべきでは？」

「ティマに帰るわ」

バツとシラが顔をあげ、ルドとスティラが驚いて目を見開く。後ろの三人の反応を背中を感じながらも、レズリーは振り向かない。自分の言葉が三人に対してどれほどの衝撃かも分かっていながらも、振り向かない。

ああ、もう。

どうでもよくなってしまった。

「れ、レズリー様！ 気分を害したのがわた、わたくしのせいなのでしたら、も、申し訳ありません！ 本当に、本当に申し訳ありませんっ！」

必死にシラが頭を下げるが、レズリーは振り向かなかった。

「シラのせいじゃないわ。誰のせいでもないの。誰かを責めようと
考えてるわけじゃないの。私が愚かだったのよ。・・・知り合っ
たった二日間で結婚をする仲になろうと考えていたことが、間違っ
ていたの。ファリスを愛していたのは事実だけれど、愛情だけでは
やっていけないでしょう？」

「そ、そんな！ 陛下もちゃんとレズリー様を愛しております！」

レズリーが悲しそうに瞳を伏せた。

「そうだとしても、既に結婚をする存在がいたのに私と結婚をしよ
うと考えていた彼に、今までと同じ様に愛情を注げるほど出来る女
じゃないのよ。私は」

「・・・そんな・・・」

「間違っていたのよ、何もかもが。もう出会い方からして間違っ
ていたわ。こうなるのは当たり前のこと。明日にはここを出るからね。
ファリスには言わないで。というか、今の情報はこの部屋から出な
い様に心がけてちょうだい。分かった？」

「・・・はい」

やはり泣きそうなシラの声に微笑んで、レズリーは振り向いて自
分の騎士二人を見た。

その顔が、あまりにも穏やかで、

「貴方達もね。ファリスには絶対に言ってはだめよ。これは、私か
らの最初で最後の、本気の命令だから」

その様子が、あまりにも凜々しくて、

「……貴方様の、仰せの通りに」
「……かしこまりました」

反論する言葉など、見つからなかった。

翌朝、隣の部屋のドアを開けて足を踏み入れると、もう何ヶ月も
当たり前前に置いてあった私物が、何一つ置いてなかった。ファリス
はただ寂しそうに瞳を伏せてから椅子に腰を降ろした。
それから、同じ様に寂しそうな顔でドアの所に立っているシラに、
小さく笑いかけたのだった。

きっともう、二度と巡り会うことはない、愛しい人の姿を思い浮かべて。

第23話 傷（後書き）

つ、ついに過去編が終わりましたー。

いやあ、ここまで来ましたね。全八話？ですかね。で、構成されているファリスとレズリーの過去、いかがでしたでしょうか。

作者が文才に恵まれていないために、所々残念なことになっておりますが、そこは温かい目で見守ってくれればと……っ、願ってます……っ！

さて、ファリスとレズリーの過去を知ってクレアがどう動くのか楽しみです！

あれ！私が作者なのに！

ここまで読んでくれてありがとうございます。

（また次回遅れたら本当にごめんなさい。いつそのこともう存分に罵ってください。遅いふざけんなバカヤローと）

第24話 いつもの幸せ（前書き）

23話の続きは書いておきましたので、読んでいらっしやらない方はそちらからどうぞ^^

第24話　いつもの幸せ

「レズリー様はその後しばらくベンゾラ大陸にいたらしいんですが、ラキオスに戻ってくることは二度とありませんでした」

神妙な顔で話し終わったルドをただただ見つめる。

「・・・そう、なの・・・」

なんというか、ものすごい話を聞いてしまったような気がして、怒るべきなのか、驚くべきなのかよく分からなくなっていた。ファリスに女がいたということはすごく悔しい。自分の中にこんな気持ちがあったのかと驚くほどに悔しい。

「・・・だからといって、誰かを責められるような状況でもなかった。」

「・・・で？　ファリスが私にレズリーさんの説明をさせたのは、同じ過ちを繰り返したくないからなのね？」

「・・・恐らくそうかと」

「・・・あんなにも周りの人に完璧だと拝まれている人物なのに、恋愛に対して意外と不器用だったとは。」

「・・・私、話してくる」

「はっ、えっ？　ちょ、クレア様？　いいんですか？　怒らないんですか？」

怒る？

・・・。。。。。

「怒ってるに決まってるだろーがー！！」

「え、えええ！？」

「何なのよみんなして！　そんな大事なことを私から隠してさ！　別にレズリーさんの時ほどに酷い隠し事じゃないとしてもさ！　んもー！　ファリスだっていつまでうじうじしてんのよみつともない！」

「く、クレア様っ」

「だから話して来る！」

「クレアさ？」

ボタンッ、と扉を閉めてズンズンと執務室へ近づいて行く。

ああ、もう、腹が立つ！　なんか、こう、レズリーさんへの嫉妬も混ざってるような気がするし、そうじゃない気もするし、みんなから隠し事をされていたこともなんだか嫌だったし、というか何よりもファリスがこんなことで暗くなってることに腹が立つ！

いつでも自信満々で上から目線のエロ大王はどこにいったのよ！

執務室の方に近づいて来ると、部屋の前にディナルとロードがいた。……サマヘルカから資料を貰った時はいなかった気がするんだけど。

「二人とも、いつからそこにいたの？」

「！ あ、クレア様っ」

「俺達は資料を大臣達に渡しに行っていました。クレア様こそ、執務室にどのような御用で」

あ、そっか。二人は私がレズリーさんの資料を貰ったことを知らないのか。でも、ルドもステイラもジェシカもレズリーさんのこと知ってるんだから、ファリスの騎士達であるディナルとロードが知らないわけがないよね。一応話しておこうかな。

……ん？ 待てよ。

ジェシカって、どうしてレズリーさんのことを知ってるんだろう……。お母さんと一緒に、ティマ大陸に帰ってたんじゃないかったっけ？ ってかジェシカがティマ大陸出身だったなんて知らなかったよ。

「あのさ。二人はレズリーさんのこと知ってるわよね？」

「！！」

「！？」

な、なんかすごく驚かれた。まさか私の口から出るとは思ってなかったのね。

もっとも話題にしにくい、話題、だしね。それもそうかな……

「く、クレア様。どなたから、それを」

「え、どなたって、そのファリスがレズリーさんから手紙を受け取って、レズリーって誰？　って聞いたらサマヘルカが資料くれて、ルドが説明してくれたのよ」

「・・・そうですか」

「ええ。で、今ちよっとキレてるからファリスと話をしてきてもいい？」

「え、あ、えっ？　だ、大丈夫だと思いますが」

「分かった。じゃあちよっとごめんね」

二人を端に寄せて遠慮なくバンツと執務室の扉を開いた。部屋の左側にある机にファリスが向かっており、扉が開いたにも関わらず振り返らなかったということは私だとは思っていないんだろう。

多分、レズリーさんと同じ様な反応をしてると思うんだろうなあ。

・・・ムカつく。

「・・・ファリス」

カタンツ、と立ち上がって驚いてファリスが振り向いた。私は一回彼を睨みつけてから執務室の扉を閉めると、近くにあった椅子に腰を降ろした。

．．．．． 我ながらなんて偉そうなんだろう。

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．． 怒ってるか？」

「．．． まあね」

私が答えると、それはそうだとファリスが自嘲気味に笑いを零す。

「言っておくけど、ファリスが思ってる様な理由じゃないからね」

「．．．．． は？」

ファリスって、変な所で自分を責めるよね。普段なら明らかに自分が悪い場面でも知ったこっちゃねーよ、みたいな顔してるのに。

「レズリーさんの存在を秘密にしてたことに対して怒ってるわけじゃないわ」

「それ意外で怒る理由があるのか？」

「．．． あ、の、ねえ．．．！ 私はあんたに怒ってんの！！」

ビシッ、と指を突きつけると、ファリスは酷く無防備な顔をしてから少し頭が来た様に私を見る。

「なんで俺に怒るんだ」

「ウジウジウジウジウジ……っ、お前は女かったの!!」

「何を？」

「レズリーさんの存在を覚えてくれなかったのは悔しいし！ 私よりも前に王妃候補がいたっていうのも寂しいし、悔しいし！ でも、レズリーさんに大事に隠し事をしてフラれて、私にも隠し事を早く明かさないとフラれるかもしれないとかって考えてたんでしょどうせ！」

「フラれるとはどういうことだ！」

「そういうことじゃないの！？ あんたは女をなんだと思ってるわけ！？ 確かに大事な隠し事をされて、それが思いがけない形で明かされたとなると怒るけど！ 私から言わせてもらおうとレズリーさんは根性なしね！ 許嫁がいるのに、ファリスがその許嫁と結婚してなければ彼女と許嫁、どちらが大事なのかくらい分かるでしょーが！」

「……………」

「私はレズリーさんとは違うわ！ 隠されていたことの重要さが違うとしても、たとえファリスが前に結婚をしようと決めていた女の人がいたとしても、私は隠されていたことでファリスを責めたりしないわ！ 女全員が全員隠し事くらいで男を捨てるような生き物だっと思わないでよね！」

「……………クレア？」

「私に嫌われるかもしれないとか、また同じことを繰り返したかもしれないとか、後ろ向きな考えは捨てなさいよ。女々しくこんな所に閉じこもってんじゃないわよ。分かった？」

「……………」

黙り込んだファリスに、ああ、いいこと言った、と思った。

レズリーさん以外としっかり恋愛がしたことがないファリスに取って、二人の破局の元となってしまった原因はきつとトラウマなのだろう。もしもまた本気で好きな人が出来てしまったら、同じ様な理由でまた置いて行かれるかもしれないと思ったんだろう。

だから今の今までレズリーさんのことを教えてくれなかったんだろうけども。

隠し通して、傷つけないようにすることが逆にレズリーさんを傷つけることになってしまったのは、……。まあ、トラウマになるような気持ちも分かるけど。

私が話し終わっても何一つ言わないファリスに私は眉を寄せた。

どうせならいつものように罵倒すればいいのに。

……。まあ、そんな気分じゃないだろうけど。

「ちょっと、ファリス？ あんた、今私が言ったこと聞いて？」

俯いている彼に近寄ると、グイッと腕を引っ張られてすっぽりと彼の腕の中に収まってしまった。その安心感に思わず身を預けそうになったけど、そうじゃなくて！

「ちょ、ちょっと、ファリス！ き、聞いて？」

「ちゃんと聞いていた」

上から振って来るファリス特有の低い甘い声に鳥肌が立った。
聞いてたのならいいんだけど。

「……なんか、私も何言っただのかよく分かんないんだけど、
とにかく女をなめんなってことよ。分かってる？」

「分かっている」

「……そう……。で、あの、どうして私は抱き締められてる
の、かしら？」

「………知らなかったのだ」

「……は？ え、何を？」

「人を愛する時に、傷つけないといい、と。そういうわけではな
いとは、知らなかったのだ。相手を傷つけずに、優しさを注ぎ込め
ばそれが愛だと思っていたんだ。だからレズリーには優しくした。

いつでも苦労や不満があれば取り除いて上げていた。それが、正し
いと思い込んでいたのだ。たとえば彼女に不満があっても、傷つけた
くなかったから、極力言わないようにした。悪態をついても、それ
が本気ということでもなかったし。レズリーだって俺に優しくくて、
いつでもサポートをしてくれて、傷つけられたと思えばいつだって
謝って来た。だから俺も同じことをしてあげようと思ったんだ。そ
れがレズリーの愛の形で、俺に取ってはじめて感じたことだったか
ら、それが正しいと、それが正しい愛し方だと思っていたんだ」
「………」

「………一切女性と関係するようなことはせず、恋人を作
ったこともないファリスにとって、レズリーさんの愛ははじめて注
がれるものだった。だから、幼い子供のようにそれを真似て、それ
が正しいと思って。」

「………あんなにも、完璧な人間だと言われる彼が。」

思わずくすつ、と笑うと、ファリスが不満そうに私を見下ろすのが分かる。

「……バカだね」

「……うるさい」

「私と最初に結婚した時は役立たずだとか散々罵倒して、私のこと好きになっても酷い仕打ちしてたくせに」

「……突き放しても突き放しても、お前が消えないからだ」

「どーしてそんなくらいで消えないといけないのよ」

「……」

「？」

なんで黙るのかと思って顔を上げる。

それから優しい、本当に優しい笑顔で私を見てるので、思わず固まってしまった。

ちよっ……！ 何その笑顔！ 死ぬわ！ 美しすぎて死ぬわマジで！

「ふぁ、ファリス？」

「……ありがとう、クレア」

「え？」

「いつでも、側にいてくれて。俺が何を言っても、なにをやっても、そうやって見捨てずにいてくれて」

再び動きが固まる。

「ちょ、何らしくないこと言ってんの！？ 気持ち悪いんだけど！
ってか放して、ちょっと、身の危険を感じるから放して！」

「放さない」

「なんでよ！」

「お前はずっと俺のことを愛してくれるんだろう？ 何を言っても
側にいてくれるんだろう？」

「そこまで言っていないし！ ってかいつ愛してるなんて言ったのよ
！」

「そういうことじゃないのか？」

「曲解しすぎ！」

何なのこの人！ 微笑がいきなりいつもの怪しい笑みに変わった
からいつものファリスに戻ったことは間違いないんだけど、ちょ、
マジで身の危険を感じるぞ。

この人レズリーさんにはこんなじゃなかったよね？ ルドの話
によると。

「政務は終わったことだし、部屋に戻るか？」

「も、戻らない！ 戻らないから！ て、てて手紙はどうしたのよ
手紙は！ レズリーさんから来てたんでしょ！？」

「気になるのか？」

「な、なるけど、そうじゃなくて！ 政務絶対終わってないでしょ
！？」

「一日分は終わった」

「嘘つけ！ あんた今日午後から二時間くらいしかここにいないでしょ！ いつもは一日中かかる政務がなんで二時間で終わるのよ！」

「調子がよかったんだ」

「ふざけんな、ちょ！ 担ぐなー！！」

ヒョイ、と意図も簡単に持ち上げられてそのまま執務室から出ようとするファリスを蹴ろうとするけど、容易く両足を掴まれて動きが取れなくなる。

す、すっかりいつものファリスに戻ってる・・・っ！

第24話 いつもの幸せ（後書き）

いやあ、仲直りしてくれました。
なんなんでしょうかこのバカップルは。

ファリスはつまり、クレアのおバカさんな所に救われたわけなんですよ。おバカさんっていうか、考えていることをズバズバと考えるしで言う所というか。

次回遅れてしまったら申し訳ありません！
遅れないよう頑張りますっ！

あと、図々しいようですが感想・評価よろしくお願いいたしますへへ
もうと創作意欲がぐぐーんと湧きますので！

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第25話 手紙

目を開けて瞬時に視界に飛び込んで来た顔にびっくりしてから昨日のことを思い出して顔に一気に血が昇った。

なんてことをしてしまったの私！　あまりにも昨日のファリスの機嫌が良かったから流されそうになった自分を止めて一人で部屋に戻って来たのに・・・っ！

夜になってからすぐにファリスが入って来てすっごく嫌な予感がしたから寝た振りをしたのに狸寝入りがファリスに通用するわけがなかった！　バカだ私！　おまけにその後結局ファリスを止めようとか思わなかった私はもっとバカだ！

しばらく百面相を繰り返してからはっと昨日の出来事を思い出してファリスの顔をじっと見つめた。

なんだか、聞きたいような聞きたくない様な気もするけど・・・。ラキオスのことを思うなら私情は挟んじやいけないからなあ・・・。

「ファリス」

名前を呼ぶと瞬時に目が開いた。

・・・やっぱり起きてたか。

「ああ、おはよう、クレア」

「お、おはよう。いや、じゃなくてちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

ゆっくりと私の腕をなぞりながらファリスが微笑を浮かべた。それから私の鼻にキスを落とす。

いや、別にそれはそれでいいんだけど意味わからん。

「あ、あのね、レズリーさんからの手紙は、なんて書いてあったの？」

再び愛撫をはじめようとするファリスの手を慌てて引っ掴んで聞くと、瞬時に彼の動きが止まる。予想していたとはいえ、瞬時に固くなった表情に、聞いてしまったことをちょっぴり後悔した。ちょっぴりね。

深く溜息をついてからファリスは目を瞑って私を抱き寄せた。
おいおい。

「あのー・・・ファリス？」

「今日、城の者を集めて説明をするつもりだ。お前もちゃんと来い」

「言われなくても行くけど・・・」

「・・・そうか」

そりゃあね。だって大事なことだし。レズリーさんのことを聞いてしまったからにはいい話ではないんだろうなと予想はしてるけど。

だって結婚までする予定だった相手に許嫁がいたとなれば、その人の元から去ったとしても到底許すことなんてできないだろうし。ファリスにたいしても暴言とか吐いてそんな手紙だよなあ。

考え込んでいるといきなりファリスが私を放して起き上がったので、驚いて我に返った。

「ファリス？ 起きるの？」

「ああ。昨日の政務が溜まっているし、クレアには悪いが起きることにする」

「悪くないし。……だから政務が終わるはずないって昨日言っただじゃん」

「すぐに終わる」

「そりゃそうだけど……」

ファリスの能力は、一瞬でも見た、聞いた、感じたものの全てを忘れることはない能力だ。だから資料とか一度読んでしまえば何回も読み返すことはせずに済むし、一度頼まれたものや頼んだものを忘れることもない。それ故に膨大な量があるにも関わらず、政務は他の国のどんな首相よりもすぐに終わる。

けど他の国と違って一度区切りがついても一時間も休んでしまいうとすぐにものすごい量が溜まってしまいうから朝早く起きて政務をやるのがファリスの日課なのだ。

私の額にキスをしてから部屋を後にするファリスの後ろ姿をじっと見つめてから私も起きようかと思ったんだけど、ふと窓の外の町が目止まって私も動きを止めた。

「……気のせいだろうか。光輝く薄紫に銀色の髪をした何か、下に見える町を通ったように見えた。」

ガチャ、とドアを開いて寝間着のまま部屋から出ようとして、ドアの両脇から驚いた気配が漂って来て交互に右と左を見た。
ルドとステイラが立っていた。

「……………あれ……………」

いや、二人が私のドアの所で待機してるのはいつものことなんだけど、なんだか非常に気まずそうに私のことを見てるから困惑してしまった。何かあったのかな。またレズリーさん関連？ いやいやでもそんなことが起こったら普通に考えて私に教えてくれるだろうし。

ステイラはともかくルドはね。

「……………二人とも？ 大丈夫？」

「は、ええ、ほい。大丈夫ですが、クレア様こそなぜそのようなことをお聞きに？」

「……………いや。ステイラ今、噛んだよね？」

全然気づいてねーし。ルドも無言に頷いただけだし。え、何？

ほんとに何？　ここにいていつものことだね？　何か変なことでも起こ、

．．．．．

待てよ。

いつもの、こと？　いつもここにいてこと、だよ、ね。つ、
まりは、昨晚もここに立っていた。

昨晚も。

グワツとものすごい勢いで顔に血が昇って、そんな私を見てルド
とステイラもほんのりと頬を染めた。

しまった．．．っ！　本当にしまった！　二人がここにいるこ
とをすっかり忘れていた。基本的にはお互い交代をしながら夜遅く
までここにいるんだけど、殆どの場合は私が二人に睡眠を取ってほ
しいから部屋に追い返すのが定番だ。

だけど昨夜はファリスが部屋に来てしまったから追い返すことは
しなかったんだ。

ほんとにバカだ私．．．！！

「ごめん！　二人ともごめん！　ほんと今夜からは私に言われなく

ても部屋に戻っていいから、いやあああああ！ もうごめん！！
ほんとごめん！ ほんつとにごめん！」

「え、いや、クレア様落ち着いて！」

「それに勝手に部屋に戻るなど、騎士として言語道断です。何があるうとクレア様に言われるまでここを離れるわけにはいきません」

とかいう割には明らかにほっとした表情してるよな、二人とも。
それにしても恥ずかしい！ 恥ずかしいよ！

「と、とにかく私は朝食を食べにいくから二人ともついてきて」
「はっ」「

あり得ない。なんてことしてしまったの私。本当にっ！

その日の午後。

朝言っていた通りにファリスは城の者を大広間に集めた。王妃よ
うの椅子に座りながら皆を見回したけれど、明らかに全員ではない。

「ファリス、どうして全員いないの？」

「……今回集めた者達は六年前からここににいる者だけだ。レズリーを知らない奴にレズリーの説明をしても意味がないだろう」
「……なるほど」

言われてみればそうだ。ということは今城に在住している人達が全員レズリーさんとファリスのことを知っているわけじゃないってことか。それで知っている人にだけ教えるっていうのも頷けるけど、だったらレズリーさんのことを知らない人達は一生知らずにここで暮らして行くってことなの？　ずいぶんと重要な出来事だったと思うんだけどな。

「皆、よく集まってくれた」

ファリスの呼びかけにザワザワと話をしていた者達の声が小さくなって行く。

完全に静かになってから再びファリスが口を開いた。

「ここへ集めたのは他でもない、ティマ大陸首相のシヨン・リグリ―殿の秘書であるレズリー・マクライド殿から手紙を受け取ったからだ」

はっ、と全員の顔に同じ困惑と驚きの表情が表れた。それからザワザワとお互いに話をしてから、何人かが私の方をチラチラと見るのが分かる。

……そうか。レズリーさんの話を私が知ってるのを知ってる

のは極数人。だからレズリーさんの話が上がってなぜ私がここにいるのか理解できない人がいたとしても不思議ではない。

その様子を見て、隣にいるファリスの裾をくいっ、と引っ張った。

「ね、一言だけ言っていいい？」

「・・・ああ、構わない」

何が言いたいのか分かってるのかな。ファリスだし分かってるだろうな。

こほん、と小さく咳払いをしてから息を吸った。

「皆さん」

瞬時に全員の話し声が止み、私が何を言うのかを興味津々に待っているのが分かった。だけど中には心配そうな表情をしている人もいて、その様子に苦笑を浮かべてしまった。

ここの人達は、本当に私やファリスのことを大切にしてくれる。

「レズリーさんのことは既にファリスやサマヘルカ、ルド、ステイラ、ディナルとロードまでもから聞いているわ。そんなに心配をしなくても彼女が誰なのかは分かっているから、気を遣わないで」

全員の目が大きく見開くのがここから見えた。だけでも私がその

まましつかりと前を向いていると、私の言ってることが本当なのだと分かったのか全員が頷いたり微笑を浮かべたりと優しい表情になった。

そこで、

「レズリー様の話を聞いて、王妃様はどう思ったのです？」

そんなに大きな声ではなかった。下手すればみんなの話し声の中で埋もれてしまうような声だったかもしれない。だけど、しっかりと全員の耳にその質問は届いたのだ。

声が出た方に視線を移すと、ぐっと両手を身体の前で握りしめて、短い茶髪を揺らしながらこちらを見上げる女性がいた。

「……シラ……」

シラのことは既にルド達から聞いていた。六年前、毎日すかさずレズリーさんの世話をしており、城の者でも特に彼女のことを好いていた侍女だ。昔はファリスの世話をしていたこともあって、世話係の腕前は天下一品だというのを知っている。ファリスもとても彼女のことを信用していて、生活面ではなくてはならない存在だと言っていた。シラ自身もファリスとは近く、唯一彼のことを『陛下』ではなく『ファリス様』と呼んでいる。

私自身はあまり彼女と交流はないけれど、レズリーさんが去ってから再びファリスの世話を任されたことは知っており、ファリスの部屋に行くと度々そこでベッドのシーツやらテーブルのコップやらを片付けている姿を目にした事がある。

会話を交わすことも殆どなく、強いていえば『あら、おはようございませう、王妃様。今日はよい天気ですね』『おはよう、シラ。うん、すごくいい天気よね。あ、ファリスはいる?』『今はいらしておりません』『政務室にいるのかな?』『おそらくそうだと思います』『そうかー。ありがとう』『いいえ』『仕事も程々にね』『ありがとうございます』程度の話だ。

とても礼儀正しくて私も好印象を持っているんだけど、昔からどこか距離を置かれていた気がする。

その原因が、レズリーさんを慕っていたからなのだと、この瞬間に思った。

「……別に。怒りはしたけど、それ以外は特に……」

「……そうですか。怒りましたか。それはなぜ怒ったのです? ファリス様が本当のことを話してくださらなかったからですか? それとも王妃様よりも前にレズリー様という女性がファリス様と関係を持っていたからですか?」

「!」

「シラ!」

私が驚いて目を見開くのと同時に隣からファリスが鋭くシラの名を呼んだ。そこに込めである意味を知りながらもシラは私やファリスから視線を逸らさなかった。

「答えてください、王妃様」

「シラ、いい加減にしろ」

「王妃様」

「シラ！」

「いいの、ファリス」

私の言葉に、いいものか、とファリスがこちらを睨みつけたの
分かったけど、私はただ真っ直ぐとシラを見つめた。それからその
瞳に込められているものを見て、目を伏せてしまった。

・・・ ああ、シラは、悔しいんだ。

あれだけ王妃という器にぴったりだったレズリーさんが、ファリ
スに許嫁がいたからここに残ることが出来なくなって、ファリスに
許嫁がいたからレズリーさんが城から去って、ファリスに許嫁がい
たから、私がいたから、レズリーさんが王妃になれなかったのが、
悔しいんだ。

私のことがレズリーさんにバレて、それでレズリーさんは怒って
出て行ったのに、同じく嘘をつかれていた私がなぜ同じことをしな
いのか分からなくて、悔しいんだ。

「・・・ どちらに対しても怒っただけよ。レズリーさんを失って
しまったように私を失うことを怖がっていたこのバカな王と、本
当のことをずっと隠し通すつもりでいた大バカな王に、怒りをぶつ
けただけ」

「・・・ おい」

「どうしてレズリーさんは出て行ったのに私が出て行かないのかが
わからないんでしょう？」

問いかけると、一度躊躇ってからシラは頷いた。

「単に違っただけなのよ。ファリスの隠していたことが、彼女には大きすぎて、私には、そこまで大きくなかっただけ」

「っ……………」

シラが口を開いて再び何かを言おうとしたが、それ以上何を言えいいのか分からなかったのか、それともただ単に諦めたのかは分からなかった。それでも強く握りしめていた両手から少し力が抜かれていたのを見て、小さく微笑んだ。

「……………もうよいか、シラ」

「……………はい。申し訳ありませんでした」

顔を伏せて言うシラにファリスは頷いてから、全員に顔を向けた。

「レズリー殿から受け取った手紙は、現在俺とシヨン殿が考え中である、ラキオスとティマの合併話のことだ」

殆どがこの話が初めてであるため、ザワザワと全員の話し声が大きくなった。

「レズリー殿と俺の間で何が起こったのかを知っている皆のことだ

から予想はついていると思うが、レズリー殿はこの話をかたくなに拒んでいる。シヨン殿から承諾は得そうだとはいえ、レズリー殿が拒めば彼も考える所があったようであり、彼に代行して彼女が手紙をよこしたのだが、」

そこで一度言葉を止めて溜息をついてから、ファリスは言葉を続けた。

「何がなんでも俺達を止め、必要ならば戦争も始めると」

第25話 手紙（後書き）

久しぶりでございます。

二ヶ月以上経ってますよねいやもうほんとにごめんなさい。言い訳をするつもりではないのですが、なんだか忙しい日々が続いておりまして、なんだか知らないけどインターネットの接続も悪くなってしまっって何かなにやらorz

今回はなんだか長めになりましたが、出来れば毎回このくらいの長さで話を書きたいと思ってます。だけど私の言葉はあまり信じないでくださゴフツ。

長い間書いていなかったのにお気に入り登録してくださった皆様、感想・評価をくださった皆様本当にありがとうございます!!

遅れてしまっって本当に申し訳ありませんでした!

ここまで読んでくれて誠にありがとうございます!><

第26話 それぞれの思い（前書き）

なんだか長めになってしまった。

第26話 それぞれの思い

ティマ大陸は小さな大陸だ。ベンゾラ大陸に比べたら四分の一にも満たないほどの小ささである。ベンゾラと違って国に別れているわけでもなく、ティマ大陸自体が一つの国で、その中で村や町があると考えたほうが良い。

そんなティマ大陸がベンゾラ大陸、いや、この場合はラキオス王国に宣戦布告をしたのだ。ラキオス王国だけならばさすがにティマ大陸の方が面積は大きく、人口もラキオスを上回ってはいるものの、ティマ大陸とベンゾラ大陸では決定的に違う点があるのだ。

それは、能力を持っているか、持っていないか。

ティマ大陸では誰一人として能力を持っているものは存在しない。ベンゾラからティマに移り、そこで子供を生んだら話は違うが、能力者がいないティマ大陸では、全員がなんらかの能力を持っているベンゾラ大陸には歯が立たないのである。軍も当然のように優れた能力を持っている人材しか集めず、たとえ五歳でも八十を越えていても誰でもなんらかの能力を所持している。

ティマ大陸とベンゾラ大陸の決定的な強さの差はそこにあった。

当然、シヨンはその違いに気づかないほど愚かな首相ではない。ファリスもシヨンとは何度か会っているが、頭もよく理解力も高く、全てが面倒くさいと思っているように見えるが、洞察力はファリスの知っている人の中でもとくに優れている人物だった。

そんな彼がベンゾラ大陸に宣戦布告をするとは考えられない。考えられる可能性としては、やはり秘書であるレズリーの行いなのだろう。

「ファリス？　どうするの？」

会議を終わらせ、レズリーさんからの宣戦布告の手紙を読み終えたあとに私達は執務室に戻って来ていた。政務は殆ど片付いており、まだいくつか残っているといても緊急ではないためまた後日やるとファリスが言ったのだ。

私の問いかけにファリスは深く溜息をつくと、机の上に置いてあったレズリーの手紙を手にとった。

「どうするも何も、ティマ大陸では俺達には歯が立たない。たとえラキオスだけに戦争をしかけてきたとしても、能力を持っている俺達と違ってあちらの軍の人材は誰も能力を持っていない。能力に寄っては一人では十人を倒せるほどの能力者だってこちら側の軍にはいるんだ。そんなのが十人も集まれば、ティマ大陸の軍など子供をあしらうのも同然になってしまう」

「……戦争はするの？」

「……できれば避けたい。長い間ラキオスはどことも戦争をしていないからな。殆どが話し合いで解決されているが、今回はそうはいかないだろう。一応戦闘準備はして、軍にも連絡は回してある。しかし、残念ながらティマに勝ち目はない」

「……………」

ファリスに言われるまでもなく、ティマがラキオスに勝てるわけがないのは分かっていた。いや、ファリスではなくとも、私でなくとも、ラキオスに住んでいる誰もがその発言には頷くはず。だって能力を持つてゐる時点で既に勝ち負けが決まってるもの。私の能力は炎だ。確かに微弱ではあるけれど、能力を持つていない人にとつたら充分自己防衛にはなる。

はあ、と再びファリスが深く溜息をついて眉間にしわをよせたまま両目を閉じた。

「……疲れきつてゐるんだろうな……。」

「ファリス？ 部屋に戻つてなよ。政務も終わったんだし、早めに休んだ方がいいんじゃない？」

「……ああ、そうだな。そうする」

あつさりと引き受けたのを見て余程疲れてゐるんだろうな、と思つて、ドアの所で待機していたディナルとロードに呼びかけた。それからフラフラと部屋から出て行くファリスに苦笑を零しながら見送つて、ファリスが置いて行つた手紙を見つめた。

読んじやってもいいかな……。別にファリスも私に見せたくないなんていう素振りとはしてなかったし、多分見せたくないと思つていたとしても、それは以前の恋人であつた人からの手紙だからだと思つてゐるし。

いいかな、と思つてカサツと手紙を開いた。

『ラキオス王国　ファリス・アステルカ陛下、

ティマ大陸、シヨン・リグリー首相の代理として、秘書であるレズリー・マクライドが書かせていただいております。

経緯を省いてお話いたしますが、ベンゾラ大陸とティマ大陸の合併の話は聞いております。当初は侵入をするともシヨン様から聞いておりますが、その計画を知ったシヨン様が合併をすと言い出した話も知っております。

残念ですが、その合併話は断らせていただきます。それでも尚ティマ大陸と合併をすと言うのであれば、戦をはじめることには躊躇いません。

首相シヨン・リグリー代理、首相秘書レズリー・マクライド』

達筆の文字で書かれている短い手紙を二回ほど読み通してから、私は軽く溜息をついてから手紙を折って机に置いた。

なんというか、とてもじゃないけど国の王に対する口調ではない気がする。気がするっていうか絶対に違うと思う。一般人がこんな無礼な手紙送ったらサマヘルカが激怒するのが目に見えてるけど、レズリーさんからっていうのもあってさすがに黙認したかな。

一言で言ってしまうと、冷淡な手紙だと思った。五年以上経っているというのにファリスへの怒りにもじみ出ているのが分かる。一体いつまで恨み続けるんだろう……。

「……まさか私がこのことを知ってるとは思ってないだろうなあ、」

独り言を呟いてから座っていた椅子から腰を上げて、私は執務室から出た。側で待機していたルドとスティラが歩いて行く私の後を無言についてくるのを見ると、何も聞く気はないってことかな。

礼儀正しい子達で助かるよまったく。

そのまま部屋に戻ると、窓の外を眺めながらジェシカが椅子に座っていた。

だけど何かを見てるわけでも何かを探してるわけでもない。なんだか変だと思って私は近寄った。

「ジェシカ？」

ビクツとジェシカの肩が大きく跳ねて、目を大きく見開いたまま振り向いた。

「クレア様！ すみません！ ぼーっとしてしまっ！」

「・・・いや、平気だけど。大丈夫？ 具合が悪いんだったら講義はまた明日でも構わないけど・・・」

「いいえ、大丈夫です。すみません」

小さく頭を下げてから私を座らせると、既に隣にあった資料やら何やらをジェシカが拾い上げて机に乗せた。それから上に乗っていた紙を取って私に渡して、ジェシカも筆を持った。

だけど動かない。・・・やっぱり絶対おかしいって。

「・・・ジェシカ。何があったのか説明してくれないと、講義サボるわよ？」

「クレア様っ」

困ったようにジェシカが叫んだが、私は筆を置いて腕を組むと、じつとジェシカを見つめた。眉を寄せたままジェシカもしばらく困ったように見つめ返していたけれど、やがて諦めたのか自分も筆を机に置いた。

それから私の前にあった紙を取ると、私が勉強するために置いてあった紙の山の上に戻した。

「いや、何も講義をやめるとは言っていないんだけど・・・」

「クレア様に、言わなければいけないことがあるのです」

「言わないといけないこと？」

「はい」

ジェシカに限って私に言わないといけないことなんて見当がつかない。だってたとえジェシカが何かのスクャンダルを起こしていたとしても、こうやって城に留まってるってことは対したことじゃないってことだし。ファリスもジェシカに対して警戒を見せてなかったんだからジェシカのどこかが危険だとも思わないし・・・。

思考を巡らせながらもじつとして座っていると、覚悟を決めたのかジェシカが顔をあげた。

「それが、レズリー様のことなんですが・・・」

「レズリーさん？」

意外な名前に素っ頓狂な声を上げてしまった。いや、だってレズ

リーさんのことを話すと思った人の中にジェシカは入れてなかったから、つい……。

「レズリーさんのことがどうかしたの？」

「……クレア様は、レズリー様の苗字をご存知ですか？」

「苗字……？ そうね……えーと……まら、まくら、まり……」

「……マクライドです」

「あ、そう、それっ！……がどうかした？」

「レズリー様についての資料はクレア様もご覧になっていると思うのですが、レズリー様の苗字は、両親が他界するまでは違ったんです」

「えっ、うそ、そうだっけ」

「はい。苗字は、元はルーストラです」

「ルーストラ……」

そういえば確かにどこかで読んだなと思って苗字を自分でも繰り返し返して言ってみたけど、その瞬間に気づいた。目の前ではジェシカがどこか悲しげな瞳のまま私を見てる。

「……待って。ちょっと待って。ジェシカの苗字って……」

「

「私の名はジェシカ・ルーストラです。レズリー様は、私の異母姉でございます」

夕飯を食べ終わって自分の部屋に行こうと思ったんだけど、ファリスが夕飯に来ていなかったから心配で様子を見に行くことに決めた。そーっとファリスの部屋の扉を開けると、普段なら跳ね起きた所を何の音も立てずに眠り続けている。

．．．．．珍しいこともあるもんだ。そういえば、ファリスの寝てる所ってあんまり見ないんだよね。同じ部屋で泊まる時だってなんだか知らないけどいつも私より先の起きてるし。

勝手に部屋に入って椅子に腰を降ろして、私は数時間前にジェシカに言われたことを思い返した。

ジェシカは『異母』と言っていた。ってことはジェシカとレズリーさんは異母姉妹ってことになるんだけど、ジェシカもレズリーさんも互いにレズリーさんがラキオスから去るまでは知らなかったらしい。レズリーさんがいた期間は丁度ジェシカが母親のソフィーと一緒にティマに帰っていたから会うこともなかったし。帰って来た後にファリスからレズリーさんの存在を聞かされたソフィーがジェシカに言ったらしい。

ソフィーは三年前に既に亡くなってしまっているから、ジェシカとレズリーさんは互いに唯一の肉親ということになる。

．．．．．なんだかとても重い話題を聞いてしまった気がする．．．

・。

「……クレア……」

そこで名を呼ばれてはっと顔をあげると、ファリスが起き上がって私を見ていた。

「ファリス……」

「……何やってるんだ？」

「え、えと、夕飯にファリスがいなかったから心配で見に來ただけなんだけど……」

ふあ、とあくびを漏らすファリスを見ながら言うと、ファリスは少し驚いてから侍女瞬殺の笑顔を私に向けた。それからちよいちよいと私に向かって手招きをする。
……えっ……。

「おいで」

「……いや、なんでだし」

「いいからおいで」

「……」

有無を言わずに手招きを繰り返すファリスに渋々近寄って行くと、ベッドに近づいた所でファリスが私を引き寄せた。そのまま

ぽつと私を腕の中に閉じ込めると、首筋に口付けを落とす。

「ちょ、ちょっとっ」

「いいだろ。飢えてるんだ」

「サラッとそういうこと言わないで！」

首の周りを唇が這っていき、頬を登って来た所で快感で思わず身震いした。その動作に耳元に唇を寄せていたファリスが笑うのを感じた。ま、負ける者か！

「ちょ、ファリス！聞きたいことがあるんだけど！」

「・・・聞きたい事？」

唇の動きが止まったことに安堵の息を漏らしてから、私は身体を捻らせてファリスに向いた。

「ジェシカのことなんだけどね」

「・・・ジェシカ？」

予想外の名だったのかファリスが怪訝そうに眉を寄せた。

「ジェシカとレズリーさんが姉妹だって、知ってたの？」

「・・・」

黙りこくった。

つまり知っている、ということだね。ファリスって妙な所ですごく分かりやすいよね。

じっと見つめていると、目を瞑ってから一度だけファリスが頷いた。

「レズリーが去るまでは知らなかった。ジェシカも彼女の母親のソフィーも丁度ティマに帰っていた所だったから、ラキオスに帰って来て、レズリーがきたと知らせたあとに二人が姉妹だと発覚したんだ。ろくでもない父親だったからソフィーは知らせたくなかったらしい。レズリーのことどこか毛嫌いしていたな」

「・・・そうなんだ・・・」

「ジェシカが教えてくれたのか？」

「ええ。なんだか妙に思い詰めた様子だったから、聞いたらいろいろと話してくれたの」

「ジェシカらしい。お前に隠し事はしたくないんだろうな」

「いい子だよねー」

私がそういうとファリスはふっと少しだけ笑った。

その日の夜。窓から満月なのが見えて、外に出ようと思って寝間着の上にショールを羽織った。一度ファリスに引き止められたけど、満月なんて滅多に見られるものじゃないから行くといい張ったら、ルドとスティラを叩き起こして私と同行させた。

……まったく、鬼なんだから。

「ごめん、ルド、スティラ。私は寝かせてあげたかったのに」

後ろについてくる騎士二人に振り返ると、二人は苦笑を浮かべた。

「クレア様の気に病むことはありません。それに、私達も警備が薄い城の外で王妃様を一人で置いて行くわけにはいきませんし」

「どうしてみんなそろいも揃って心配性なのよ、まったく」

「陛下はクレア様のことを大切にしているだけです。俺達もクレア様の騎士として同行するわけには行きませんので」

……いくら警備が薄いつていったって兵士は絶対にいるし。城の壁の上を登るのだって能力がない限りは無理。たとえ登ったとしても絶対に兵士に見つけられるから別に護衛はなくてもいいと思うんだけどな。

外の庭に続く扉を開けると、警備をしている兵士が驚いて私達を見た。滅多に人がこないからかな。

「王妃様！」

「驚かせてごめんなさい。満月が綺麗だから外に出てみたくて」

「いいえ。私どもに謝る必要はございません。ただ、王妃様の前にも一人出て来たので」

「え？」

この庭には兵士達がいるといっても誰かが入ってくることは滅多にない。

それにこんな時間に庭に来るなんて、そんな物好きな人が私意外にいたとは驚いた。とはいえ、月が一番よく見えるのはこの庭からだから気持ちが分かるといえば分かるけど。

すぐ後ろにルドとスティラを感じながら上を見上げると、まん丸な月があつてわあ、と思わず感嘆が零れた。

そこで、

「・・・王妃様」

あまりにもびっくりして大きく肩が揺れて、ルドとスティラが瞬時に護衛体勢に入った。だけど振り向いてその人物を確認すると、剣にかけていた手を降ろした。

立っていたのは、シラだった。

「シラ・・・」

「こんばんは、王妃様」

小さく笑って私に礼をするので、つられて私も頭を下げてしまった。三人がおかしそうに私を見たけど。

「こんな時間で、何やってるの？ シラ」

「王妃様こそ。私は今日は満月なのを見てここに出て来た次第でございます。ここからだと言月が一番よく見えますので」

「あら、私もそうよ」

「そうですか」

一瞬だけ気まずい空気が流れたと思うと、シラが近寄って来た。昼間のことでまだ何か言う事があるのかなと思っていると、シラが深く頭を下げた。

「・・・シラ？」

「・・・昼間は、申し訳ありませんでした」

「・・・ああ・・・」

レズリーさんの、ことか。

「そんな、謝らなくてもいいのに。私も別に怒ってるわけじゃないし」

「いいえ、そういうことではないのです。侍女の分際であれほど無礼な口を王妃様に聞いてしまったのを深くお詫びしたいのです」

「・・・シラ・・・」

顔を上げて欲しくて、一歩だけシラに近寄った瞬間だった。

バシユッ、

風を切る音と共に、私の身体を矢が射抜いた。

第26話 それぞれの思い（後書き）

遅れてしまつてすみませんでした。もう一つの小説に取りかかつていたらしいのにか……。

最近時間の流れが速い気がするんですが私だけですか？

私は外国住みなので、東北地震についてはすぐには知らなかったのですが、あまりの被害にテレビの前で釘付けになってしまいました。私の家族や友人は今の所無事だと確認が取れていますが、油断はできません。

皆様もご家族や友人が無事であるよう祈っております。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第27話 解毒剤（前書き）

予定より遅れてしまった;;;
すみませんorz

第27話 解毒剤

「く、レア、様」

絞り出す様な声が聞こえたけど、それがルドから来た声なのか、スティラから来た声なのか、それともシラからきた声だったのか、それすらも分からなかった。目を見開いたまま身体を射抜いた矢に視線を落とした。身体が前へ倒れているけど足に力が入らない。手に力が入らない。口すら開かない。開けても、苦しむ声しか出てこない。

「おう、ひ、さまっ．．．！！！」

何が、どうなったの？

「クレア様！！！！！」

目の前が、闇になった。

クレアが倒れ込む寸前に、駆け寄って来ていたルドとスティラが彼女を受け止めた。その後ろでシラが口元を覆いながら、目を大きく見開いて立ち尽くしている。

「クレア様！ クレア様！！」

彼女を受け止めてから、無事にクレアがスティラの腕の中にいるのを見て、ルドは剣を勢い良く抜くと、右に顔を向けた。スティラとシラが何一つ言う前にスツと目を細めてから、ルドは漆黒の闇にしか見えない方向に剣を放り投げた。

「ギャッ！」

男の声が上がり、スティラが驚いて目を見開いている間にルドがその方向へと歩み寄って行く。歩調はゆっくりだが、確かな怒気が込められているその雰囲気、スティラが焦った。

このままでは、あの男を殺すかもしれない。

「シラ！！」

「は、はいっ！」

口元を覆ってただ立ち尽くしていたシラにスティラが振り向いた。

「すぐに城内に入って陛下をお呼びしろ！！ 早く！！」

「は、はいっ！！！！」

シラが駆け出していく、騒ぎを聞いた兵士達が自分達の方向へ走りよって来ていた。身体を射抜かれている血だらけのクレアと、彼女を抱えている為に血だらけになっているスティラを見て、二人の目が大きく見開いた。

「王妃様！！」

「なんてこと・・・っ！！」

それから二人がはっとルドの方向に顔を向けてから、スラツと剣を懷から抜いた。庇う様にクレアとスティラの前に立って、誰かを掴みながら闇から出て来るルドを待った。

シラが場内に駆け込んだ時、城の中は闇に覆われていた。かすかな光を放っているたいまつを掴むと、スカートを掴みながら一目散に走って行く。夜が活動時間である侍女何人かが驚いて自分を見ていたが、そんなことは気に留まらない。

遠く離れていたわけではないのに、ファリスの部屋につくまでの時間を永遠に感じた。乱暴にたいまつを壁にかけてから、シラは断りもなしに勢い良く扉を開け放った。

ベッドからその開く扉を見ていたファリスの目が見開いた。

「・・・シラ・・・っ!? 何をして?」

「ファリ、ス様、ファリス様、早く、早く来てください!! おう

ひ、王妃様が、王妃様が討た、討たれました!! 早く!!」

「っっ!?!」

ガバツとファリスが勢い良く起き上がり、血の気が引いたシラの顔を見てベッドから飛び降りた。立てかけてあった剣を掴んでシラを押し倒す勢いでそのまま部屋から走り出て行きながら、後ろを振り返った。

「シラ、全員を、全員を叩き起こせ!!!」

「は、はい!!!」

駆け寄って行くシラを確認してからファリスは走りだした。

クレアが、討たれた。

何に。

一体何に討たれたというのだ。

この安全の城の中で、庭で。

ルドとスティラがついていながらも、

どうやって。

ドアを突き破る勢いでファリスが外庭に転がりだした。

全員がファリスの登場に顔を上げて驚いて彼を見つめた。後ろからも徐々に人が集まりだしているのが聞こえる。何人もの人の焦った足音が聞こえて来る。

しかし、ファリスには何も聞こえていない。

「陛下．．．！」

兵士の一人が自分を呼ぶ声も耳に入らない。

一人の男を引っ掴んだままクレア達の側に立っているルドさえも目に入らない。

ファリスの目に移っていたのは、血だらけのスティラに抱かれています、自分の最愛の妻の姿だけだ。

「クレア．．．！！」

自分でさえもどうやって声を出せたのか分からない。今の状況で、この、何も感じていない状況で、一体どうやって声を発することができたのか。どうやって彼女に歩み寄ったのか。

ただひたすら顔から色が抜けて行くクレアを見て、どうやって動いたのか。

気づいたらファリスはクレアの前に跪いていた。まるで壊れるも

のに触っているようにそっと彼女の頬に手を滑らせたが、温かさもなにも伝わってこない。苦しそうに小刻みな呼吸を繰り返すクレアを見て、全てが絶望的になってくる。

「すぐに治療にかかれ！ 傷を癒す者がいるならすぐに来い！！早く！！」

「はっ！」

「はい！」

後ろで人の声が交わったが、それでも尚、ファリスはクレアから目を離せずにした。そこから瞼を震わせながらクレアを見下ろしているスティラとルドを見上げた。肩から血を流している男を掴んでいるルドに向かって目を細め、腕の中にいるクレアと同じくらいに顔が蒼白になっているスティラを見た。

「どうやって、討たれたのだ」

普段よりも数段低い声に思わずスティラの肩が揺れた。

「わ、分かりません。突然どこからもなく矢が？」

ガッとファリスがスティラの胸倉を掴んだ。

「陛下！」

「お前達がついていながらもどうやって討たれたのだと聞いている！！」

「っっ！！」

ルドが呼ぶ声とファリスの怒声が響き渡り、思わず全員が驚きで動きを止めた。

キツと眉を寄せてスティラの胸倉を掴んだまま、ファリスは今にも剣を抜きそうな勢いで彼を睨みつけた。抱いているクレアから腕を離さずにその危険を感じ取ったスティラが大きく目を見開き、ルドが掴んでいた男を兵士二人に投げつけると慌てて二人に駆け寄った。

「陛下！」

「守れと言ったはずだ！ 何があっても側を離れるなど、言っただ！」

「離れたつもりは？」

「お前達はクレアの第一騎士と第二騎士だ！ なぜ、」

キツとファリスが兵士に捕らえられている男をまるで殺す勢いであるかのように睨みつけた。

「あんな男の矢を許した！！」

グツとなおも胸倉を掴んでいるファリスの拳に力が込められた所

で、落ち着いた声が響き渡った。

「陛下」

ルドの声ではなかった。もちろんスティラの声でもない。

自分の周りにいる人達の中で、この状況と自分を見てそんな落ち着いた声色を出せる者は一人しかない。ファリスは瞳に怒気を込めたまま後ろを振り返ると、予想通りの人物が立っていた。

ディナルはロードを一步後ろに控えさせたままファリス達の側へ歩み寄って来た。そのままファリスを止めようとしているルド、胸倉を掴まれているスティラ、意識をなくしてスティラに抱かれているクレアを見て、目を細めた。

それから再び口を開く。

「ルドとスティラを叱っている暇などないでしょう。今は王妃様の治療と、その男の尋問が先決です。二人に説教をするのはこの後でも充分出来ます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言になったファリスを真っ直ぐと見据えたままディナルが言い放った。ファリスは黙り込んでしばらくスティラの胸倉を掴んだままだったが、やがてスツと彼のシャツを離す。解放されたスティラがシャツは直さずにクレアを見下ろすと、ファリスが立ち上がった。

「……すまない、スティラ、ルド。取り乱れてしまった」

「……いいえ。その気持ちは充分理解しておりますので」

「……クレアを中へ運んでくれ。すぐに治療に当たる。その男に関しては、」

ルドに剣をつきつけられたショックからか、失神している中年の男に向かって目を細めた。

「ゆっくりと問いつめることにしよう」

ラキオス城には当然のように医師が存在する。しかし、医師といっても傷を癒す能力を持っている者の集まりであり、特に一般人のように包帯をグルグル巻いたり、止血をしたり、などという作業をやることはない。しかし、医学の知識を持っていることは最低条件であるため、殆どの人物は普通の医師の治療も施すことが出来る。

いまだ意識が戻りそうもないクレアをベッドに横たわせ、傍らでは二人の男性と一人の女性が控えていた。三人とも、このラキオス城に住んでいる医師の中で最も優秀である人達だ。

二人の男性はクレアの傷口の周りにある血を拭き取っており、女性の方は傷口の上に手をかざしていた。かざされた部分が青白く光っており、よく見ると傷口も徐々に小さくなっていつている。

しかし、同室にいたクレアの騎士二人が安堵を込めた表情をした瞬間、女性の手が揺らいだ。それと共に青白い光も揺らぐ。

鋭くそれを見たファリスは目を細めると、女性に顔を向ける。先程まで集中していた表情に僅かに困惑した色が現れていた。

「……何が問題だ」

「えっ」

低く問いかけたファリスに女性が心底驚いて顔を上げると、血を拭き取っていた男性二人もファリスに視線を向けた。それから傷口に視線を移し、目を見開いた。

「……これは……」

「………なんということだ」

男二人の声に女性が小さく頷いた。

「はい……」

「何が問題だと聞いている」

ドスの聞いたファリスの声に左側にいた男が彼の方に振り向いた。

「・・・それが、王妃様の傷口を塞ぎ、消毒するだけでは容易に王妃様の容態は元に戻ることはありません」

「・・・何だと？」

ファリスがスツと目を細めると、男は冷や汗を書きながら言葉を紡いだ。

「王妃様を貫いた矢の先には、毒が仕込まれておりました」
「！」

部屋の中にいた全員が驚きの声をあげた。申し訳なさそうにクレアの治療が続けている男と女が頭を下げた。
男の発言にファリスは口を閉ざし、そのままじっとクレアを見つめた。

「・・・どれくらい、強力なんだ」

「・・・非常に強力です。もしも我々が治療をはじめたのが一歩遅かったら、間に合わなかったかもしれません」

「・・・」

「我々はあくまでも傷を癒す能力を持っているだけです。傷を癒す早さは陛下も知っての通りこのラキオス一の早さですが、毒を抜くことはできません。我々の力では、毒の進行を食い止めることはできませんが、完全になくす事は不可能なのです」

「そんな・・・っ！　なんとか毒を抜く方法はないんですか!？」

シラの悲痛の叫びに、男の眉が寄った。

「……毒を抜く方法は解毒剤を作るしかありません」

「……それは時間がかかるのか」

「かかります。我々が一睡もせずに作り続けたとしても三日はかかります」

「三日だと……」

「この毒でなければもっと早く作り上げることができるのですが……。何せここまで強力ですから解毒剤にもそれ相応の時間がかかるのです」

「……」

クレアを見下ろしたままファリスは眉を寄せた。

クレアを射抜いた矢は彼女の右の肺を貫いていた。応急処置でなんとか息が出来る様になっていたが、それで毒が回ってしまったらまるで意味がない。三日かけて解毒剤をつくったとしても、それはこの三人だからできることであって、この三人が解毒剤を作っている間にクレアの身体に毒が周りののを食い止めるほどの実力者は存在しない。

なんとか、なんとか解毒剤を作るスピードを上げることができれば？

「!」

そこでバツとファリスが顔を上げた。心配そうに彼のことを無言

で見つめていた周りの人達がつられて目を見開いた。

「陛下？」

突然のファリスの顔つきの違いに、戸惑い気味にディナルが声をかけたが、ファリスは何も聞こえていないかのようにただ一点を凝視していた。しかし、先程までの絶望的な表情と違って、なんだか顔に生気が戻っているような気がしてならなかったのだ。

ファリスは腰掛けていた椅子からゆっくりと立ち上がると、ディナルに向いた。

「ディナル」

「はっ」

「レイラとクリスに連絡はつくか」

「は？」

予想外の人物の名にディナルだけではなくこの部屋にいた全員が度肝を抜かれた表情を浮かべた。なぜなら、双子の兄妹であるレイラとクリスは、クレアとファリスの専属の仕立て屋であるからだ。仕立て屋ということは当然のように二人の服をつくるのが仕事ということになる。レイラはクレアの、クリスはファリスの服をつくる。

そんな二人を、こんな緊急事態になぜ呼ぶかはファリス以外には理解不能だった。

「・・・陛下？ 正気ですか？」

「正気だ。クレアに死んでほしくなければさっさと呼べ」

「・・・・・・了解、しました」

小さく頭を下げてからディナルは隣にるロードに頷いた。ロードが頷き返し、部屋から飛び出した所で、ディナルは笑ってはいないものの満足そうな顔をする国王を見た。

「・・・それで、レイラとクリスを呼んでどうなさるおつもりですか？」

その部屋にいる全員の疑問を代弁してディナルが聞くと、ファリスは再び椅子に腰を降ろしてから話だした。

「お前達はレイラとクリスの能力を知っているか？」

「・・・それは、まあ、知ってますが」

ディナルの曖昧な返事にしかし、後ろではっとした声が聞こえた。ファリスを含めた全員がその声に視線を移すと、シラが口元を覆いながらファリスを見ていた。

しかし、その瞳がどこか輝いていることから、ファリスが二人を呼んだ意味を理解したのかもしれない。

「まさか、二人の能力で・・・！？」

「・・・そうだ。一人ならともかく、同じ能力を持っているあの二人が解毒剤作りに励んだとしたら、」

何の事かさっぱり理解していない様子の医師達を一目見てから、

「きっと三日よりも早く出来上がるはずだ」

第27話 解毒剤（後書き）

クリスの名前は初登場か？ と私自身も思ってたんですが、読み返すと地味に名前が出てました。よかった。なんだかすんなりと名前が浮かんだなあ、と思ったんですね。

二人の能力に関しては最初の方じゃないときっと分かるのは無理、だと、思います。すっごく分かりづらいんですけど一応能力を発揮してます……。

今後の更新ペースについて活動報告に記事を残しましたので、詳しくはそちらへどうぞ。

ここまで読んでくれてありがとうございました^^

第28話 謎（前書き）

いつもより短いです。

第28話 謎

レイラとクリスはクレアとファリスの専属仕立て屋ではあるものの、前々から二人の血筋の人間がこのラキオス城に住んでいたわけではなく、幼少時からここにいたわけでもないためにラキオス城に住まいはない。しかし、クレアとファリスに取ったら重要な人間ではあるため、ラキオス城のすぐ近くに住んでいる。

三分ほど過ぎた頃に部屋の中にロードが入って来て、後ろにはレイラとクリスが不安げについてきていた。何の説明もされずに来たのか、今が深夜であるにも関わらず普段着を身にまとっていた二人は、クレアの姿を見て大きく目を見開いた。

レイラが口元を覆ってふらふらとクレアに近づくと、クリスも近づいて慰めるように彼女の両肩に手を乗せながら眉を寄せていた。

「へ、陛下、これは、一体……っ」

目に涙を浮かべながら訴えて来るレイラを見て、ファリスは申し訳なさそうな表情をした。

「……俺達も、正確には何が起こったのかは知らないんだ。先程まで外庭にいたクレアが、今牢にぶち込んでいる男の矢を受けてな」「そんなっ！ 矢を受けたただけでしたら、傷口を塞げば」

「矢の先には毒が仕込まれていたんだ」

レイラとクリスがはっと息を呑んだ。それから小刻みに苦しそうに息を繰り返すクレアをチラリと見た。

「・・・どれくらい、強力な毒なんですか？」

クリスが静かに問いかけると、ファリスが瞳を伏せた。

「一番の腕を持つてる三人の医師に頼んでも、解毒剤をつくらないと毒は抜けられないらしい。今はなんとか毒の進行を食い止めているが、解毒剤を作るためにはクレアから離れなければいけない。しかしクレアから離れたら死んでしまう」

「そんな・・・っ！」

「そこで、お前達に頼み事がある」

強い口調でファリスが切り出すと、自分達は何のために呼ばれたのか理解していなかった二人の瞳が見開いた。

自分達はただの仕立て屋である。そんな自分達に、クレアの命を救うほどの能力は有していないはずだ。しかし、ファリスに瞳には確かな希望の光が灯っていた。

レイラとクリスが顔を見合わせてから、レイラがおずおずと口を開いた。

「・・・頼み事、とは・・・？」

「僕達の腕で、王妃様を救えるとは思えませんが・・・」

不安げに言う二人にファリスが笑みを浮かべた。

「ここにいる三人によると、一睡もせずに作り続けたとしても、解毒剤が作り上がるまでには三日かかる。つまり、睡眠を取ったら五日間は必ずかかるということだ」

「・・・はい・・・」

「それならば、解毒剤をつくる時間を早めれば、一日で出来上がるかもしれない」

「そんな・・・っ！　どうやって早めるというんですか!？」

「陛下、まさか・・・」

レイラが驚いて声を上げたが、クリスは何かを理解したかのような表情を浮かべた。そんな彼にファリスが頷いた。

「そうだ。お前達的能力を貸してほしい」

ファリスの言葉に溢れんばかりにレイラが瞳を見開いて、クリスは難しい表情を浮かべたまま顔を伏せた。

確かに、二人の能力ならば解毒剤を早く作り上げることができるかもしれないが・・・

「しかし、陛下。私もクリスも物体を形作ることはできますが、解毒剤に能力を発揮したことなど……」

レイラ・アクティルとクリス・アクティルの能力は触れた物の時間を早く進ませることだ。

といってもそれだけではなく、複雑な能力のために大雑把な名前が付けれられているだけだ。実際は、作りたい物体の材料をそろえ、それに触れたら勝手に形作ってくれる非常に希有な能力だ。また、出来上がった物体に手を触れれば、その時間を進ませることが出来る。

例えば、二人の職業である服作り。正直にいうと、二人は他の服作り職人のように特に服を作るのに優れているわけではない。しかし、自分達の能力の都合上、服作りが一番適切だと思っていたのだ。

材料を揃えて触れてさえいれば服が勝手に形作ってくれる。それも素晴らしい短時間で、だ。おまけにその服の時間を進ませることだけで、皮ならば少し伸び、羊毛ならば少し縮んでしまう。

二年前のクレアのウェディングドレスも、当日につくることを決めて当日にクレアに着せられていたのも、全ては二人の能力だったのだ。

レイラの言葉にファリスは励ますような表情を浮かべた。

「大丈夫だ。お前達の能力は他の物にも充分きくが、服にしか試していないだけだ。材料が揃っていれば、きっと出来る」

「……………」

「……………陛下……………」

それでも不安な表情を浮かべたレイラに、クリスがチラリと視線を向けた。それからクレア、彼女についている医師達、ファリス、四人の騎士、シラ、全ての人達を見回した。全員が最後の望みを自分達に託している。

ここで、がっかりさせるわけにはいかない。

「レイラ、やろう」

「クリス・・・」

決意を込めた様子でいう自分の兄にレイラは眉を寄せたが、クリスの決意が揺らぐことはない。

「レイラだって王妃様に死んでほしくないだろ？ 僕達的能力で王妃様が救えるかもしれないんだったら、やってみるべきだ」

「だけど、失敗したら？」

「初めて能力を発揮した時から僕達は何かを作るのに失敗したことはない。服だけにしか能力を発揮したことがないから、不安になるのも分かるけど、材料さえ揃っていれば、僕達の力で解毒剤を作り上げることができるはずだ」

「・・・」

「王妃様のためなんだよ、レイラ」

自分達がクレアを救うための最後の望みなのだ。この国一の医師三人の力を合わせても三日かかる解毒剤が、自分達の力ならば一日で作り上げることができるかもしれない。

クレアの命を救うためには、やるしかないのだ。

全員の視線が双子の兄妹に注いでいた。レイラもクリスも共にその視線を感じていた。

「レイラ」

もう一度だけクリスがレイラの名を呼ぶと、彼女は息を大きく吸ってから小さく頷いた。

「・・・分かった」

カッンッ、カッンッ、と牢の中で誰かの足音が響いて来る。その

足音の後には二組の足音が聞こえる。

その音を聞いて男は恐怖に満ちた顔を上げて、ガクガクと震えだした。ズキズキと痛む肩を右手で押さえながら、男は近づいて来る人達に見開いている目を向けた。

カッンッ、と目の前で立ち止まったその人物を、男は恐る恐る見上げた。

薄暗いこの牢の中でも分かる美しい茶髪。冷たく自分を見下ろしている碧眼に、男にも女にも見える中性的な美しい顔。それはまさに、完璧を人間として作り上げたかのような人物だった。

その完璧な人間に見覚えがあった男は、大きく目を見開いたままズザザッと跪いた。寒くないのにブルブルと身体の震えが止まらない。スッ、と目の前の人物が膝を折ってしゃがむのが聞こえた。彼の後ろにいる騎士二人は立ったまま冷淡に男を見下ろしていた。

「顔を上げろ」

氷のように冷たい声に男はバツと顔を上げた。

先程よりも震えが酷くなっている。

ファリスはみつともなくブルブルと震える男を汚いものをみるかのような目で見下ろした。

「なぜ、クレアを討った」

「は・・・っ？」

度肝を抜かれた表情をした男に、ファリスが目を細めた。

「とぼけるな。なぜクレアのことを矢で射抜いたのだと聞いている」

「……おう、王妃様、を、討つ、た。だ、だれが？」

「お前以外に誰がいるっ」

語尾を強めて言うファリスにひいい、と男が再び表情に恐怖を露にした。それでも必死に頭を横に振っている。

「わ、わた、く、わたくしが、く、クレアおう、ひを討つ、な、など、そんな、バカな」

「この後に及んでとぼけるつもりか、貴様」

「そんな、そんな、バカな、私、が、私が、クレア王妃を、討つなど……っ。そんな、そんな、なんで、違うやってない、そんなことしてない討ってない、なぜ、討つわけがない私が、そんな」

「……………」

狂った様にただ討ってない、やっていない、違う、を繰り返す男にファリスが少し目を見開いた。

何を言っているのだ。この男は。クレアが討たれた直後にルドが確かに引っ搦んで来た男だ。確かに弓を持っていて、確かに弓を放ったはずだ。

ここまで追いつめられて、とぼけるとは思えなかった。

何が、どうなっている。

「……どうなっているのだ」

牢の側にたっていた兵士に問いかけると、二人は困ったような表情を浮かべた。

「……先程からずっとこうなのです。捕まえられた時からただ震えてここに立っているだけでして、記憶がないようなのです」

「……バカな。殺されると分かっているでこう装っているだけではないのか」

「それが……」

兵士の一人が言葉を濁らせ、隣にいる兵士を見ると、彼がチラッと男を横目で見た。

「こやつの言っていることが真実なのです」

「……なんだと？」

「私の能力は陛下もご存知でしょう」

「……読心術か」

「はい」

「……なるほど」

説明されなくても分かる。

つまり、読心術を持っているこの兵士がこの男の心を読んだところ、言っていることは確かに真実だということになる。しかし、も

しそれが本当だとしたら不可解すぎるのだ。

何せこの男は確かにクレアを矢で討った。それは分かっている。城内の者が全員この男の顔は見ているし、やっていないといくら言った所で信じてもらえるわけがない。

しかし、この男が真実を告げているのならば、男はクレアを討ったがその記憶がないということになる。

一体、どういうことだ。

「・・・つまりこいつは真実を告げているのか。確かに」

「確かにそうです。今は恐怖しか覚えておらず、王妃様を討ったことに対して一切記憶がありません。ここがどこなのかも分かっています。ませんでした。陛下が訪れたことによって理解したようです」

「・・・この男は、自分の意思で矢を放ったわけではない、ということか？」

「・・・そういうことに、なります」

「・・・」

未だにブルブルと震えが止まらない男をファリスは冷たく見つめた。

彼の意思であつてもそうでなくともクレアを討ったことに違いはない。それを心底許す気にはならない。

しかし、彼の意思でないとすれば、一体誰の意思なのだ。

「・・・陛下、この城内で他人の思考を操ることが出来る人物はいますか？」

「・・・何？」

ディナルが少し思い込んでいるような表情を浮かべた。

「思考を操る人物がいるのならば、この男の意思でなくとも王妃様を討つことは可能だったのでは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思考を操る。つまりは思考に入り込んだ人間を思うがままに操るということだ。自分が操ったという証拠をどこにも残さず、ただその人物の暴走に結びつけることができる危険な能力。

考え始めて僅かな時間の後、ファリスがはっと顔を上げた。

「いるのですか？」

「・・・・・・・・いる。一人だけ、しかし・・・・」

「陛下。たとえばその人物が俺達にとって限りなく近い存在だとしても、大切な人間だったとしても、調べるべきです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思い詰めた様子のファリスにロードが心配そうに顔を覗き込んだ。

「陛下？ 誰ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はあ、とファリスが深く溜息をついた。

「．．．
シラだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9085k/>

ラキオス王国の王妃

2011年4月3日12時49分発行